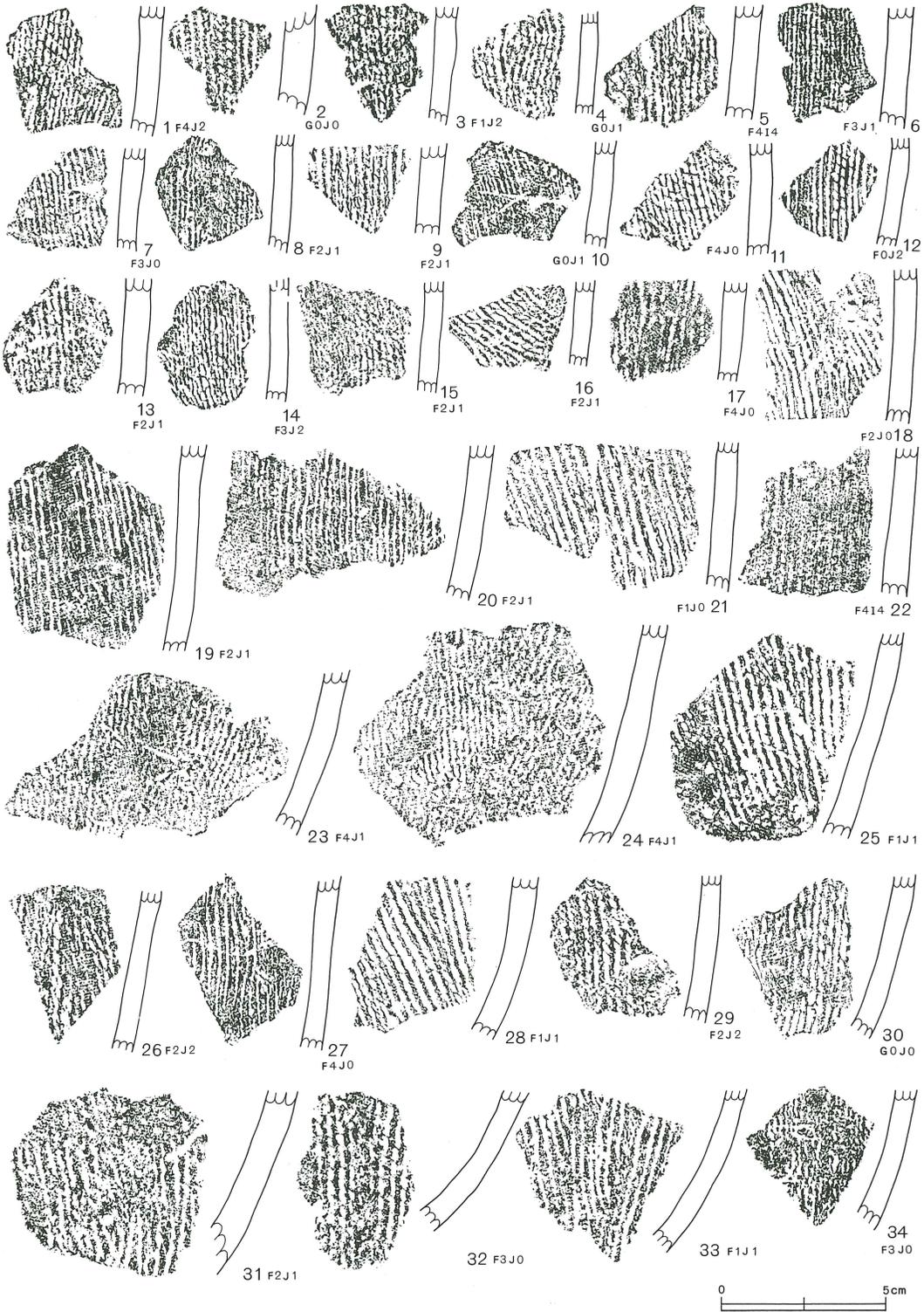
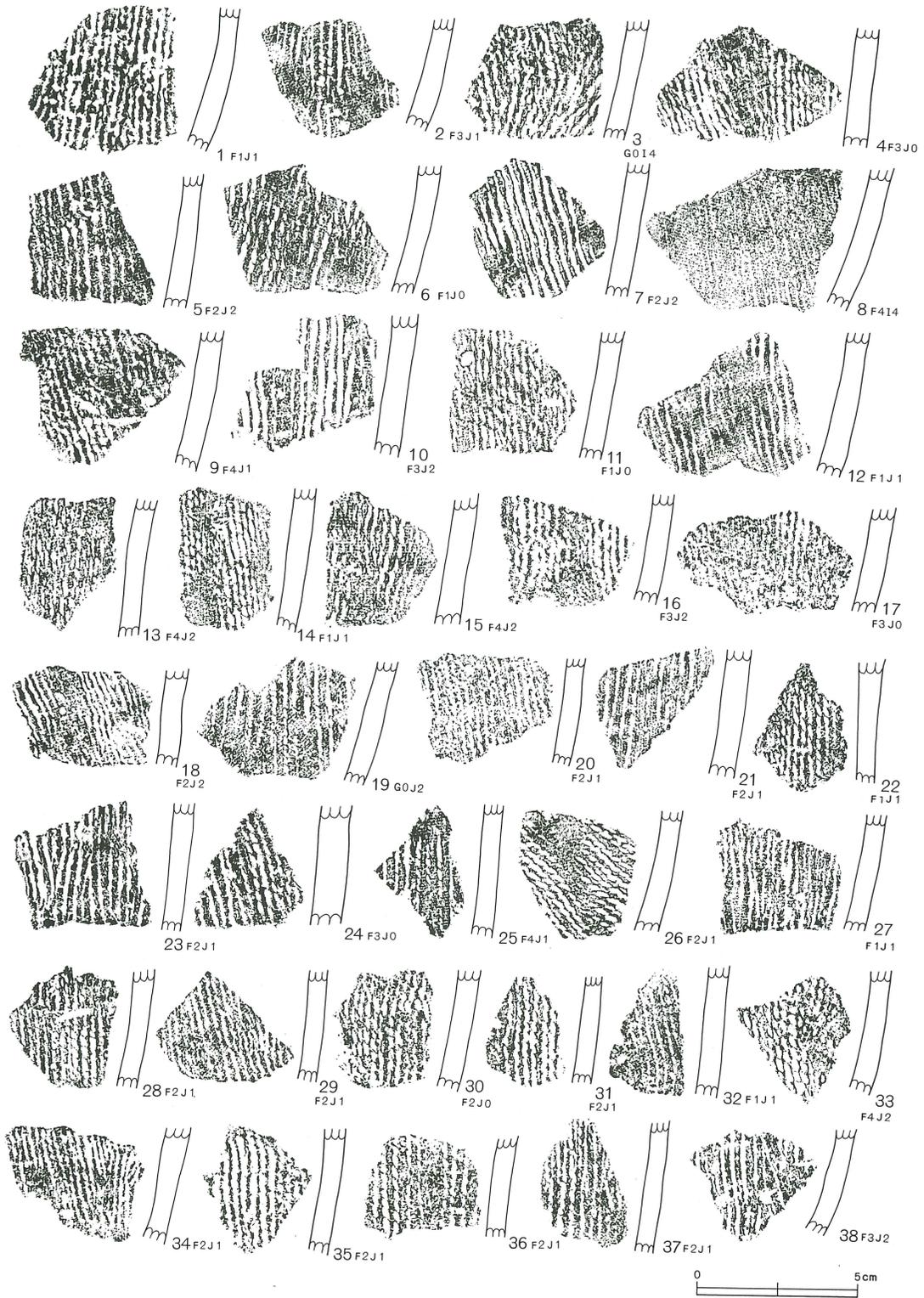


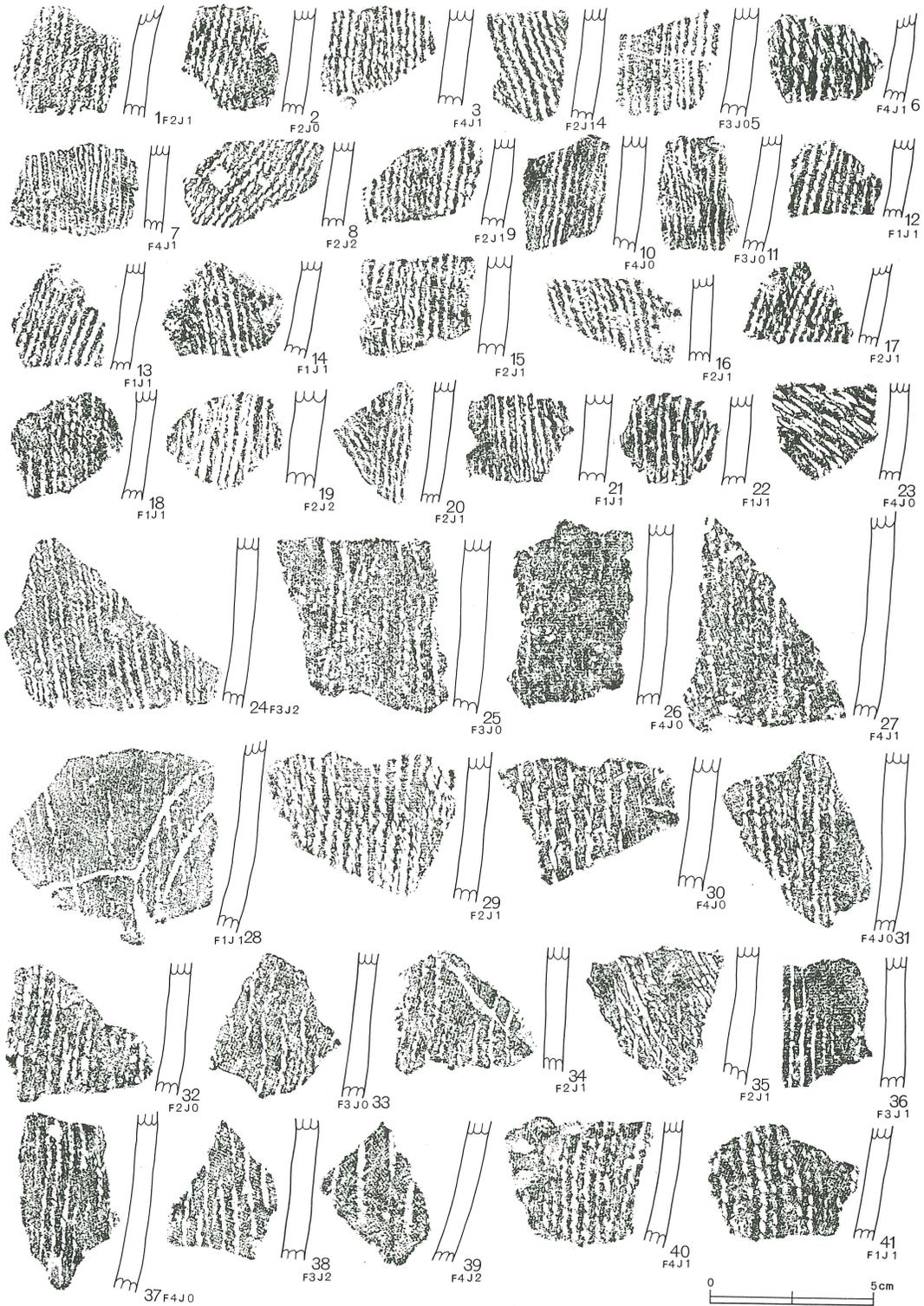
第120図 グリッド出土土器 (2)



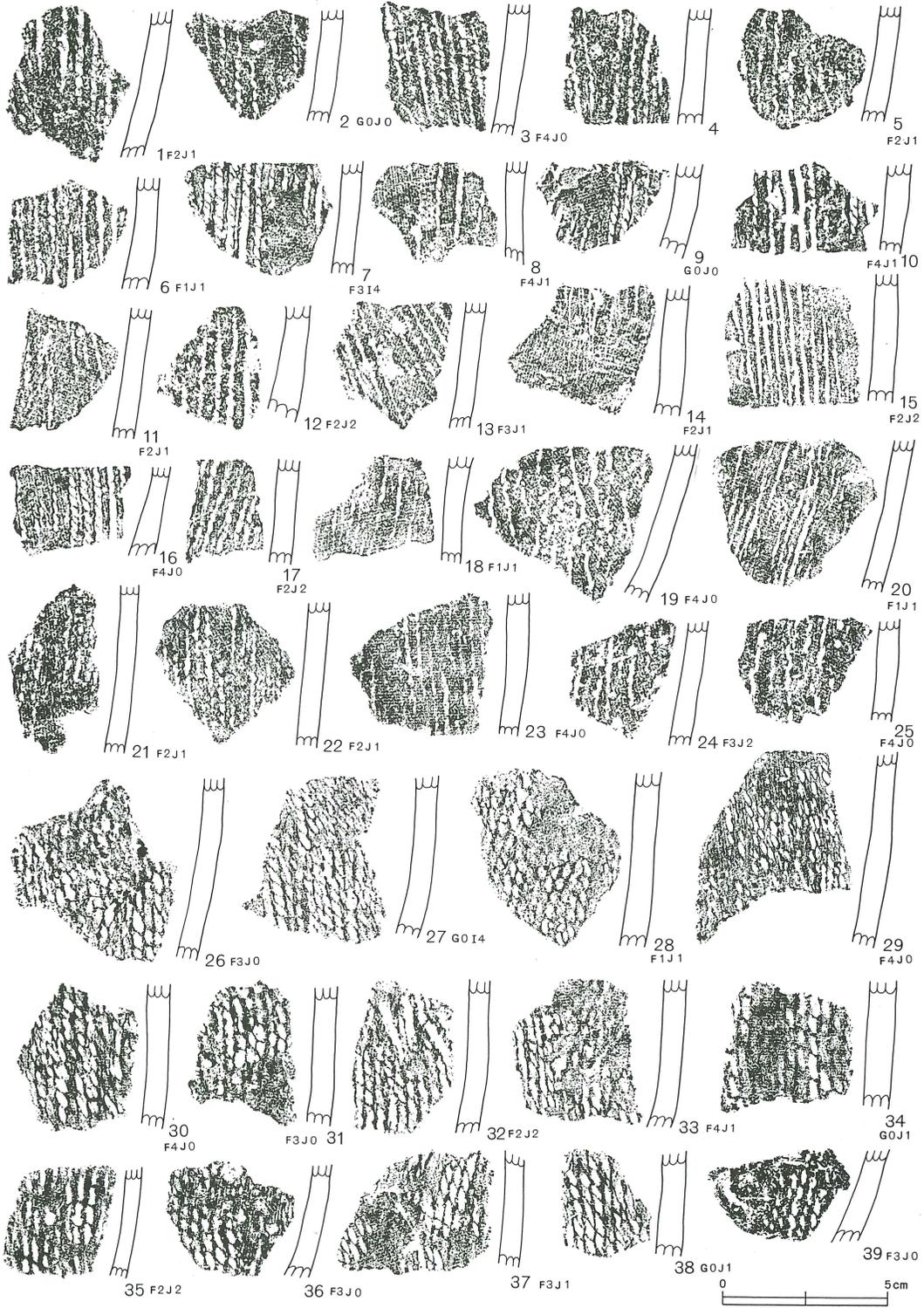
第121図 グリッド出土土器 (22)



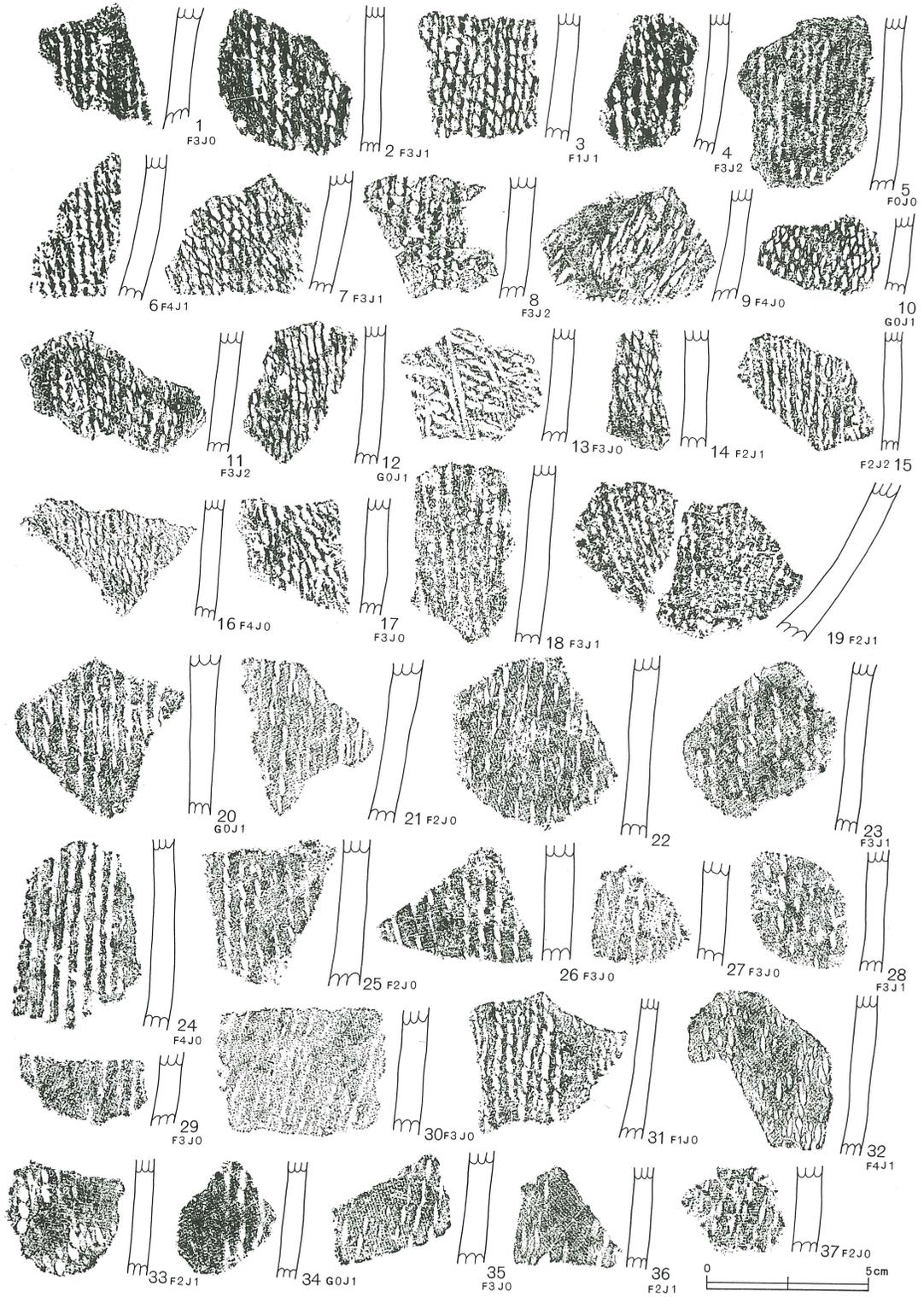
第122図 グリッド出土土器 (23)



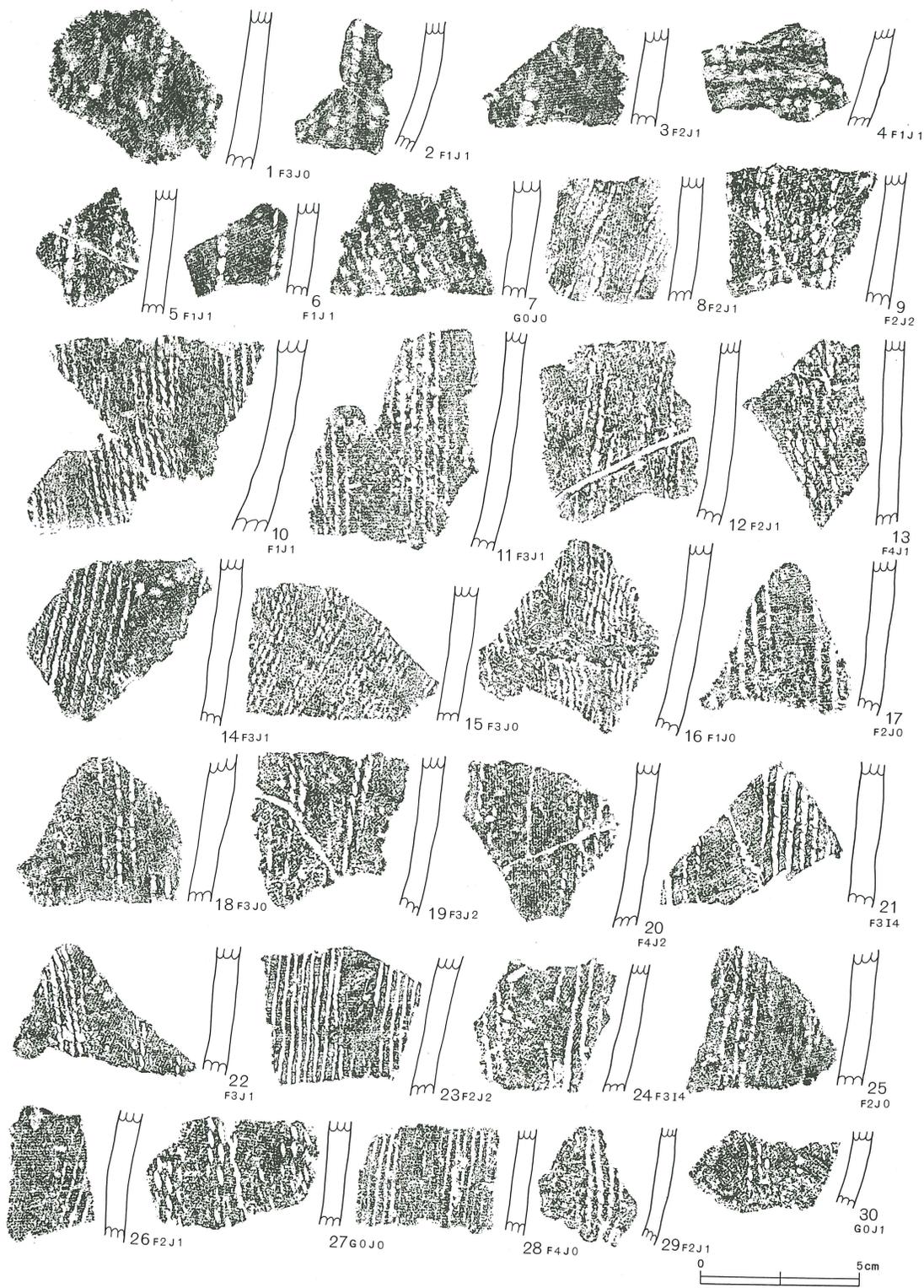
第123図 グリッド出土土器 (24)



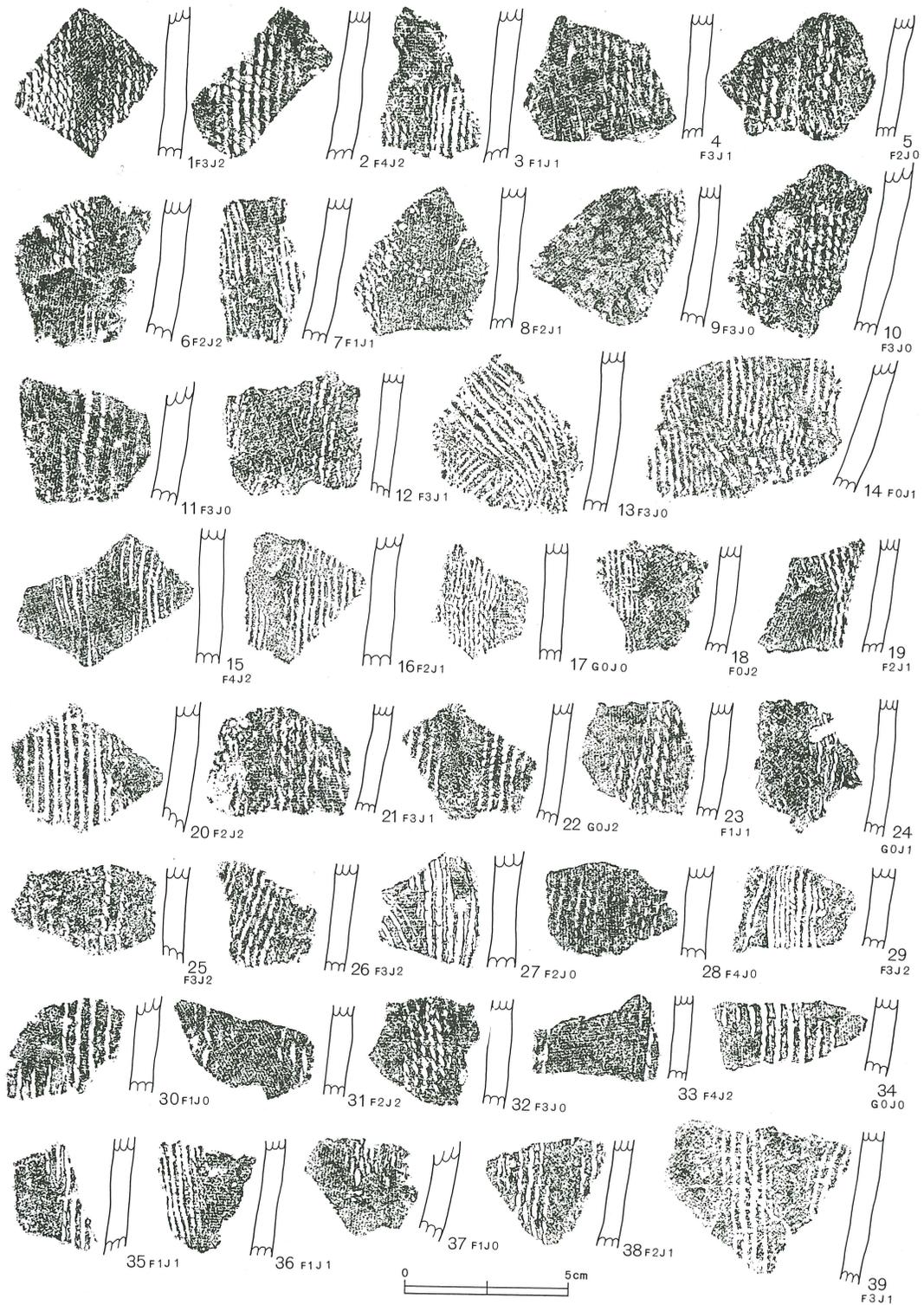
第124図 グリッド出土土器 (25)



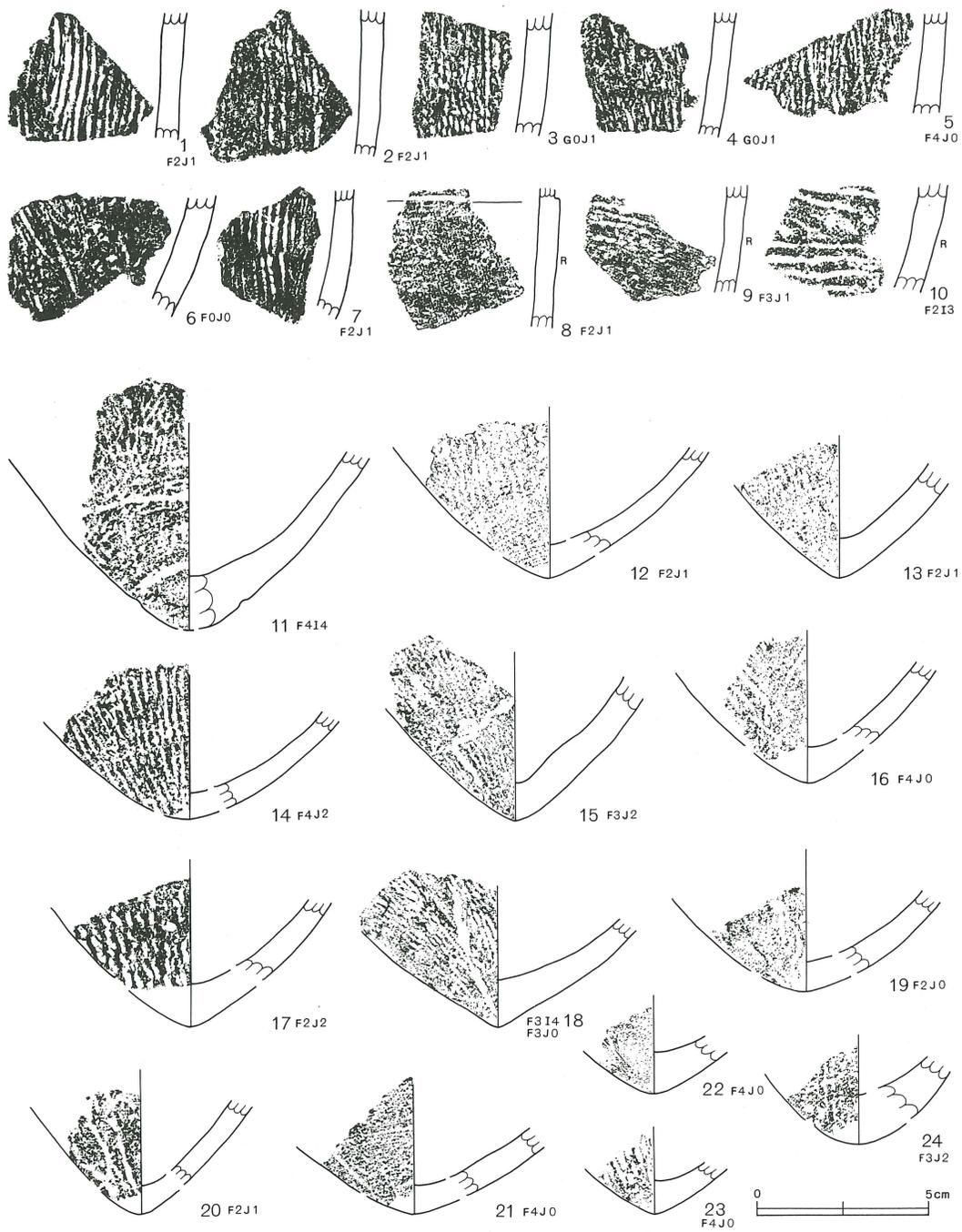
第125図 グリッド出土土器 (26)



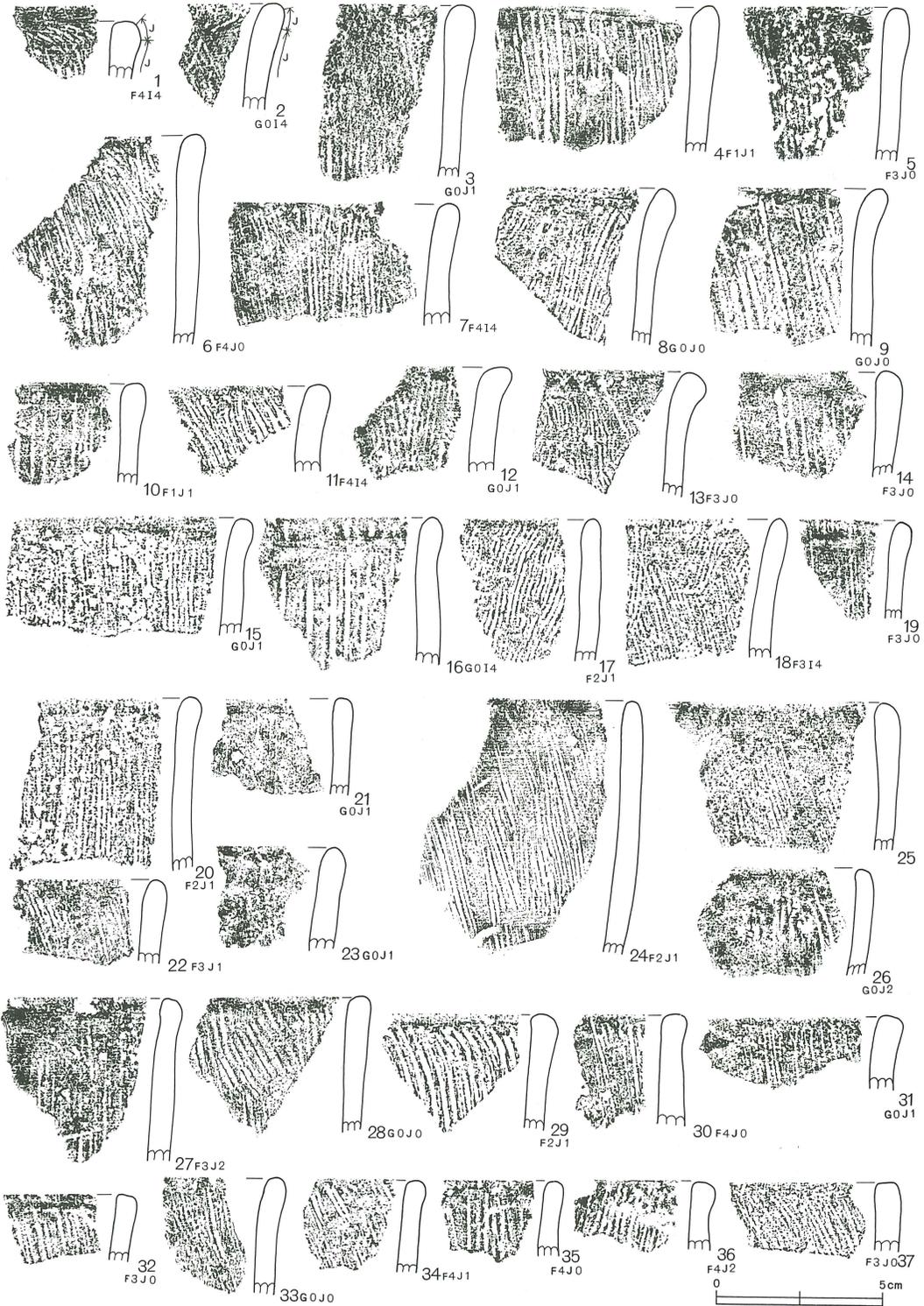
第126図 グリッド出土土器 (27)



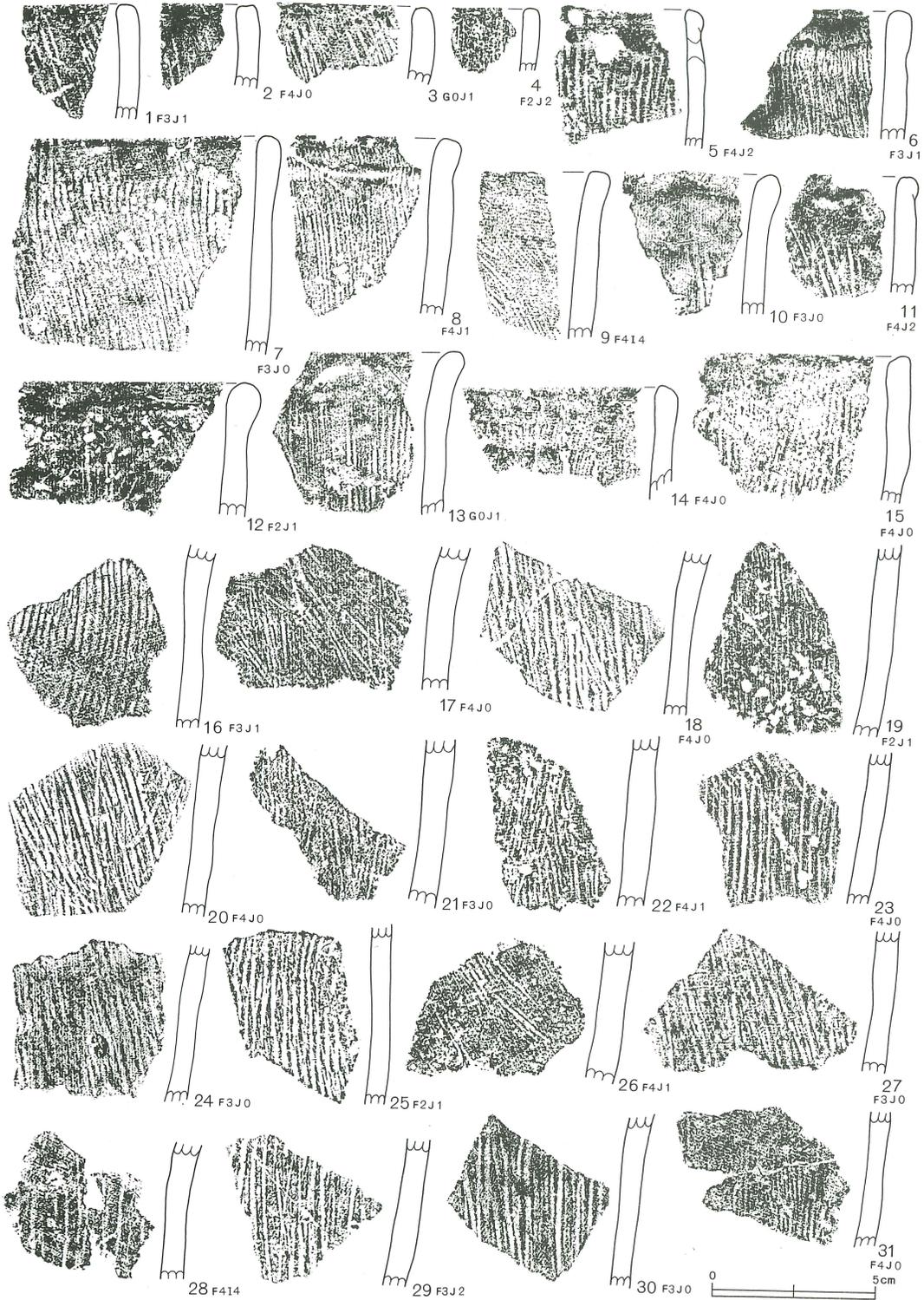
第127図 グリッド出土土器 (28)



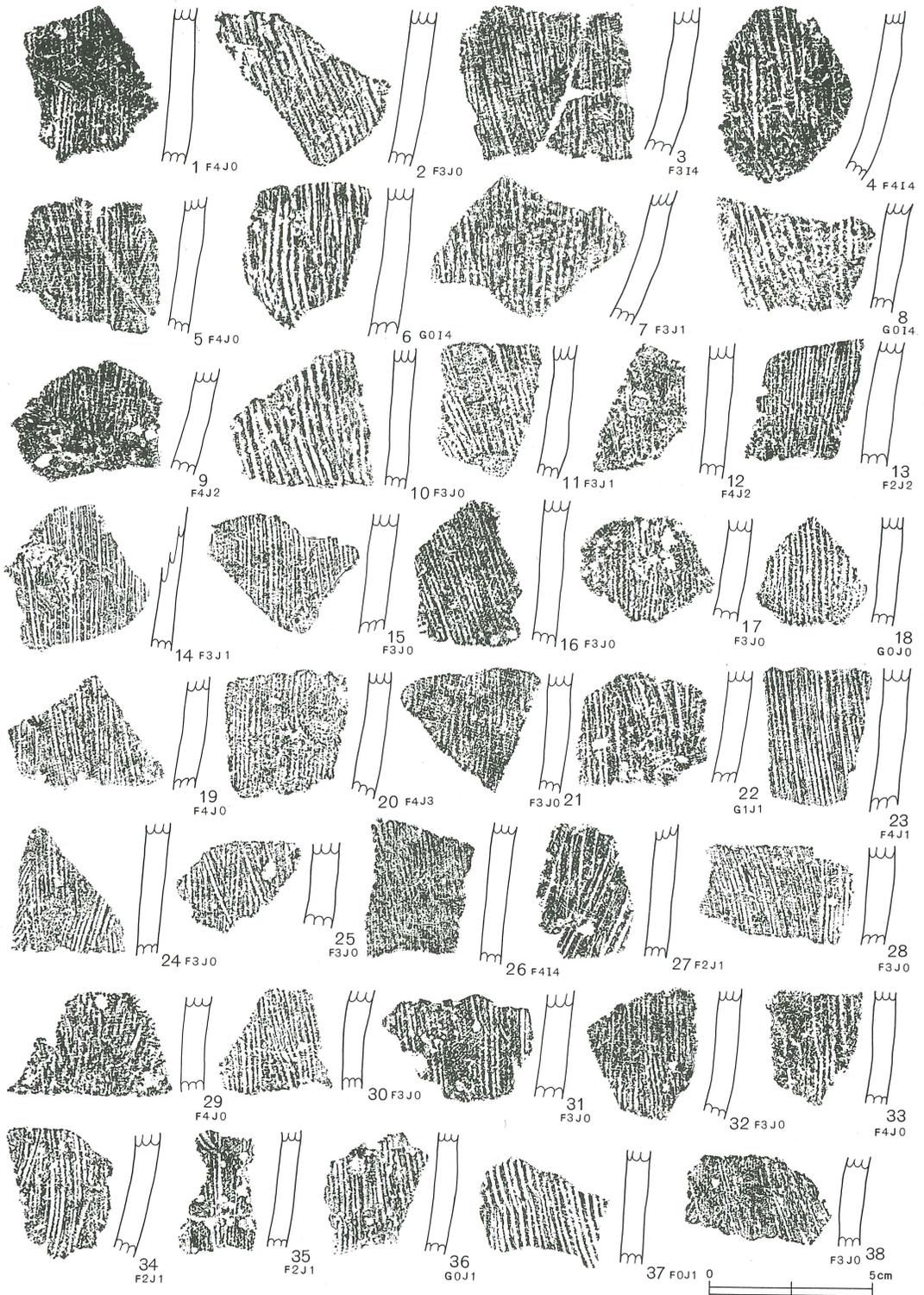
第128図 グリッド出土土器 (29)



第129図 グリッド出土土器 (30)

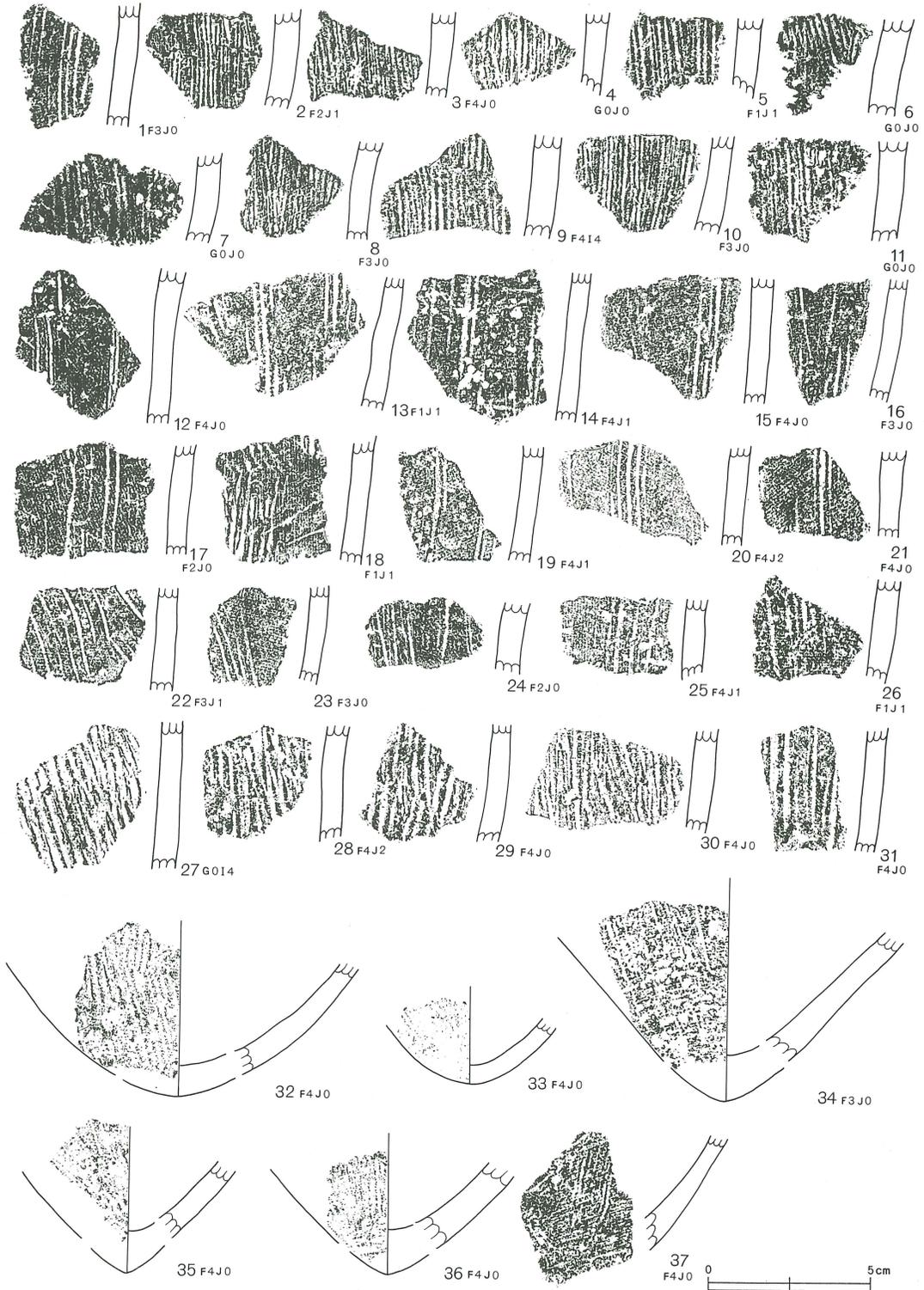


第130図 グリッド出土土器 (31)



第131図 グリッド出土土器 (32)

四反歩遺跡南地区



第132図 グリッド出土土器 (33)

## 第3類土器（第129図～第132図）

撚糸文を原体とする、絡条体条線文を施文する土器群を一括する。

## 第1種（第129図1、2）

条線文を異方向に施文すものを一括する。2点出土している。肥厚丸頭状口唇部が開く器形を呈し、口端部に斜位の条線文を施文する。胴部条線文との施文順位は不明である。第1類、第2類土器を参考にすると、最後に口唇部に施文するものと思われる。

## 第2種（第129図3～14）

肥厚丸頭状口唇部が外反及び開く器形を呈して、口端部から条線文を施文するものである。整形と施文の関係は、口端部からの条線文施文→口唇部整形の順であり、第1類第7種、第2類第6種に器形、整形等が類似する。

## 第3種（第129図15～23）

無肥厚丸頭状口唇部がやや開き気味に立つ器形を呈し、口端部から条線文を施文するものである。整形と施文の関係は、口端部からの条線文施文→口唇部整形の順となる。15、16は口唇部下に若干の括れ部を持ち、この類のなかでは異質な感じを受ける。16は条線文も太く間隔の開くものを施文するため、種が異なる可能性が高い。他は比較的細密な条線文を施文するものが多い。

## 第4種（第129図24～26、第138図7）

無肥厚丸頭状口唇部が内彎気味に立つ器形を呈し、口唇下にやや無文部を置いて口縁部に条線文を施文するものである。条線文は細密であるが、粗く施文するものが多い。24は内面整形も明瞭であり、擦痕状整形を縦位に施している。

## 第5種（第129図27～37）

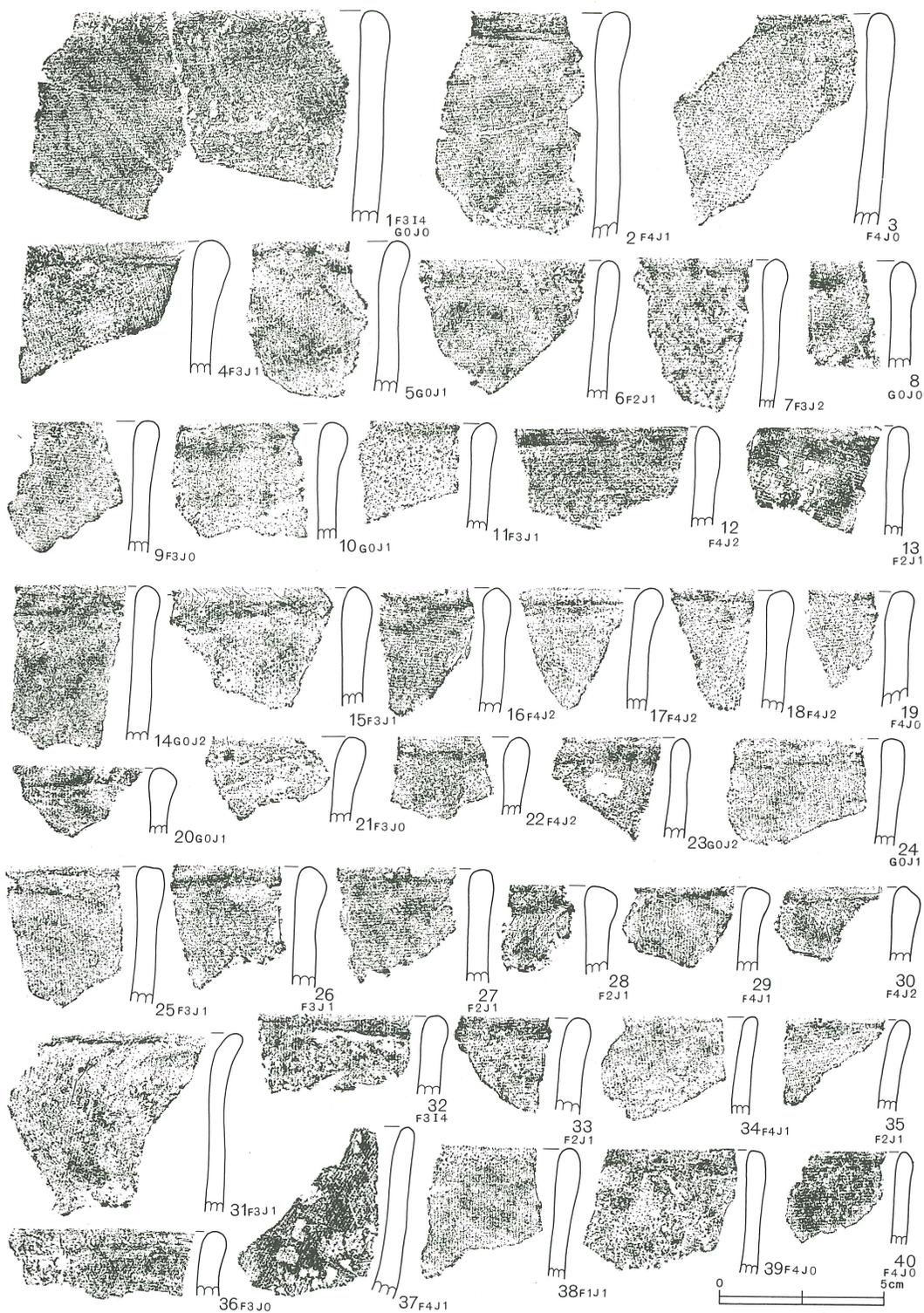
無肥厚角頭状口唇部が立つ器形を呈し、口端部から条線文を施文するものである。口唇部上端面の成形を強く行うため、口唇部下が潰れて内外面に若干の括れがみられるものがある。整形と施文の関係は口端部からの条線文施文→口唇部整形の順である。条線文は細密なものが多く、太く密なものも存在する。

## 第6種（第130図1～5）

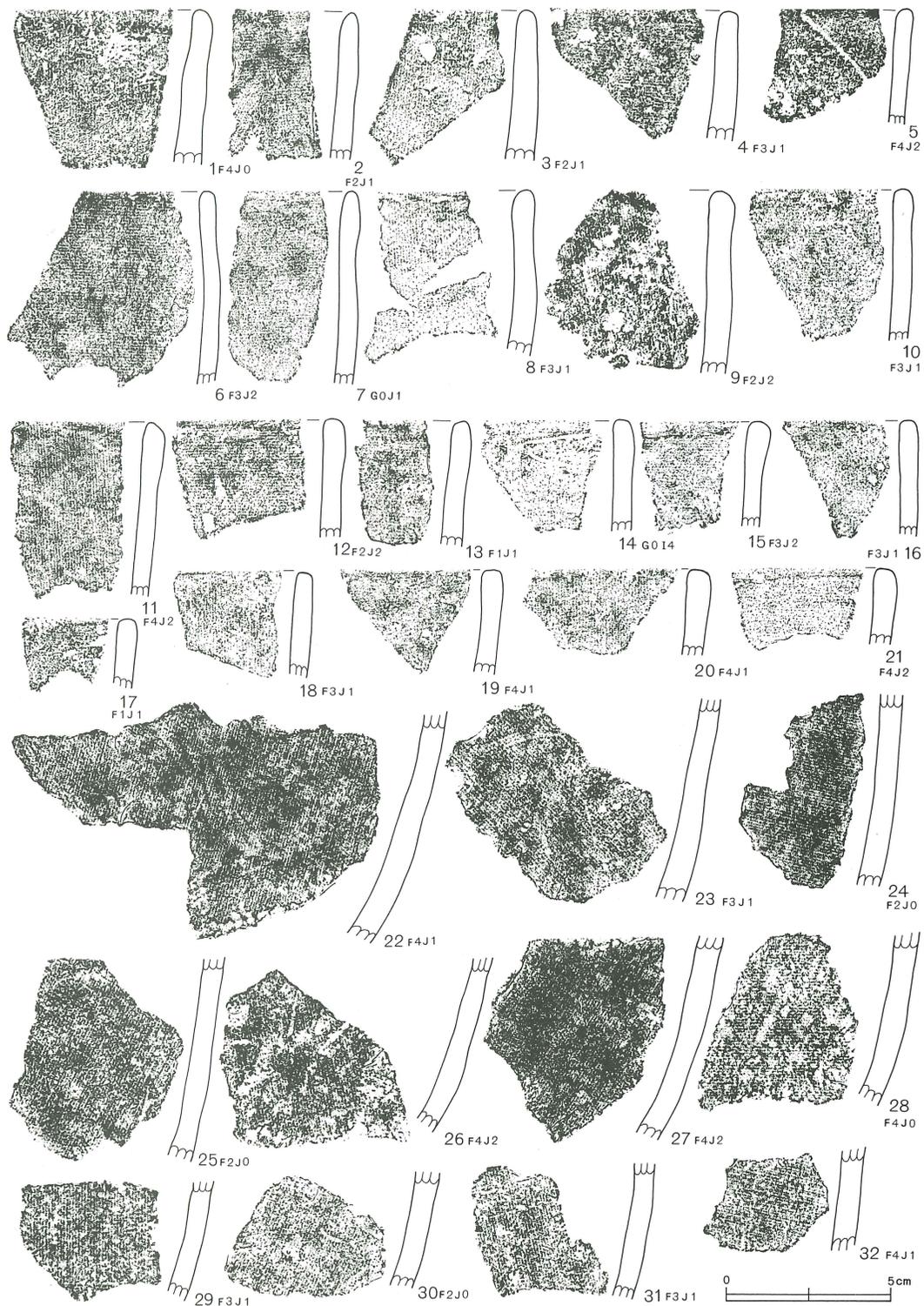
無肥厚角頭状口唇部が内彎する器形を呈し、口縁部から条線文を施文するものである。口唇部は上端面が平坦に成形されており、口唇下が内面側にやや潰れるものがある。器面を良く整形した後、条線文を施文している。条線文は間隔の開く粗いものが、口縁部に若干無文部をも設けて施文されている。5は薄い小形の土器で、口唇部は折り返し状となっている。口唇下に無文部を持ち、条間の開いた条線文を施文するものである。口縁部には、焼成後の補修孔を穿つ。

## 第7種（第130図6～8）

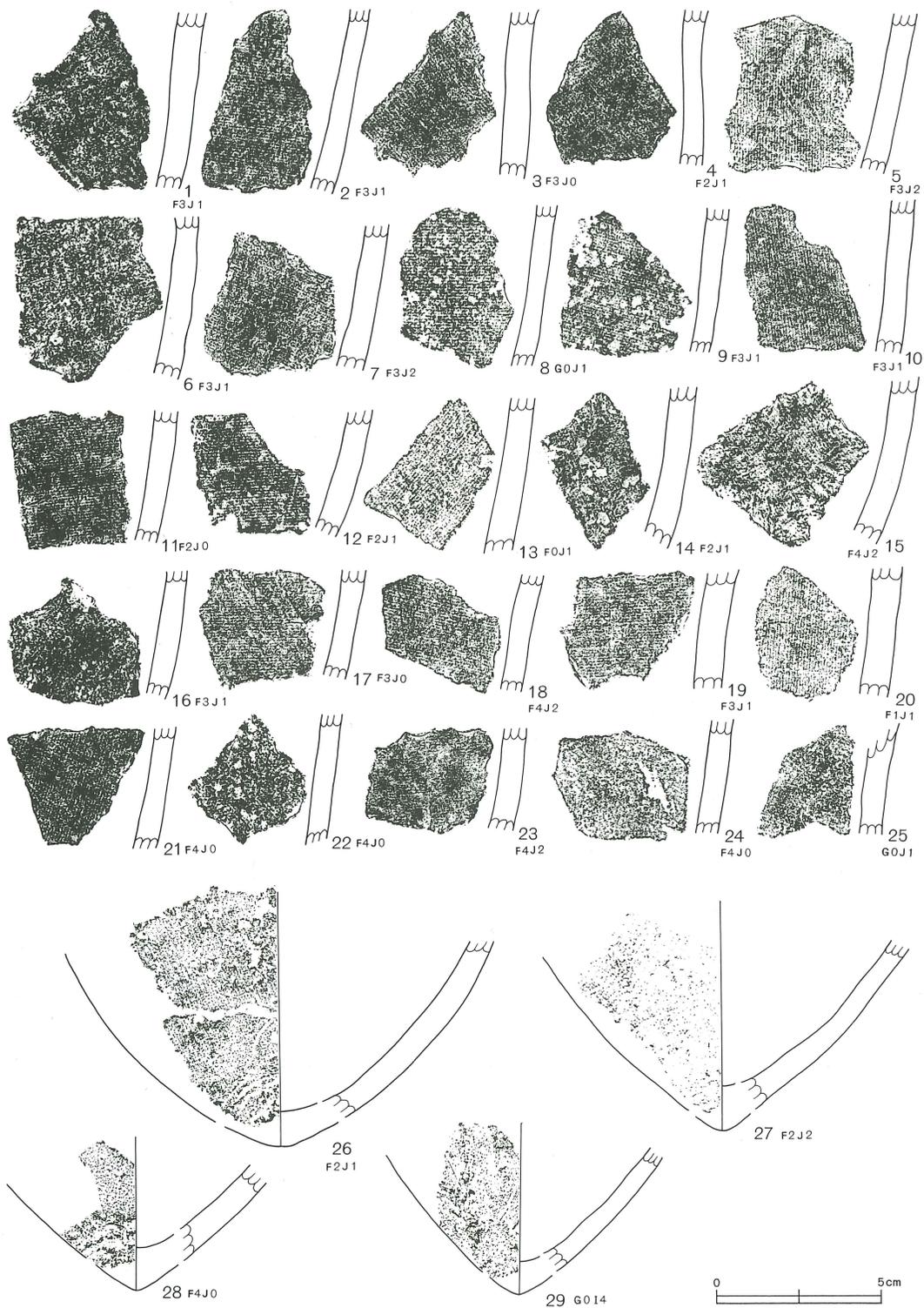
無肥厚角頭状口唇部がやや開く器形を呈し、口縁部を区画して条線文を施文するものである。口縁部の区画は撚糸文の原体である絡条体原体を押圧するもので、胴部の条線文施文後に押圧される。絡条体圧痕文は凹線状を呈し口縁部を区画するが、口縁部は無文帯とならず薄く条線文が残る。口唇部の条線痕文は意識的なものではなく、施文の途中で付いたものと判断される。本来なら、区画から上は撫で消されるものと思われる。



第133図 グリッド出土土器 (34)



第134図 グリッド出土土器 (35)



第135図 グリッド出土土器 (36)

**第8種** (第130図9～15)

口唇部に無文帯を持つ土器群を一括する。口唇部はやや肥厚する丸頭状が多く、開く器形のもを主体とするが、器形にバラエティーがある。条線文は口唇部から間隔を開けて施文するが、粗く施文されている。9は口唇部が角頭状を呈し、条線文を施文した後に口縁部に撫でを施して条線文を擦り消している。第2種第15・16種に類似する器形と整形である。

**第9種** (第130図16～31、第131図、第132図1～31)

条線文を施文する胴部破片を一括する。

- a. (第130図16～31、第131図、第132図1～11) 細密な条線文を施文するものを一括する。胎土は細砂粒を多く含むが緻密で、赤褐色を呈するものが多い。
- b. (第132図12～26) 間隔を開けて粗く帯状に施文するものを一括する。条線文は細く、やや間隔の開く原体で施文される。
- c. (第132図27～31) 比較的太くて密な条線文を施文するものである。

**第10種** (第132図32～37)

条線文を施文する底部破片を一括する。32、33は比較的丸底状を呈するが、他はやや尖底化が進んでいる。34、36、37には同心円状の線状痕が見られる。底部の形状は第2類に類似する。

**第4類土器** (第133図～第135図)

文様を施文しない無文土器を一括する。

**第1種** (第133図1～13)

肥厚丸頭状口唇部が外反もしくは開く器形を呈するものを一括する。口唇部は丁寧に整形されており、胴部内外面も丁寧な整形を施す。砂粒を多く含むが緻密な土器が多く、赤褐色を呈するものが多い。

**第2種** (第133図14～24)

肥厚丸頭状口唇部がやや立ち気味に開く器形を呈し、口唇外端部に面取り状の強い整形を施すものである。口唇部の整形は最終段階に行われるもので、著しいものは口唇部の形状が変わる程である。特徴的な口唇部整形である。

**第3種** (第133図25～30)

肥厚角頭状口唇部が外反もしくは開く器形を呈し、口唇上端部が平坦に整形される。口唇部整形が強いため、口唇部下の内外面が潰れているものがある。また、26、30は外削状の口唇部整形が著しいもので、丸頭状口唇部が角頭状の口唇部に変形したものと思われる。

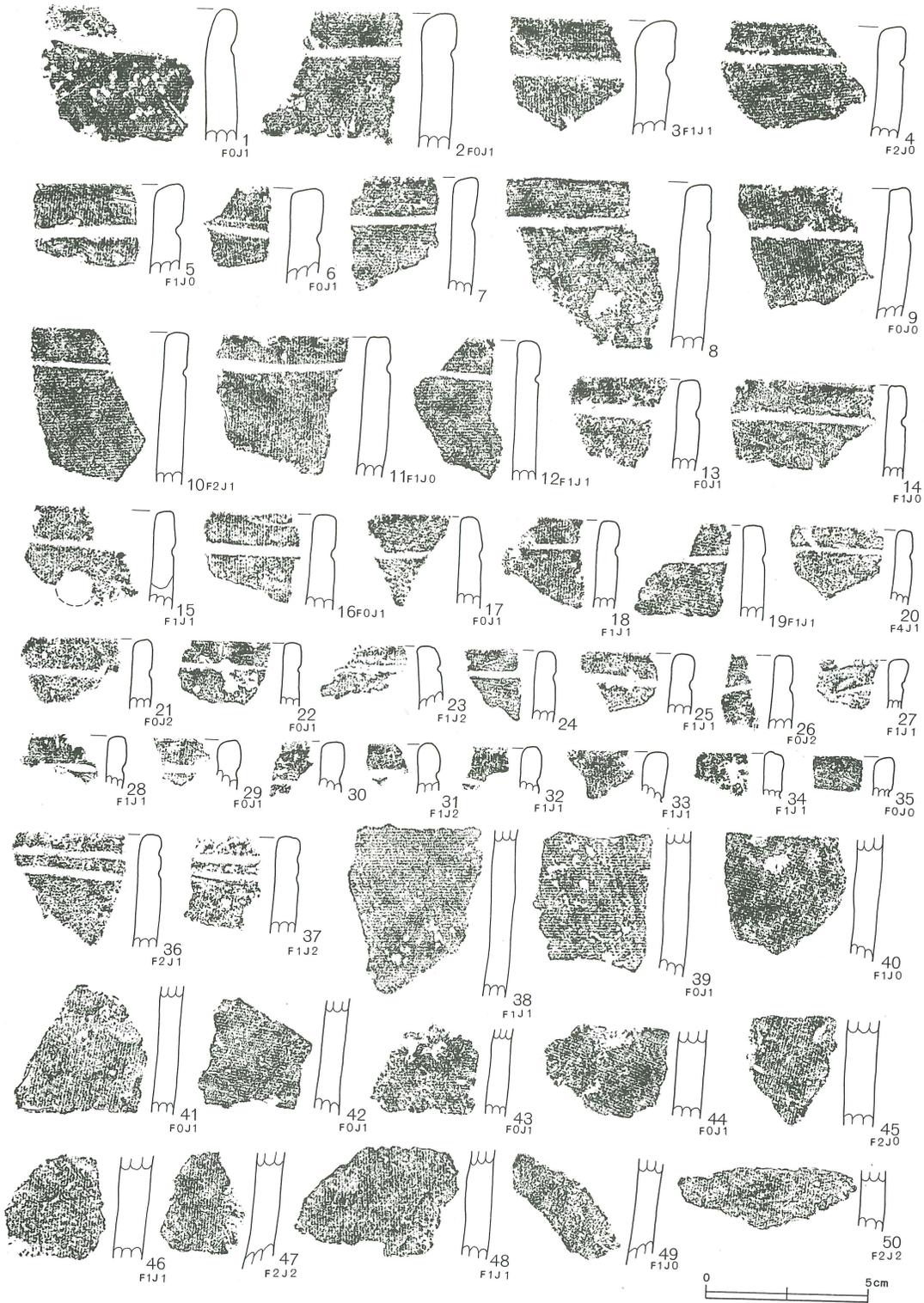
**第4種** (第133図31～40)

無肥厚丸頭状口唇部が外反もしくは開く器形を呈するものを一括する。

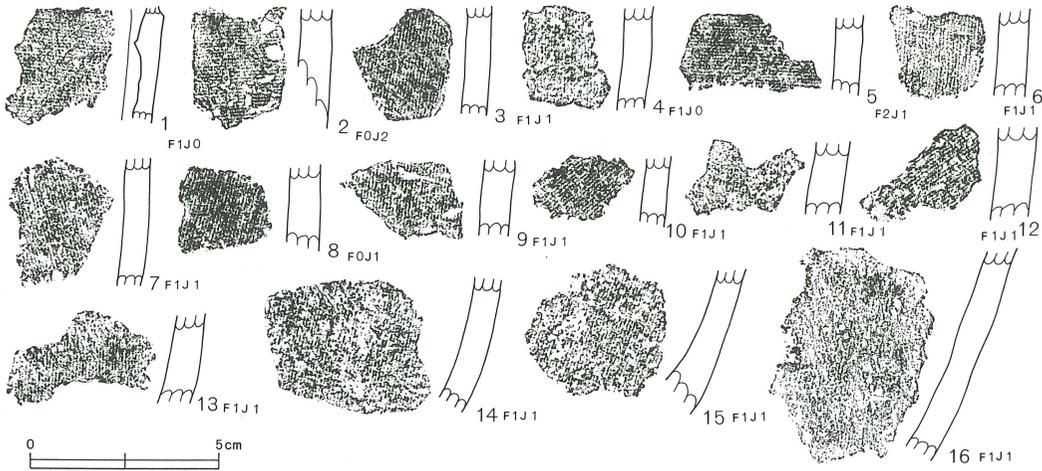
**第5種** (第134図1～5)

無肥厚丸頭状口唇部が直線的に立つ器形を呈するものである。口縁部には横位の撫で整形を施すものが多い。

**第6種** (第134図6～10)



第136図 グリッド出土土器 (37)



第137図 グリッド出土土器 (38)

無肥厚丸頭状口唇部が内彎気味に立ち、口唇部下に緩い括れ部を持つ器形を呈する。口唇部は細長い形状となり、外端面に丁寧な整形を施すものが多い。口唇部は外側に丸みを持つが、8の様に内側に膨らむものもある。概して整形は丁寧であり、括れ部分も横位の撫で整形が施されているものが多い。

#### 第7種 (第134図11～21)

無肥厚角頭状口唇部が直線的か内彎気味に立つ器形を呈する。口唇部上面の整形が強く施されるものは、口唇部下の内外面に潰れのみられるものがある。

#### 第8種 (第134図22～32、第135図1～25)

無文土器の胴部破片を一括する。全体的に器面整形は丁寧に行われており、砂粒等を多く含むが器面に浮き出していない。器面に擦痕状の整形を施すものは無く、撚糸文系土器群終末期の無文土器とは明瞭に識別される。

#### 第9種 (第134図26～29)

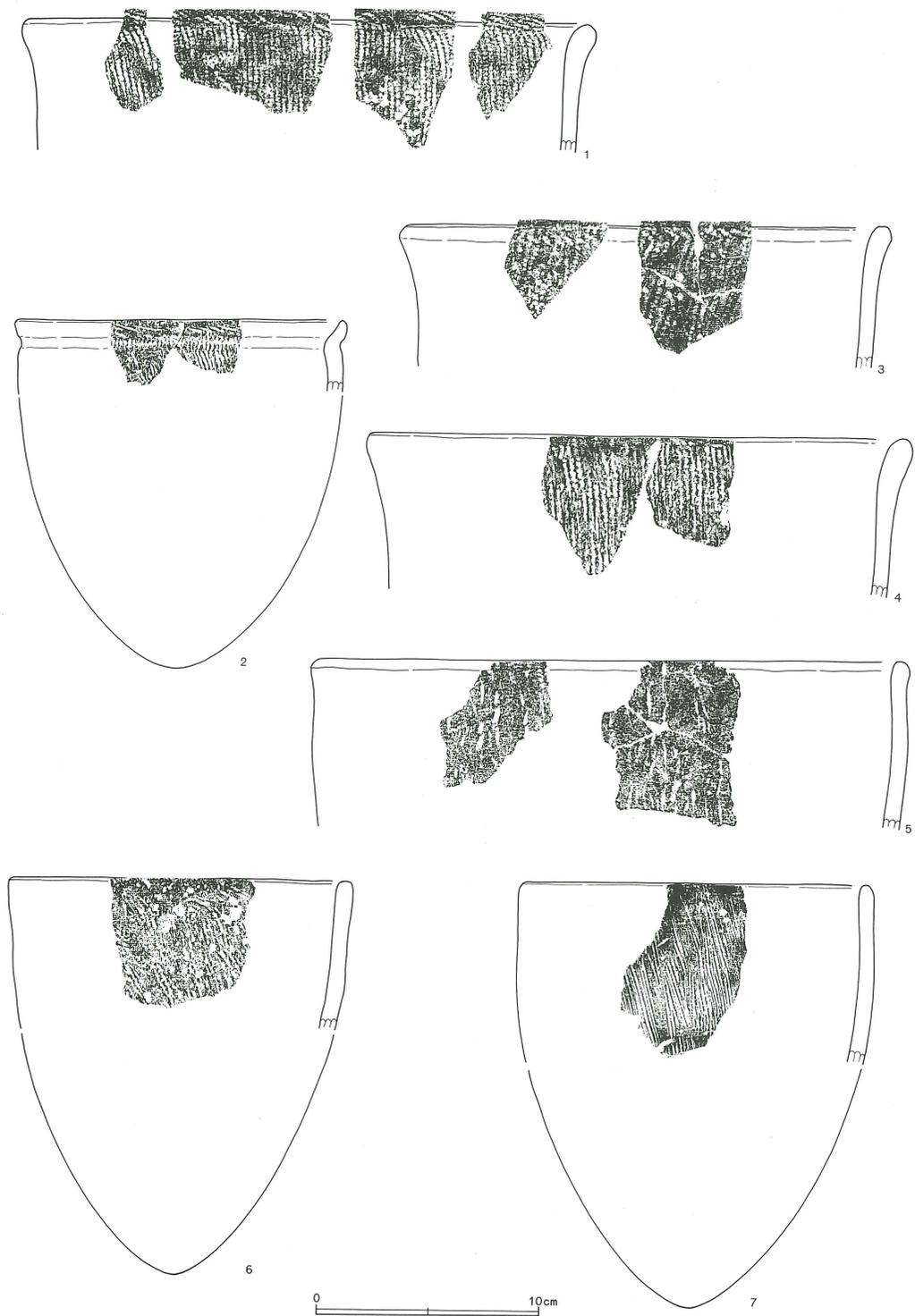
無文土器の底部を一括する。丸底に近いものもあるが、やや尖底の度合が進んだものが多い。26～28には同心円状の線状痕が付いている。

### 第5類土器 (第136図、第137図)

口縁部に沈線文を巡らす撚糸文系土器群終末期の無文土器を一括する。

#### 第1種 (第136図1～35)

無肥厚角頭状口唇部が若干開き気味に立つ器形を呈し、口縁部に1本の沈線文を巡らすものを一括する。1は口唇部が若干丸頭状を呈し、沈線文までの口唇部がやや外反する。口縁部の沈線文は凹線状を呈し、継ぎ足し状に施文するものである。砂粒、小礫等を含むが、器面整形は光沢がでる程丁寧に施す。口唇部から沈線文までは10mmを測る。2、3は角の取れた無肥厚角頭状口唇部を



第138图 捺糸文系土器群実測图

呈し、若干内彎気味に立つ器形を呈する。口唇部上面は内削状に傾斜し、口縁部に太目の沈線文を施文する。1 cm前後の器壁を持ち、3の口唇部が最も厚く13mmを測る。口唇部から沈線文までは2が11mm、3が12mmを測る。4は角頭状の口唇部がやや内彎気味に立つ器形を呈し、丸棒状工具による沈線文を口縁部に巡らせる。器壁は9 mm前後を測り、口唇部から沈線文までは10mmを測る。5、6は口唇部が若干内削状を呈し、5は太目の沈線文を施文する。口唇部から沈線文までは13mmを測る。6は半截竹管状工具の内面で沈線文を施文するため、反対側に浅い沈線文が平行に施文されている。口唇部から沈線文までは13mmを測る。7は口唇部から沈線文まで13mmを測る。8は角頭状の口唇部がやや開く器形を呈し、口唇部より胴部の器壁が厚くなるものである。口唇部が7 mm、胴部が10mmを測り、口縁部から沈線文までは12mmを測る。9も8同様口唇部が若干薄くなるもので、やや内彎する器形を呈する。口唇部から沈線文までは14mmを測る。

10、12は同一個体であり、角頭で板状の口唇部が立つ器形を呈する。口縁部には細く切り込む様な沈線文を巡らせる。口唇部から沈線文までは12mmを測る。11の沈線文は継ぎ足し部分で幅広となっている。口唇部から沈線文までは9 mmを測る。13は口唇部がやや丸味を帯びた角頭状を呈し、やや太目の凹線状の沈線文を施文するものである。口唇部から沈線文までは9 mmを測る。14はやや内彎状の器形を呈し、口唇部から10mmのところ沈線文を施文する。器壁がやや薄くなり口唇部で5 mm、胴部で6 mmを測る。15は補修孔が穿孔され、口唇部がやや内削状を呈する。他は、29～32がやや口唇部が丸味を帯るもので、32は口縁部が内彎する器形を呈する。口唇部から沈線文までは15が11mm、16が11mm、17が12mm、18が9 mm、19が9 mm、20が7 mm、21が10mm、22が8 mm、23が7 mm、24が7 mm、25が8 mm、26が11mm、27が9 mm、28が9 mm、29が8 mm、30が11mm、31が10mm、32が9 mm、33が15mm、34が13mm、35が10mmを測る。

### 第2種 (第136図36、37)

口縁部に2本の沈線文を施文するものを一括する。半截竹管状工具かもしくは2本の棒状工具を束ねた平行沈線文を口縁部に巡らすものである。口唇部は丸みを帯びた角頭状を呈し、若干内彎しながら立つ器形を呈する。37の平行沈線文は器面が湿っている状態で施文されており、胎土の寄りがみられる。両者とも細砂粒、白色粒子を多く含み赤褐色を呈する。器面は風化により荒れる。

### 第3種 (第136図38～50、第137図)

無文土器の胴部を一括する。一様に器表面に光沢がでるほど研磨を施すが、裏面は荒れているものが多い。胎土は細砂粒、小礫、白色粒子を多く含み、暗褐色粒子を必ず含んでいる。他に片岩等も含むが、緻密で堅靱なものが多い。色調は暗赤褐色を呈するものが多く、撚糸文系土器群中の無文土器とは識別が容易である。口縁部では器壁の厚さにバラエティーがあるが、胴部では比較的厚さが揃い、9 mm前後を測るものが多い。

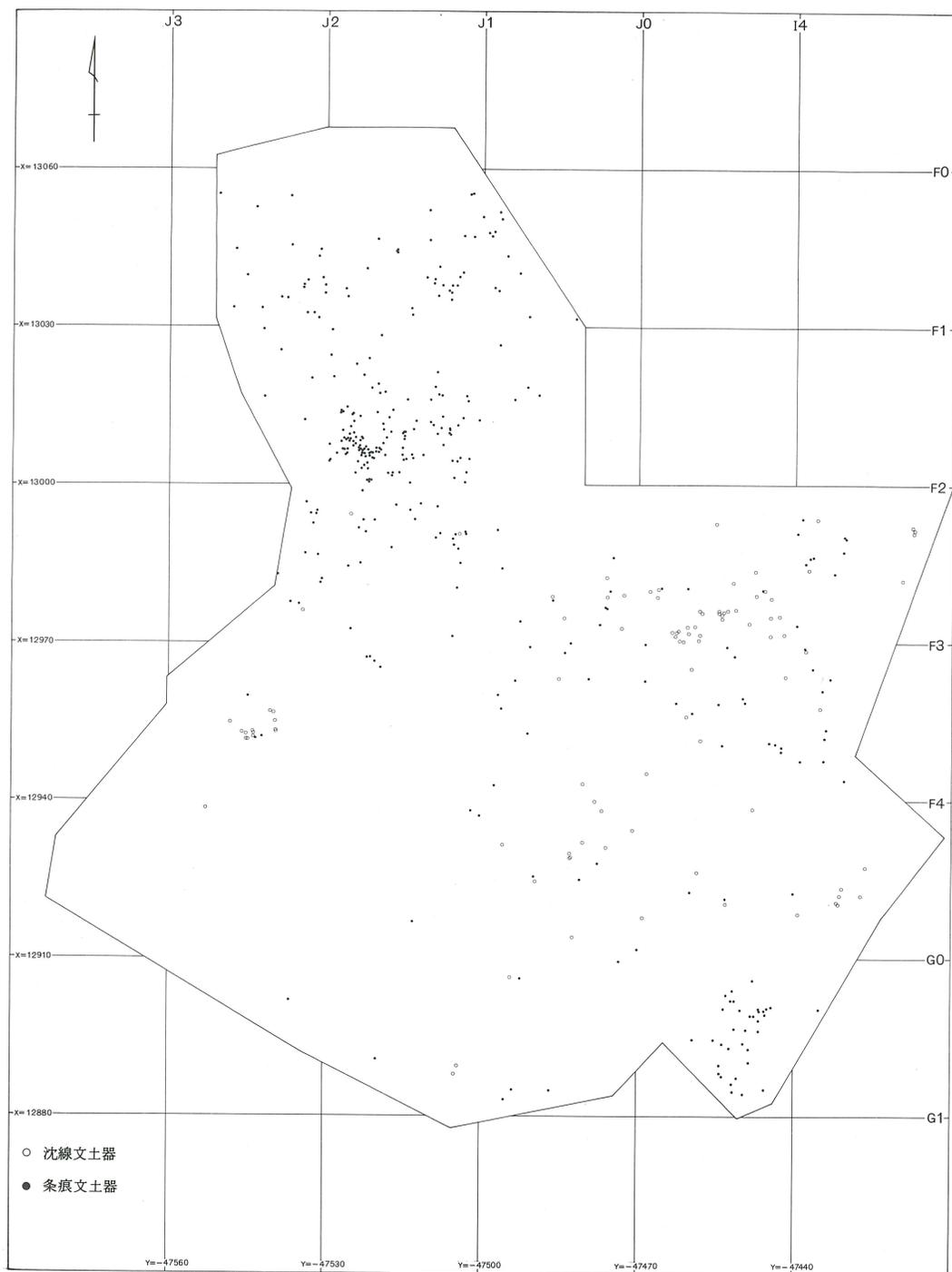
## 第II群土器 (第140図1～13)

沈線文系土器群とその周辺の土器群を一括する。

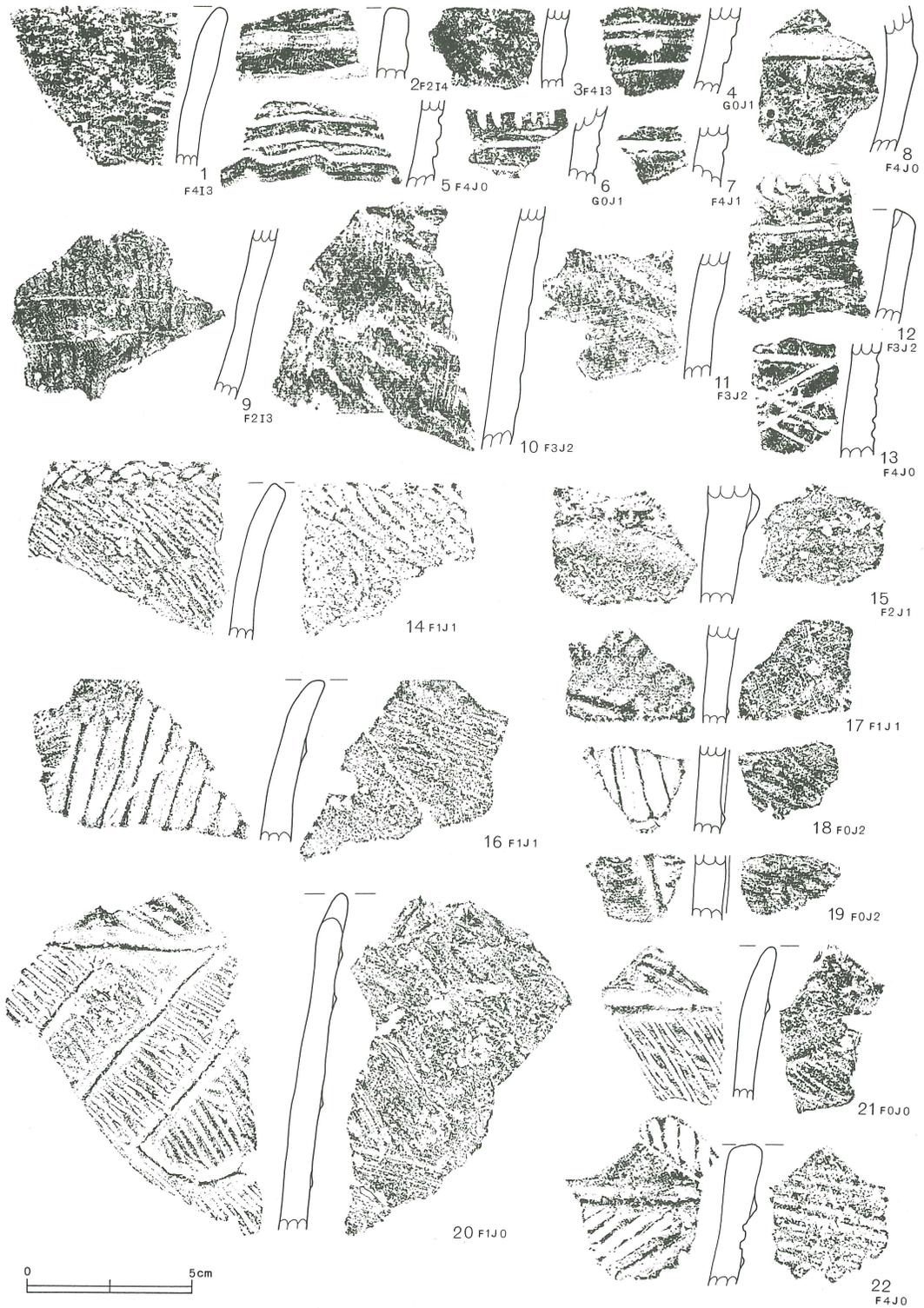
### 第1類土器 (1、3)

無文土器で器面に粗い擦痕状の整形を施すものである。1、3は同一個体であり、丸頭状の口唇

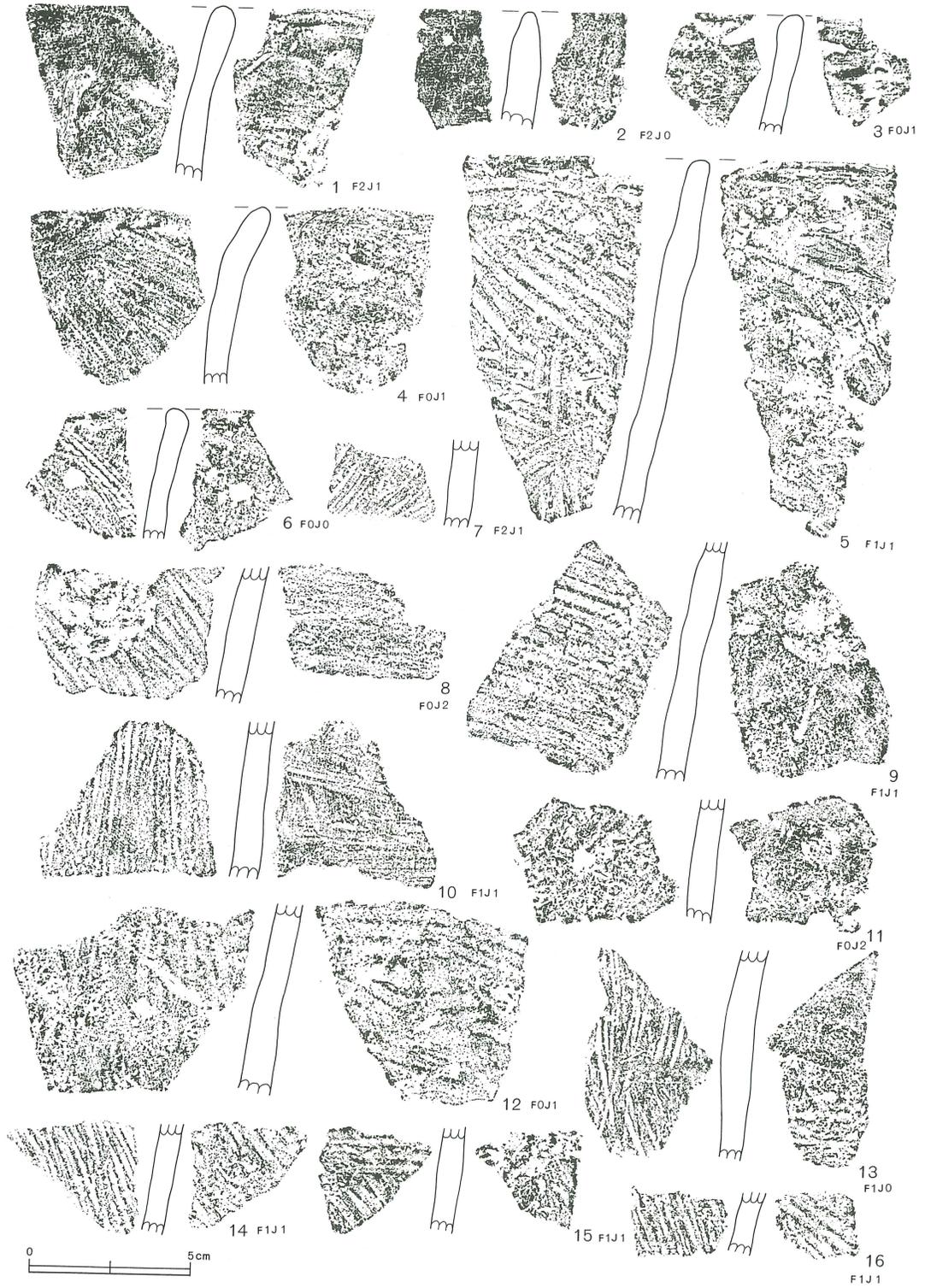
四反步遺跡南地区



第139図 沈線文・条痕文系土器群分布図



第140図 グリッド出土土器 (39)



第141図 グリッド出土土器 (40)

部が大きく開く器形を呈する。胴部には粗い凹凸状の整形を施し器面が波打つが、凹線状とはならない。裏面は丁寧に整形されるが、風化により荒れている。胎土は石英、長石類の砂粒を多く含み、白色粒子も多く含む。砂粒は風化によって器面に浮き出てざらついており、淡い橙褐色を呈する。沈線文期初頭に伴う無文土器と思われる。

## 第2類土器（2、4～11）

横位の沈線文を主体に施文する田戸下層式土器群を一括する。2は角頭状の口唇部が開く器形を呈し、幅広の凹線文状の沈線文を施文するものである。色調は赤褐色を呈する。4は丸棒状工具による単沈線文を横位に施文する底部付近の破片である。5、7は半截竹管状工具による平行沈線文を施文するもので、5は直線の平行沈線文の間に蛇行する平行沈線文を挟んで施文するものである。6は平行沈線文間に縦位の刻み列を挟んで施文するものであり、この刻み帯によって文様帯を重畳に区画する土器である。刻みは連続の刺突文状に施文する。8は太い凹線状の沈線文を施文するもので、沈線文部分で器形が若干変化し、文様帯を区画するものと思われる。9～11は輪積み時の凹凸を明瞭に残し、器面に粗く雑駁な撫で整形を施すものである。9は縦位の整形の上に浅い横位の沈線文を施文するもので、裏面に削り状の縦位の整形を施している。10、11は同一個体で無文である。横位の撫で整形の上から、縦位の擦痕状の整形を施している。

## 第3類土器（12、13）

田戸上層式土器を一括する。12は角頭状口唇部が内彎気味に開く器形を呈し、内外面に粗い横位の整形を施している。口唇部はやや外削状を呈し、口唇部内端に刻みを施している。胎土に砂粒、白色粒子を多く含むが堅緻な土器で、暗赤褐色を呈する。

13は平行沈線文で格子目状のモチーフを施文するものであり、重層する横位の平行沈線文を施文した後に、格子目文を描出する。

## 第Ⅲ群土器（第140図14～22、第141図、第143図1～11）

条痕文系土器群を一括する。

### 第1類土器（第140図14）

絡条体圧痕文を施文するものである。14は角頭状口唇部が開く器形を呈し、口唇部に斜位の刻目状に絡条体圧痕文を施文する。器内外面に明瞭な条痕文を施文するが、条痕文は絡条体条痕文の可能性がある。絡条体圧痕文の原体は1段Lである。胎土に白色粒子を多く含み、繊維を若干含んでいる。色調は赤褐色を呈する。本土器は第38号土壇出土土器と接合する。

### 第2類土器（第140図15）

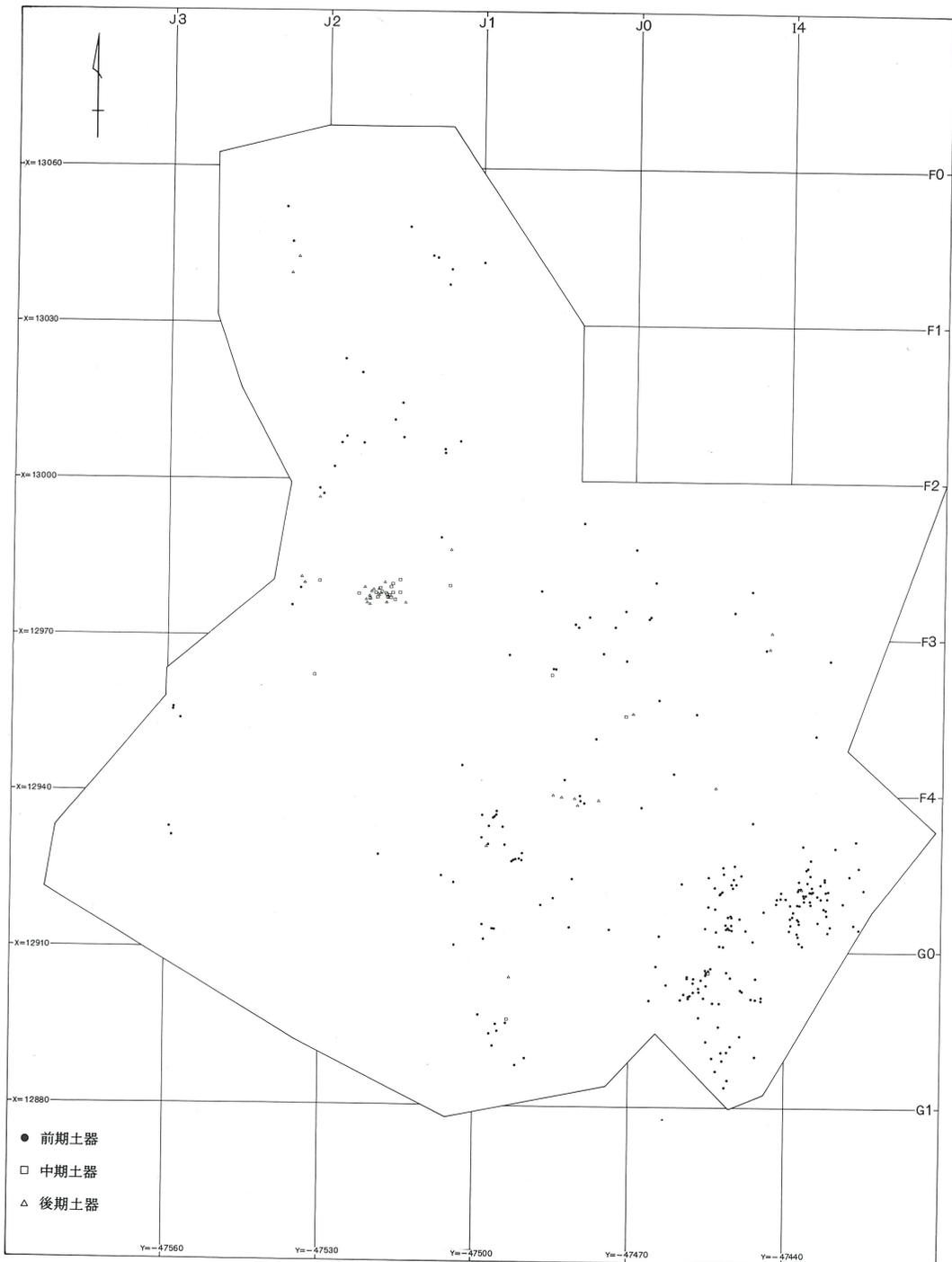
隆帯文を施文するものを一括する。15は太くて断面がかまぼこ状を呈する隆帯文を、横位に施文するものである。胴部下半の破片であり、隆帯文脇に浅い凹線状のナヅリを施している。胎土に白色粒子を多く含み、繊維を少量含む。器壁が厚く、12mm前後を測り、明橙褐色を呈する。

### 第3類土器（第140図16～22）

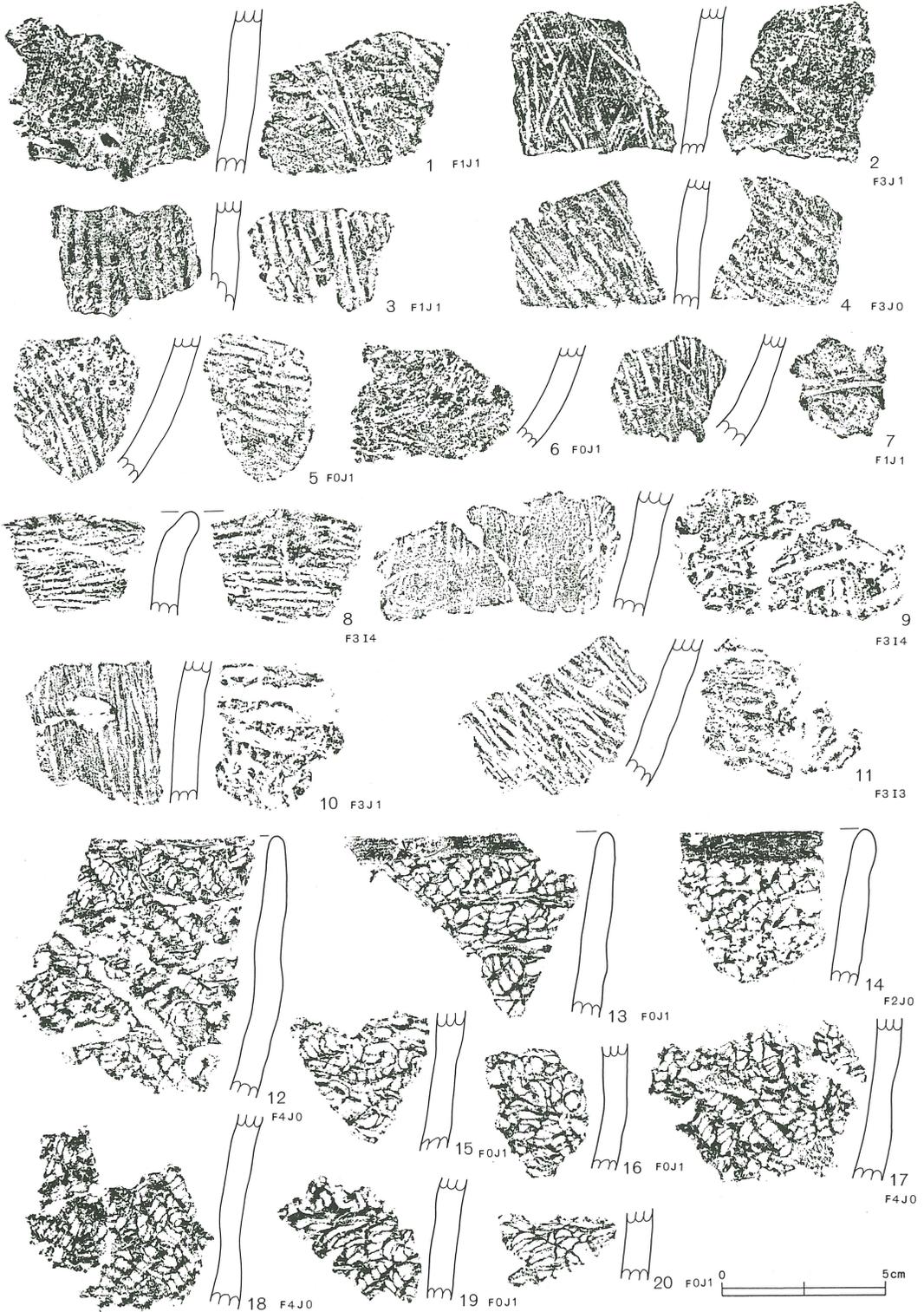
細隆起線文を施文するものを一括する。

#### 第1種（16～19）

四反歩遺跡南地区



第142図 前・中・後期土器群分布図



第143図 グリッド出土土器 (4)

#### 四反歩遺跡南地区

細隆起線文区画内に細隆起線文を充填施文するものである。16は口縁部が開き、胴部で段を持つ器形を呈し、口唇部から集合の細隆起線文を垂下する。17～19は細隆起線文の幾何学的な区画内に集合細隆起線文を充填施文するものである。いずれも繊維を少量含み、擦痕状整形が施される。

##### 第2種 (20～22)

細隆起線文区画内に集合沈線文を充填施文するものである。いずれも口縁部で、波状口縁を呈する。文様帯は細隆起線文で水平に分帯し、2本対の細隆起線文で区画を行い、区画内に集合沈線文を充填施文する。22は口唇部に刻みを施し、太い沈線文を施文している。表裏面とも条痕文を施文する。胎土に少量繊維を含む。

##### 第3種 (第141図、第142図1～7)

条痕文のみを施文する無文土器を一括する。第141図1～4は条痕文ではなく擦痕文状の整形が施される口縁部破片である。口唇部は丸頭状を呈するが、2は先細り状となる。5、6は条痕文を施文する口縁部で、丸頭状口唇部が開く器形を呈する。他は胴部破片で、内外面に条痕文を施文しており、いずれも繊維を含む。

##### 第4種 (第143図8～11)

繊維を多量に含み、脆弱な条痕文土器を一括する。条痕を明瞭に施文し、胎土は純粹に近いものである。早期終末の可能性が高い。

#### 第Ⅳ群土器 (第143図12～20、第144図、第145図1～21)

前期の土器群を一括する。

##### 第1類土器 (第143図12～20)

関山式土器を一括する。いずれも文様を施文せず、ループ縄文を多段に施文する土器群で、繊維を多く含み、内面整形を丁寧に行うものである。

##### 第2類土器 (第144図1～3)

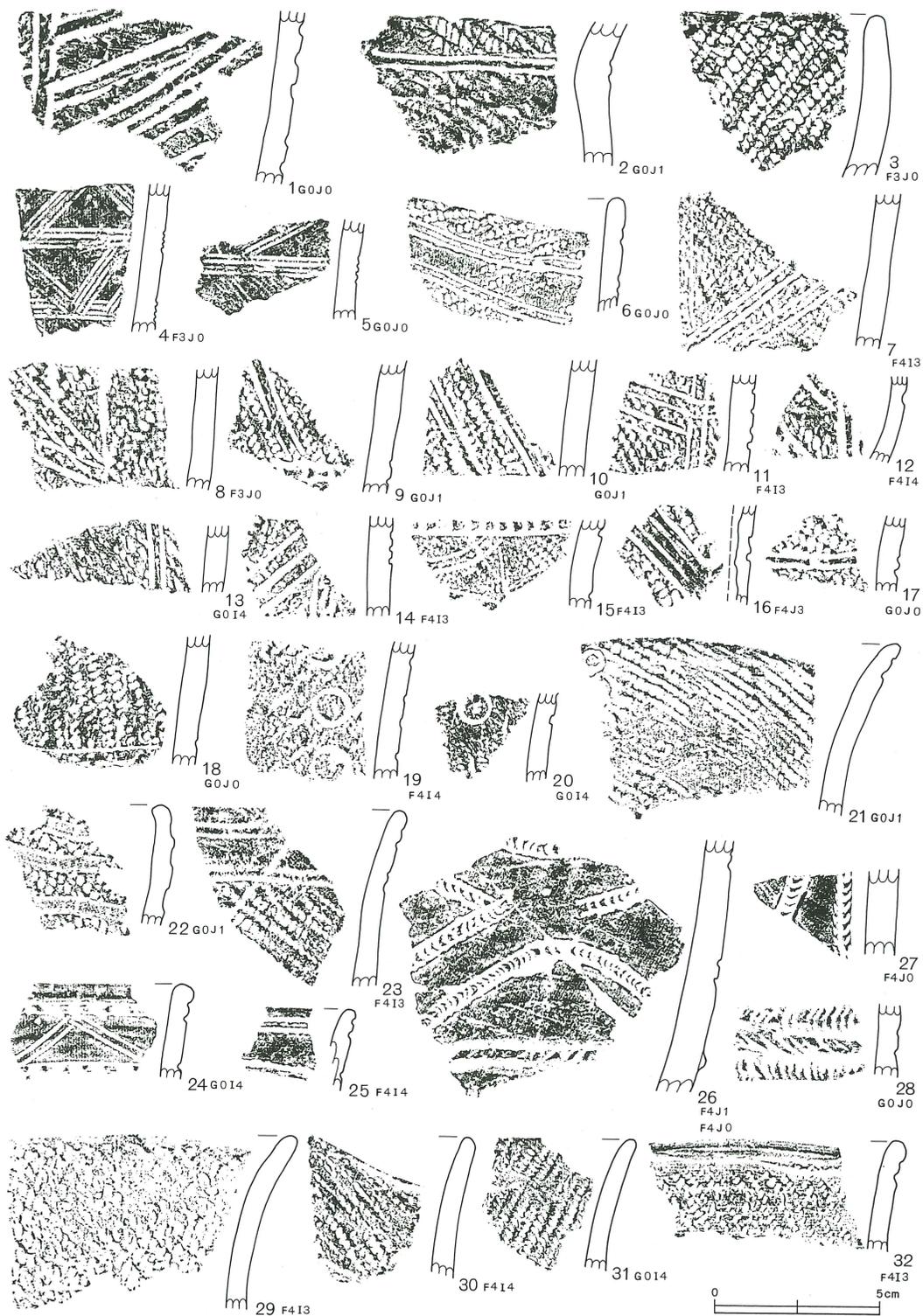
黒浜式土器を一括する。1は肋骨文系の土器で繊維を多く含む。2は胴部で括れる器形を呈し、平行細沈線文を施文する。3は付加条縄文を施文する口縁部破片で、赤褐色を呈する。いずれも繊維を多く含む。

##### 第3類土器 (第144図4～25)

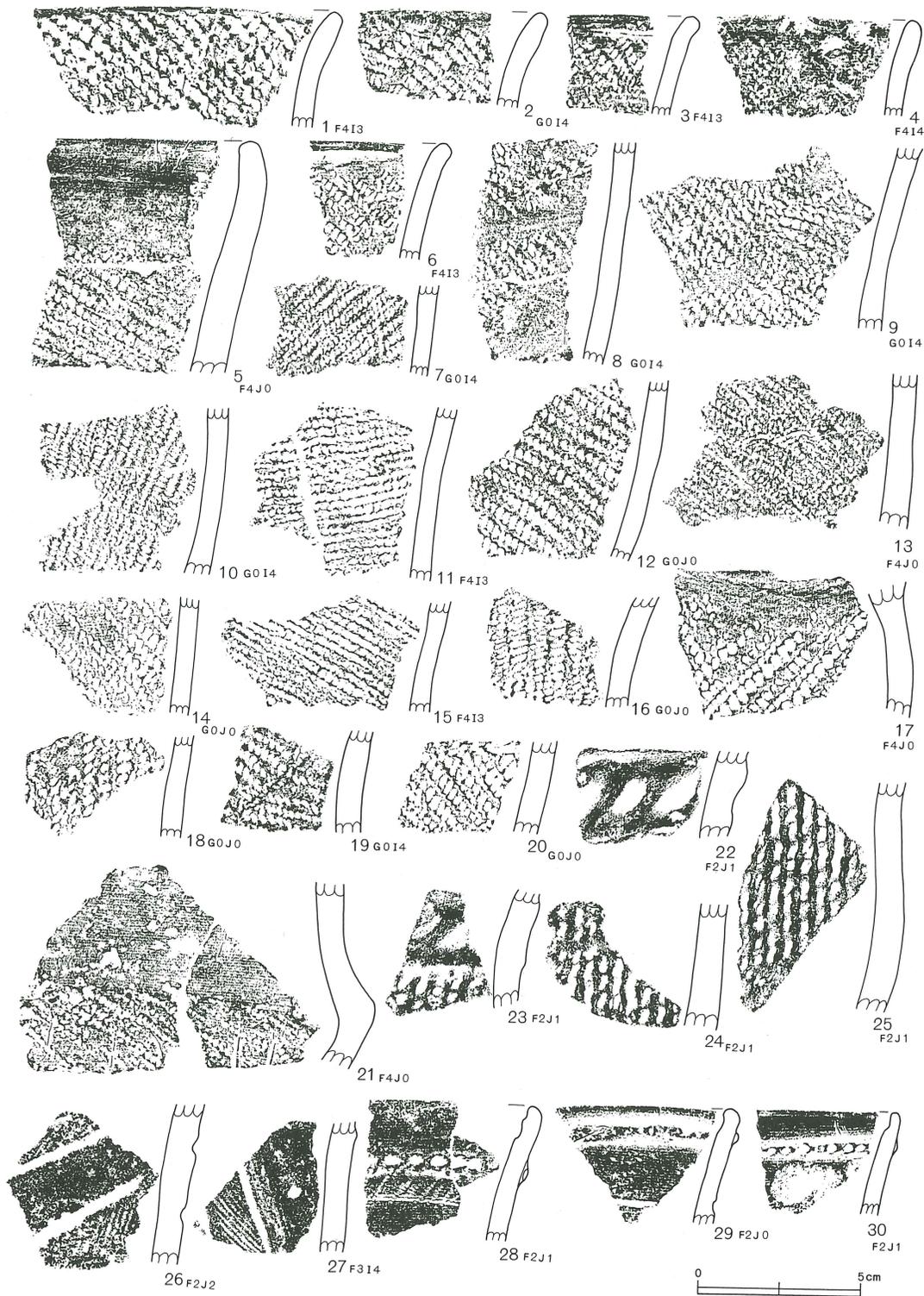
諸磯a式土器を一括する。1～18は「米」状文系のモチーフを施文するものを一括する。4、5は櫛歯状条線文で、細かな鋸歯状文を施文し、胴部に単節RLを施文する。6～18は半截状竹管による平行沈線文で「米」状文を施文するもので、原体は6、14がLR、他がRLである。19～21は円形竹管文を口縁部から垂下させるものである。22は口縁部に幅広沈線文を多段に施文するもので、地文は単節RLである。23～25は口縁部が朝顔状に開く器形を呈し、平行沈線文や幅狭な爪形文で口縁部が区画されるものである。

##### 第4類土器 (第144図26～28)

諸磯b式土器を一括する。いずれも連続爪形文を施文するもので、26は文様帯区画に刻みを施す浮線文を使用している。28は爪形文間の隆起部に斜位の刻みを施している。



第144図 グリッド出土土器 (42)



第145図 グリッド出土土器 (43)

## 第5類土器 (第144図29~32、第145図1~22)

諸磯式土器で、縄文のみを施文する土器群を一括する。口縁が開く平縁土器が多く、原体はR Lが圧倒的に多い。第145図5は口縁部が内折し、17、21は胴部が張る器形を呈する。

## 第V群土器 (第145図22~30)

中・後期の土器群を一括する。

## 第1類土器 (22~25)

中期の勝坂式土器である。22~25は同一個体である。押し引き状の押圧を施した隆帯文で口縁部文様帯を区画するものであり、胴部に撚糸文Lを施文する。

## 第2類土器 (26、27)

後期初頭の称名寺式土器である。沈線文の区画内に細い単節LR縄文を施文する。

## 第3類土器 (28~30)

後期の堀之内II式土器である。口縁部の開く深鉢形土器で、口縁部に隆帯が、口縁部裏に沈線文が巡る。文様は磨消縄文で描出する。

## (2) 土製品

## 土製円盤 (第147図、第148図)

四反歩遺跡南地区からは74点の土製円盤が出土した。円盤は土器片を加工したもので、割れ面を擦っているもの、打ち欠いただけのもの等があり、殆どが撚糸文系土器群を使用している。第148図72~74の3点だけは条痕文系土器群を使用している。穿孔が貫通するものはなく、浅く穿ったものが2点出土している。1~35は縄文土器を、36~63は撚糸文土器を、64は撚糸条線文土器を、67~71は無文土器を使用している。条痕文期の土製円盤は、楕円形か四角形のものが多く。

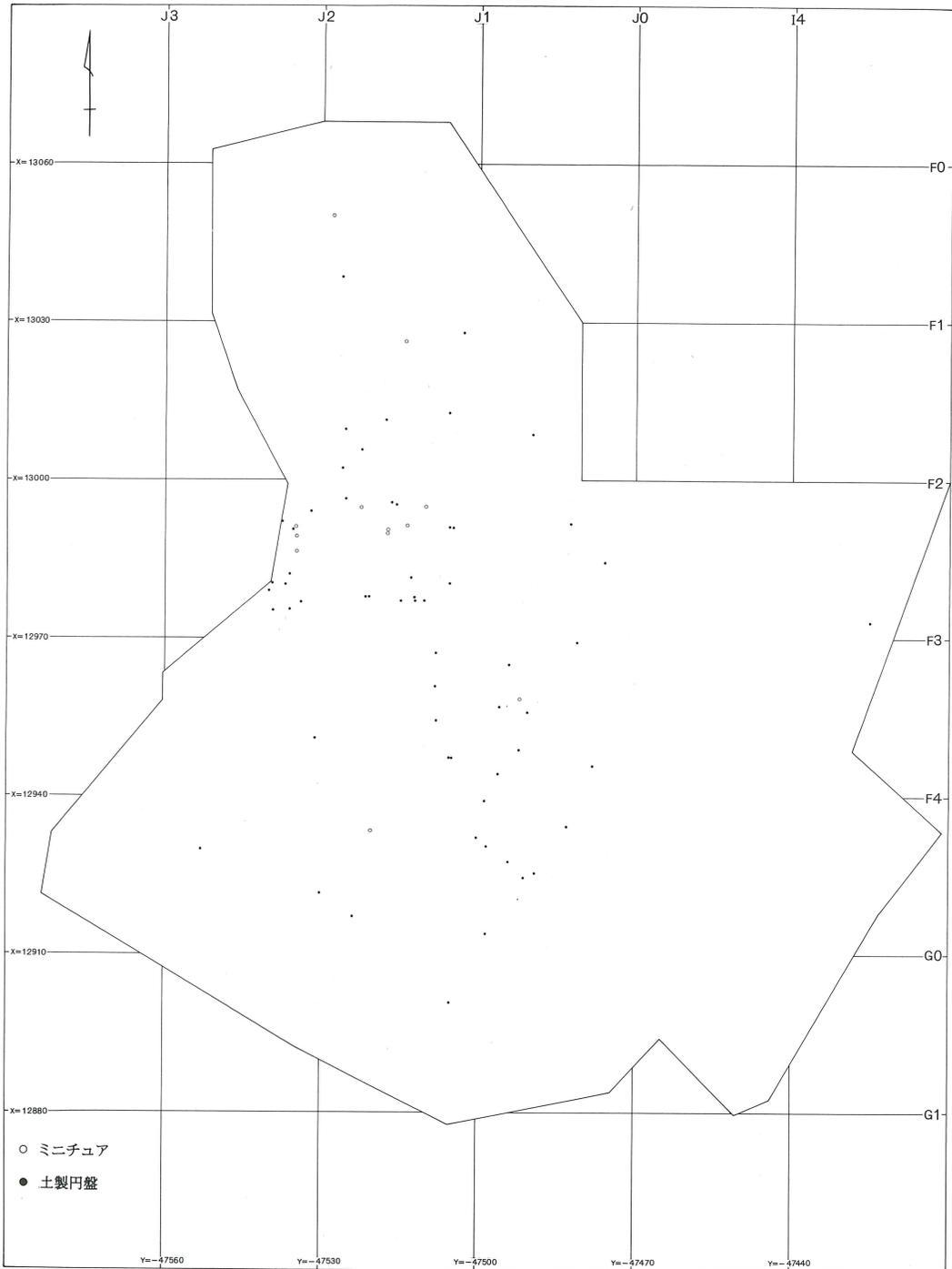
## ミニチュア土器 (第149図)

撚糸文系土器群のミニチュア土器が12点出土している。手捏のもの、整形を施して全体的に小形のものなどが存在する。

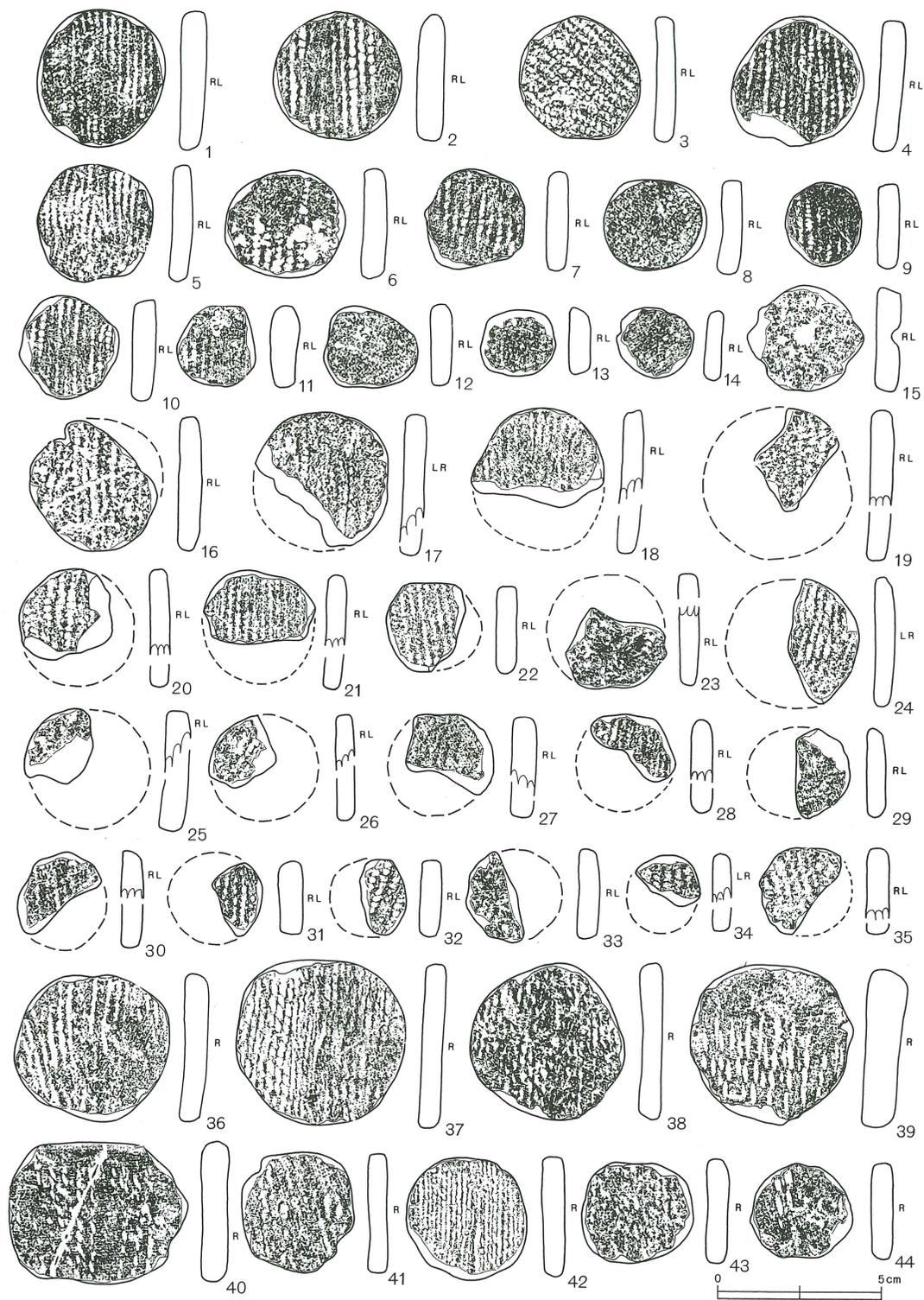
第1表 土製円盤一覧表

図版番号	長径(mm)	短径(mm)	重さ(g)	原体	出土地点	備考
147-1	43	39	15.3	縄文 R L	F3J1-211	研磨整形有り、完形。
147-2	44	40	18.3	縄文 R L	F1JO-283	研磨整形有り、完形。
147-3	38	48	10.3	縄文 R L	F1J1-2783	研磨整形有り、完形。
147-4	40	50	15	縄文 R L		研磨整形有り、完形。
147-5	36	36	10.2	縄文 R L	F4J1-114	完形
147-6	38	38	12.3	縄文 R L	F3J0-31	研磨整形有り、完形。
147-7	31	31	7	縄文 R L	F2J0-65	完形
147-8	28	32	7.2	縄文 R L	F2J2-333	研磨整形有り、完形。
147-9	21	29	5.3	縄文 R L	F28J14	研磨整形有り、完形。

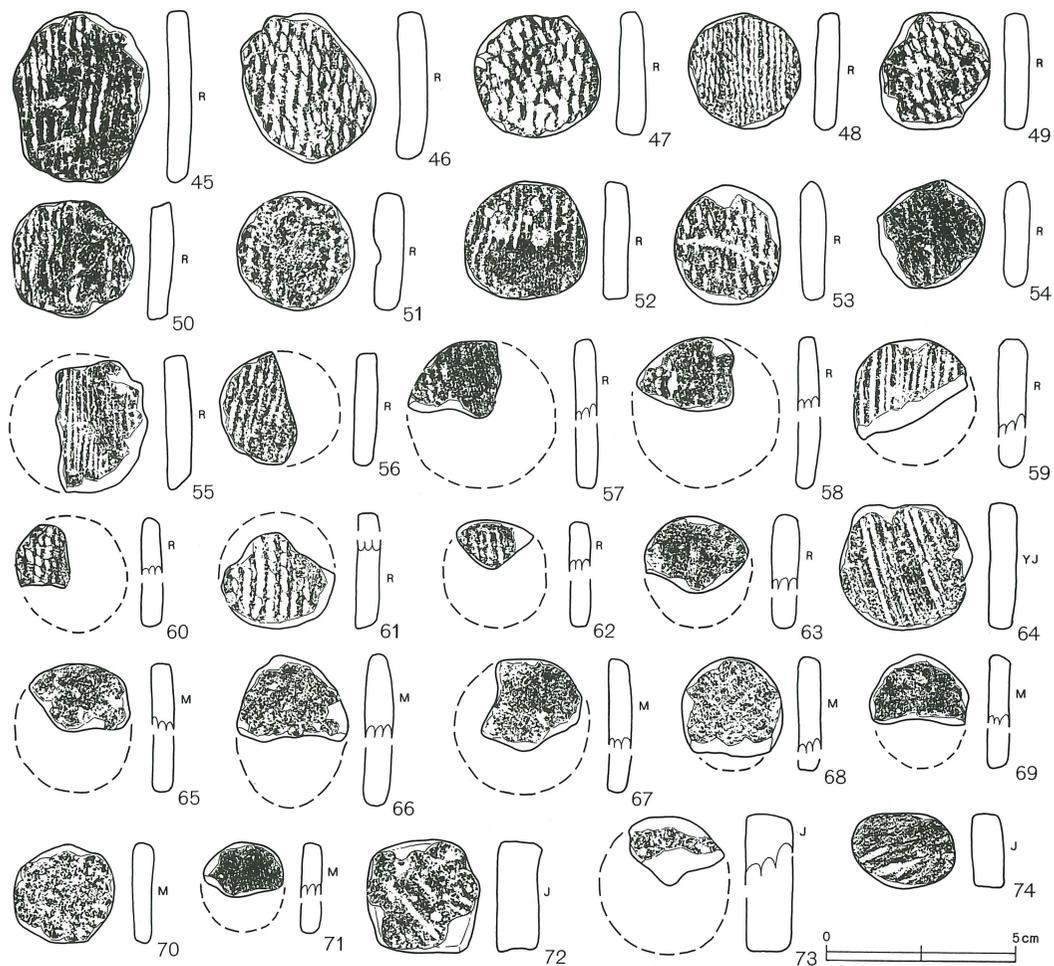
四反歩遺跡南地区



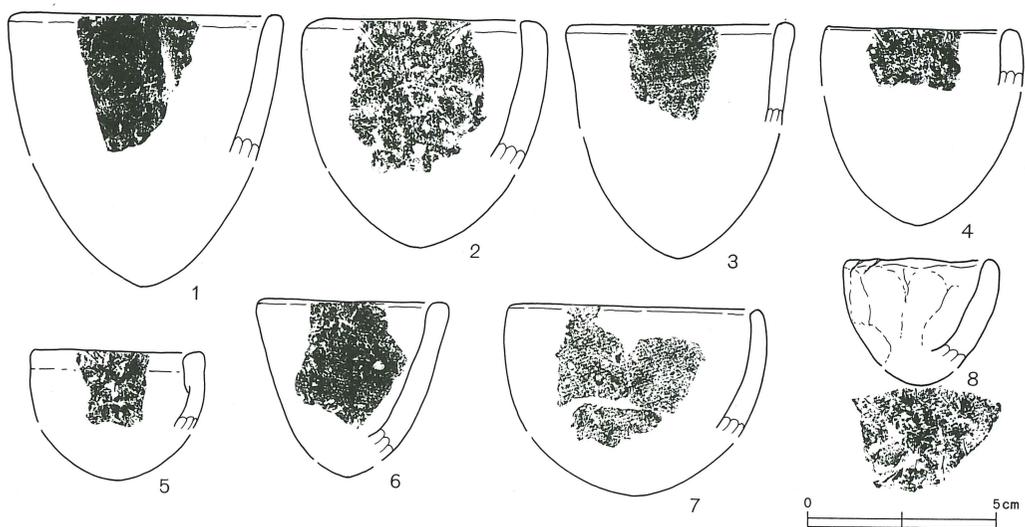
第146図 土製円盤分布図



第147図 土製円盤 (1)



第148図 土製円盤 (2)

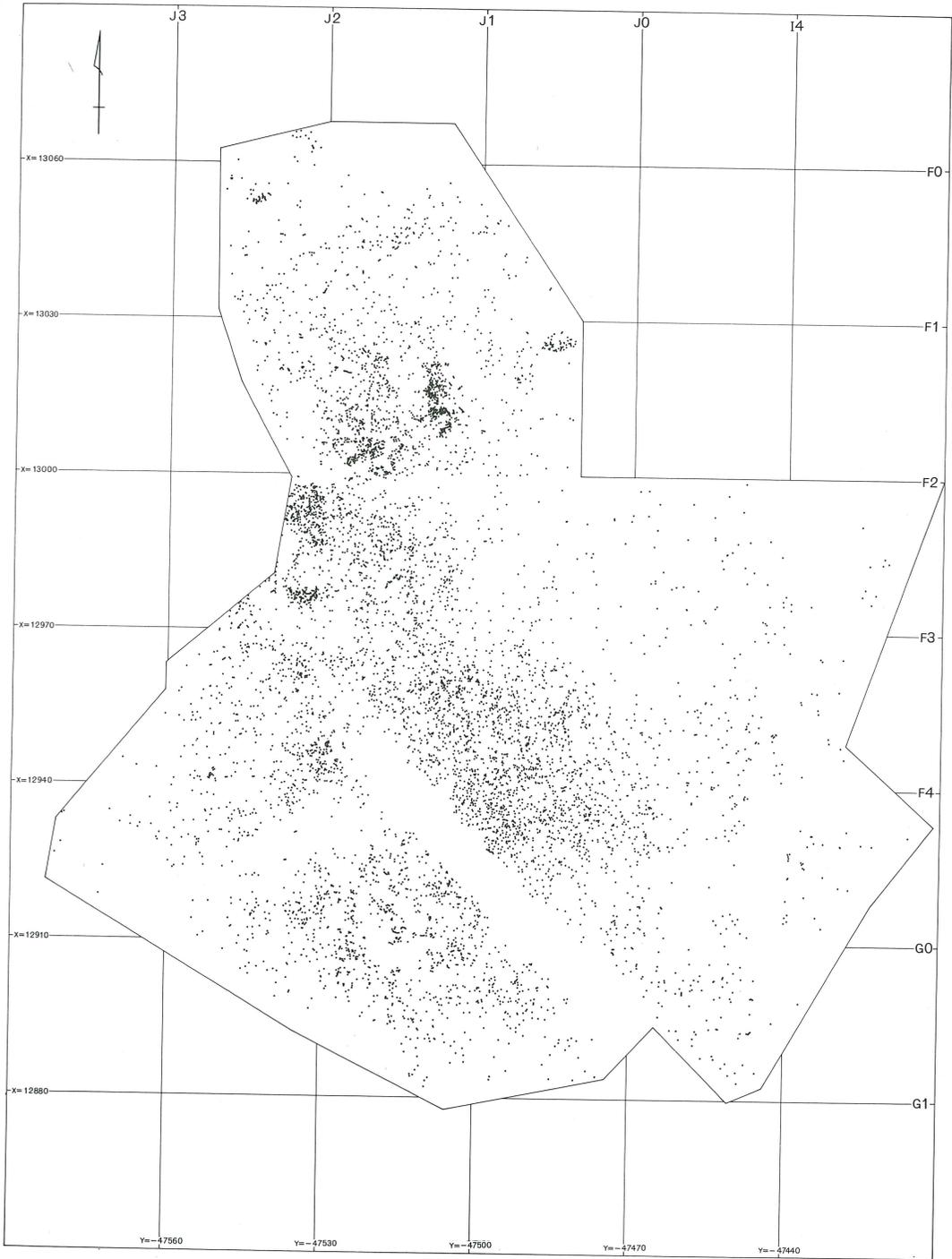


第149図 ミニチュア土器

## 四反歩遺跡南地区

147-10	30	32	8.1	縄文	R	L	F2J0-107	完形
147-11	25	24	6.3	縄文	R	L	F3J0-1594	研磨整形有り, 完形.
147-12	25	29	7.1	縄文	R	L	F3J1-996	完形
147-13	21	23	3.4	縄文	R	L	F2J2-339	完形
147-14	22	24	3.7	縄文	R	L	F2J1-465	研磨整形有り, 完形.
147-15	33	36	8.8	縄文	R	L	F30-1626	完形
147-16	41	(39)	9.6	縄文	R	L	F4J0-647	3/4現存
147-17	(42)	(40)	10.7	縄文	L	R	F4J0-1249	研磨整形有り, 2/3現存
147-18	(31)	41	10.5	縄文	R	L	F3J0-995	研磨整形有り, 1/2現存
147-19	(32)	(22)	4.8	縄文	R	L	F2J2-94	研磨整形有り, 1/5現存
147-20	(28)	(29)	5.6	縄文	R	L	F26J14	2/3現存
147-21	(23)	35	5.7	縄文	R	L	F2J1-2314	1/2現存
147-22	28	(25)	5.5	縄文	R	L	F26J16	研磨整形有り, 2/3現存
147-23	(25)	(32)	5.6	縄文	R	L	F2J1-966	1/2現存
147-24	(39)	(22)	4.7	縄文	L	R	F2J2-231	研磨整形有り, 1/3現存
147-25	(23)	(22)	3.9	縄文	R	L	F2J2-541	研磨整形有り, 1/4現存
147-26	(23)	(21)	2.5	縄文	R	L	F1J1-111	研磨整形有り, 1/4現存
147-27	(25)	(27)	5.5	縄文	R	L	F2J1-1038	1/2現存
147-28	(21)	(27)	3.1	縄文	R	L	F2J1-813	研磨整形有り, 1/3現存
147-29	(28)	(17)	3	縄文	R	L	F2J1	研磨整形有り, 1/2現存
147-30	(26)	(27)	3.2	縄文	R	L	F4J1-313	1/2現存
147-31	(23)	(16)	2.4	縄文	R	L	F2J2-1528	研磨整形有り, 1/4現存
147-32	23	(15)	2.6	縄文	R	L	F4J0-1291	研磨整形有り, 1/3現存
147-33	(28)	(18)	3.2	縄文	R	L	F1J1-1593	1/2現存
147-34	(16)	(20)	2	縄文	L	R	F2J1-967	研磨整形有り, 1/3現存.
147-35	22	(25)	5.2	縄文	R	L	F3J0-1155	1/2現存
147-36	45	48	20	撚糸	文	R	F3J1-518	研磨整形有り, 完形
147-37	51	52	21.5	撚糸	文	R	F1J1-1568	研磨整形有り, 完形
147-38	48	48	17.7	撚糸	文	R	G0J1-690	完形
147-39	49	50	34.4	撚糸	文	R	G0J06	研磨整形有り, 完形
147-40	44	55	25.3	撚糸	文	R	F2J0-66	完形
147-41	37	45	8.7	撚糸	文	R	F3J2-386	完形
147-42	38	38	13.5	撚糸	文	R	F2J1	研磨整形有り, 完形
147-43	41	35	11.7	撚糸	文	R	F2J1-1400	完形
147-44	29	32	7.1	撚糸	文	R	F2J1-956	完形
148-45	46	37	13.1	撚糸	文	R	F2J1-1391	完形
148-46	40	46	11.9	撚糸	文	R	F1J1-1861	完形
148-47	33	34	9.4	撚糸	文	R	F3J0-105	研磨整形有り, 完形
148-48	31	30	7.3	撚糸	文	R		研磨整形有り, 完形
148-49	32	30	8.4	撚糸	文	R	F2J1-522	完形
148-50	32	33	7.6	撚糸	文	R	F4J0-1314	完形
148-51	32	32	9.4	撚糸	文	R	F2J1	研磨整形有り, 完形
148-52	32	33	8.2	撚糸	文	R	F2J1-170	研磨整形有り, 完形
148-53	32	29	7.7	撚糸	文	R	F1J1-2085	研磨整形有り, 完形
148-54	29	29	6.3	撚糸	文	R	F2J1-932	完形
148-55	(36)	(25)	6.1	撚糸	文	R	F2J1-1359	2/3現存
148-56	30	(21)	3.9	撚糸	文	R	F2J1-815	研磨整形有り, 1/2現存
148-57	(21)	(25)	3.9	撚糸	文	R	F2J1-2068	研磨整形有り, 1/4現存
148-58	(20)	(26)	3.5	撚糸	文	R	F1J1-593	研磨整形有り, 1/4現存
148-59	(27)	(31)	5.9	撚糸	文	R	F1J1-928	研磨整形有り, 1/2現存
148-60	(17)	(15)	1.7	撚糸	文	R	F2J2-1350	研磨整形有り, 1/4現存
148-61	(26)	(31)	4.7	撚糸	文	R	F2J1-537	2/3現存
148-62	(13)	(21)	1.5	撚糸	文	R	F2J2-219	研磨整形有り, 1/5現存
148-63	(21)	(28)	4.3	撚糸	文	R	F4J2-204	2/3現存
148-64	34	36	10.9	撚糸	条線	文	F4J0-339	完形
148-65	(18)	(28)	3.1	無	文		F4J1-716	研磨整形有り, 1/2現存
148-66	(24)	30	5.4	無	文		F3J1-820	研磨整形有り, 1/2現存
148-67	(25)	(28)	4.3	無	文		F2J2-1273	研磨整形有り, 2/3現存
148-68	(27)	27	5.1	無	文		F26J16	研磨整形有り, 3/4現存
148-69	(19)	27	3.5	無	文		F4J0-1532	1/2現存
148-70	27	27	4.6	無	文		F1J1-711	完形
148-71	(15)	22	2.1	無	文		F4J1-354	研磨整形有り, 1/2現存
148-72	31	31	13.4	条痕	文		F2J1-160	研磨整形有り, 完形
148-73	(19)	(26)	4.7	条痕	文		F2J2-610	研磨整形有り, 1/4現存
148-74	20	28	6.1	条痕	文		F4J8	研磨整形有り, 完形

四反步遺跡南地区



第150图 石器分布全体图

## (3) 出土石器

四反歩遺跡南地区の包含層からは石器が7839点出土しており、その殆どが縄文時代の石器群である。その中でも草創期の石器群は前掲済みのため、ここでは早期以降の石器群を主体とする。検出された石器群の内訳は次の通りである。

石槍	1点 (0.1%)	864/7839 (11%)
石鏃	27点 (3.1%)	
搔器	37点 (4.3%)	
石錐	4点 (0.5%)	
石錘	5点 (0.6%)	
有溝砥石	30点 (3.5%)	
局部磨製石斧	14点 (1.6%)	
磨製石斧	1点 (0.1%)	
打製石斧	22点 (2.5%)	
礫器	114点 (12.7%)	
スタンプ形石器	257点 (31.3%)	
磨石	243点 (27.6%)	
石皿	65点 (7.3%)	
敲石	44点 (4.8%)	
/864		
石核	87点 (1.1%)	6975/7839 (89%)
剥片	4226点 (53.4%)	
礫	2677点 (34.5%)	
/7839		

石器類の大半が剥片、礫類であり、全体に占める割合は剥片類が53.4%、礫類が34.5%で、両者を合わせると87.9%を占めている。製品の合計が864点で11%である。出土土器も全体の9割以上が撚糸文期であることから、石器群もその割合に近い値で撚糸文期に位置付けられる慨然性が高い。

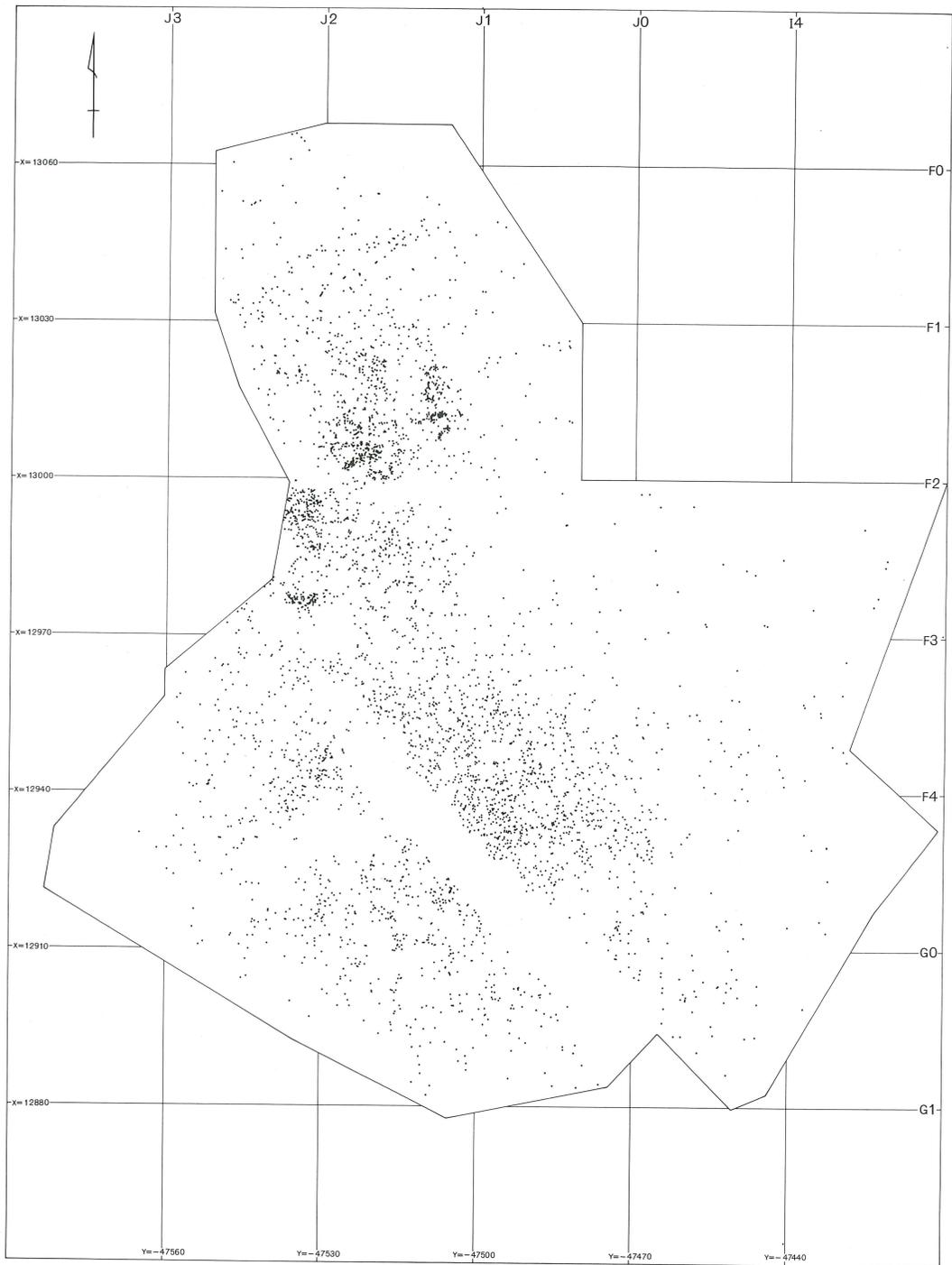
## 石槍 (第152図30)

1点のみ出土した。粘板岩性で薄身の石槍であり、周縁部から細かい調整剝離を施している。

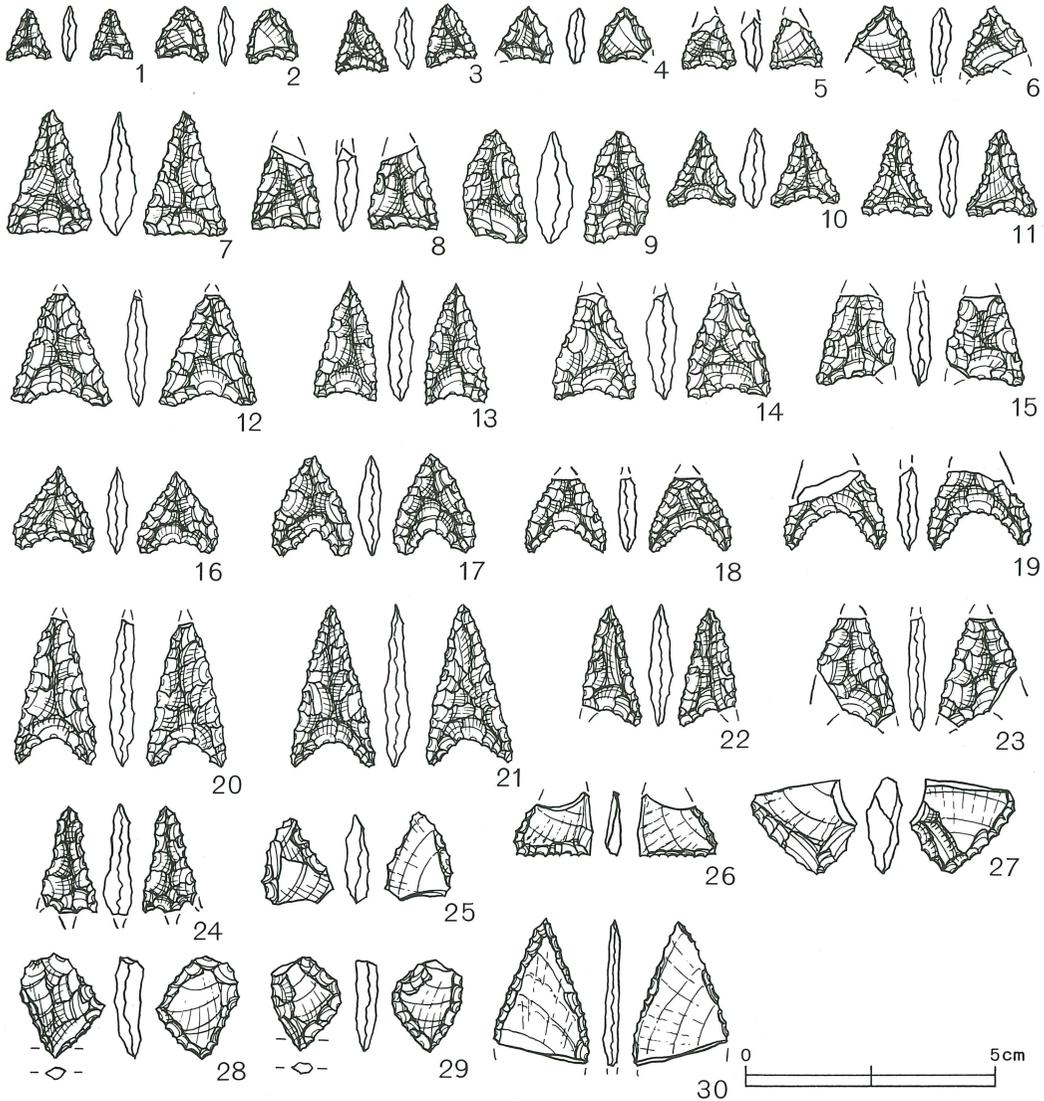
## 石鏃 (第152図1~27)

- a. (1~6) 小形の石鏃である。1cm内外を測るもので、作りは精密である。平基が多い。
- b. (7~9) 基部がほぼ平らな平基鏃である。比較的厚く、棒状のものが多い。
- c. (10~16) 基部が若干抉れる凹基鏃である。二等辺部分が括れたり (11)、肩が張る (13) 等若干器形の変化がみられるものがある。
- d. (17~23) 基部に比較的深い抉れを持つ凹基鏃で、やや大形化する。17~19は正三角形状を呈し、脚の張りが大きくなる。20~23は長大化するものである。

四反步遺跡南地区



第151图 剥片分布图



第152図 石鏃・石錐・石槍

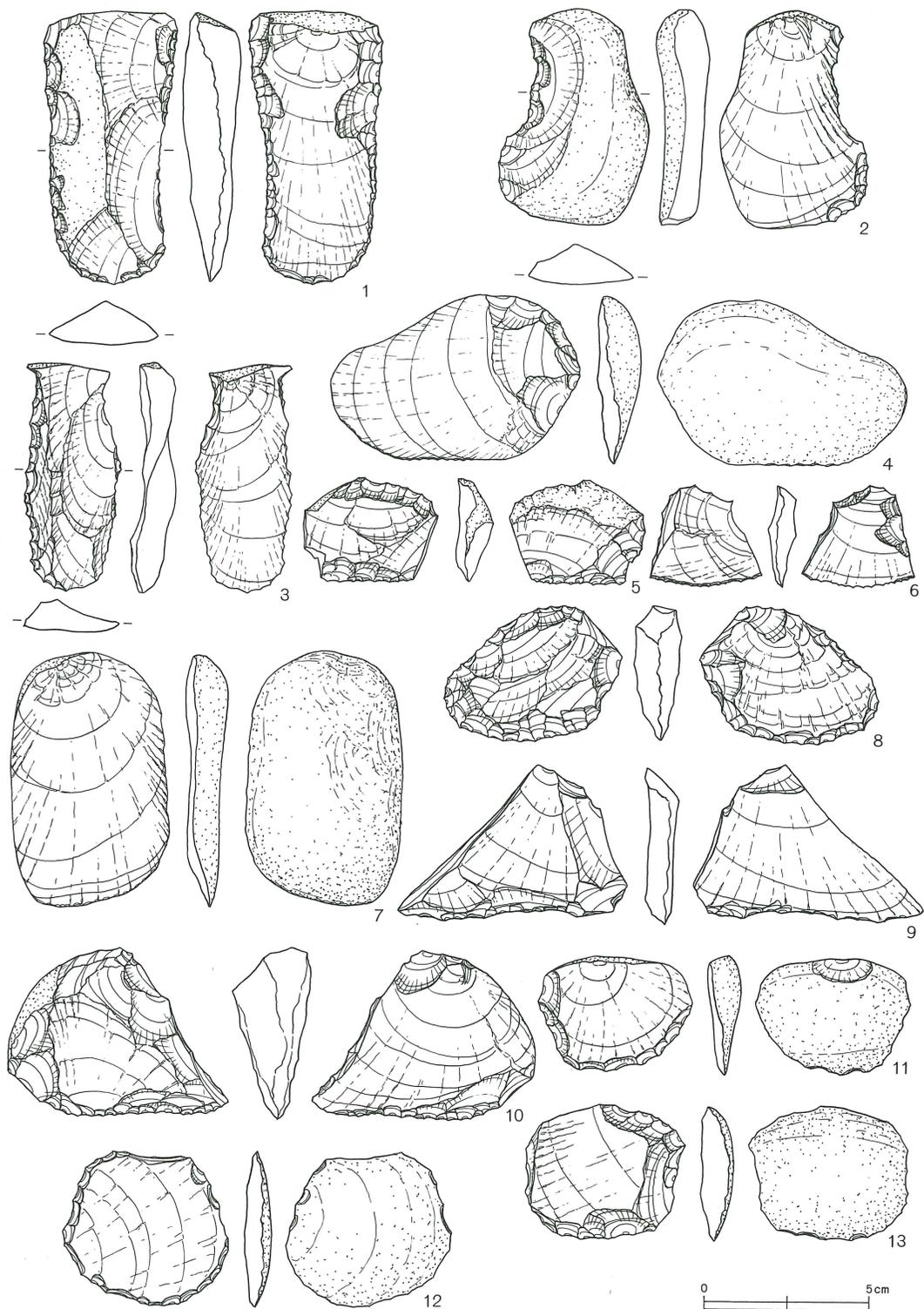
e. (14) 中子を持つ凸基鏃である。1点のみ出土しているが草創期の有舌尖頭器ではなく、後期に見られるものに類似する。

f. (25~27) 石鏃の未製品である。

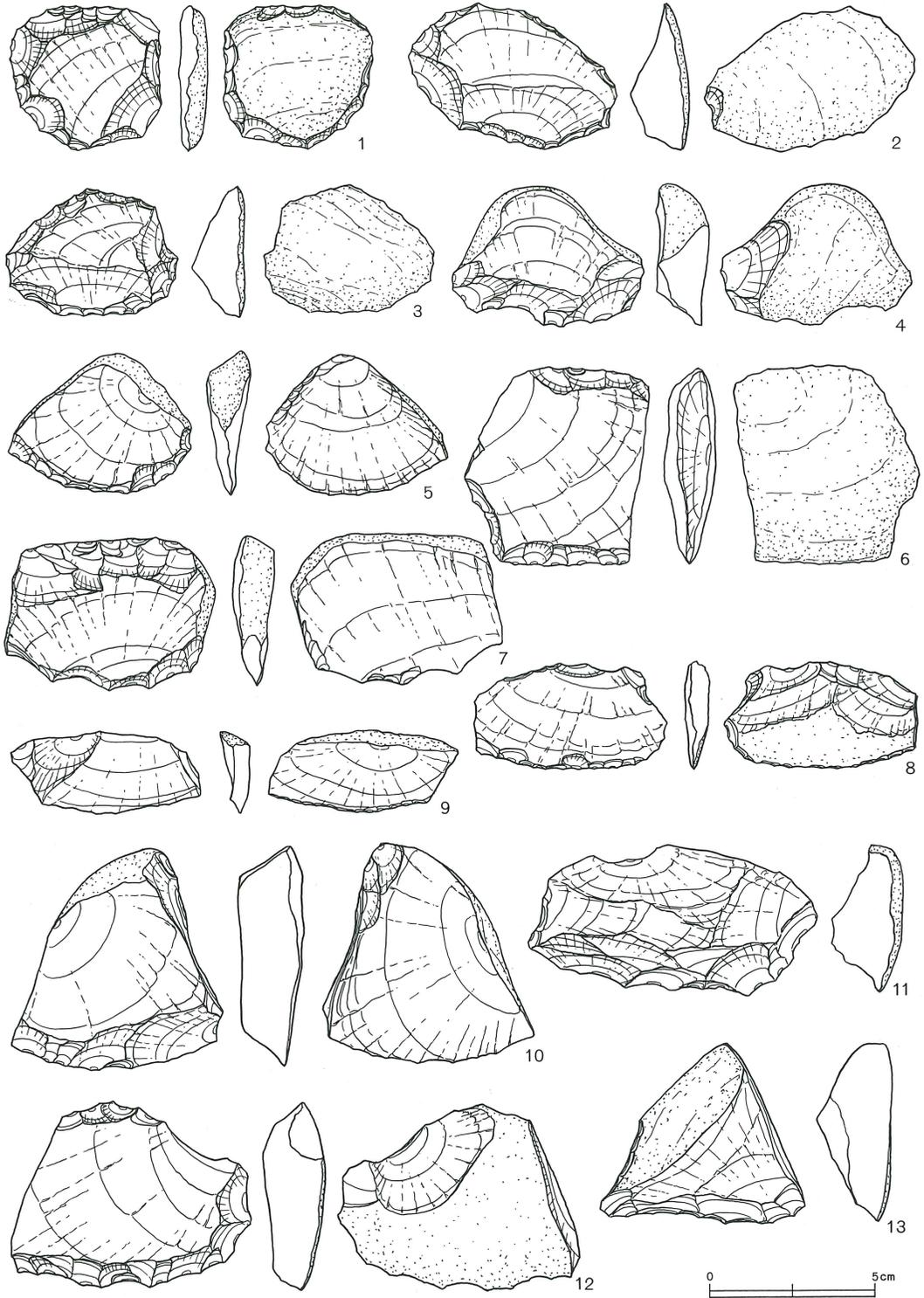
搔器 (第153図~第156図)

a. (第153図 1~4、7) 縦長剥片を使用するものである。1、3は剥片の長辺に調整剥離を施し、2はノッチドスクレイパーである。4、7は剥片のエッジを未調整のまま使用する。

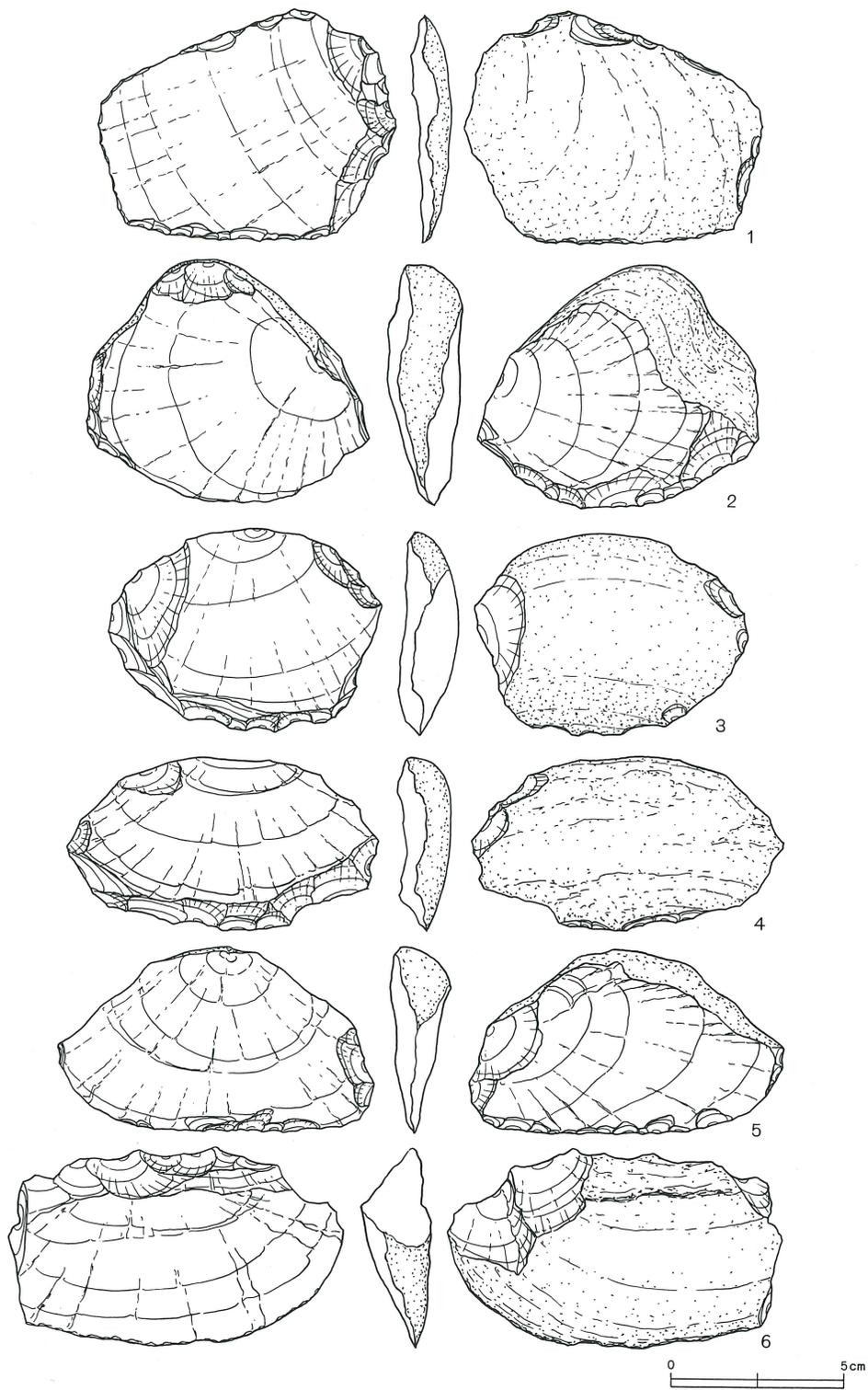
b. (第153図 5、6、8~10) 鋭利な刃部を持つものである。9以外はチャート製である。刃部には表裏面から調整剥離が施される。



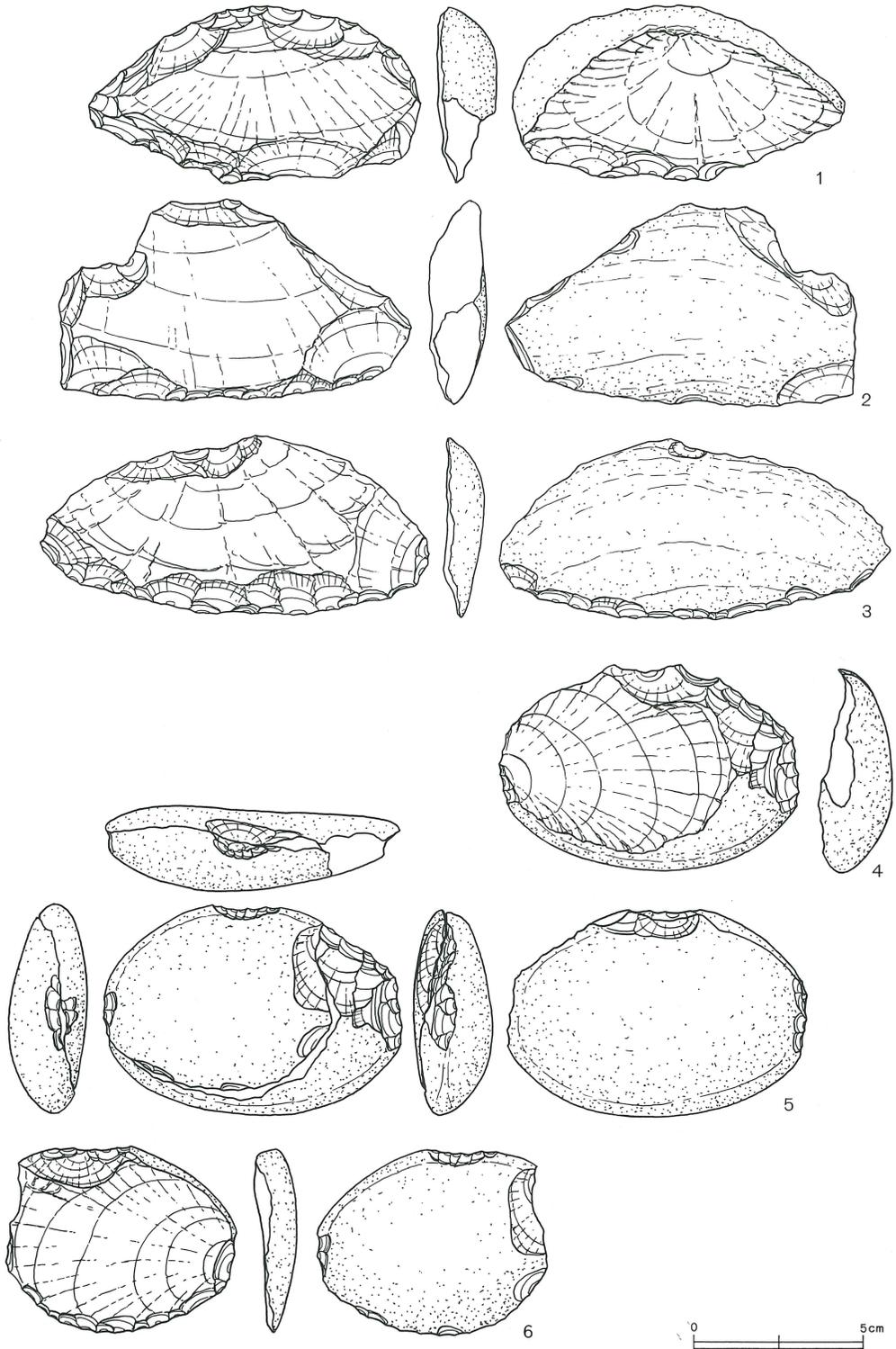
第153図 搔器 (1)



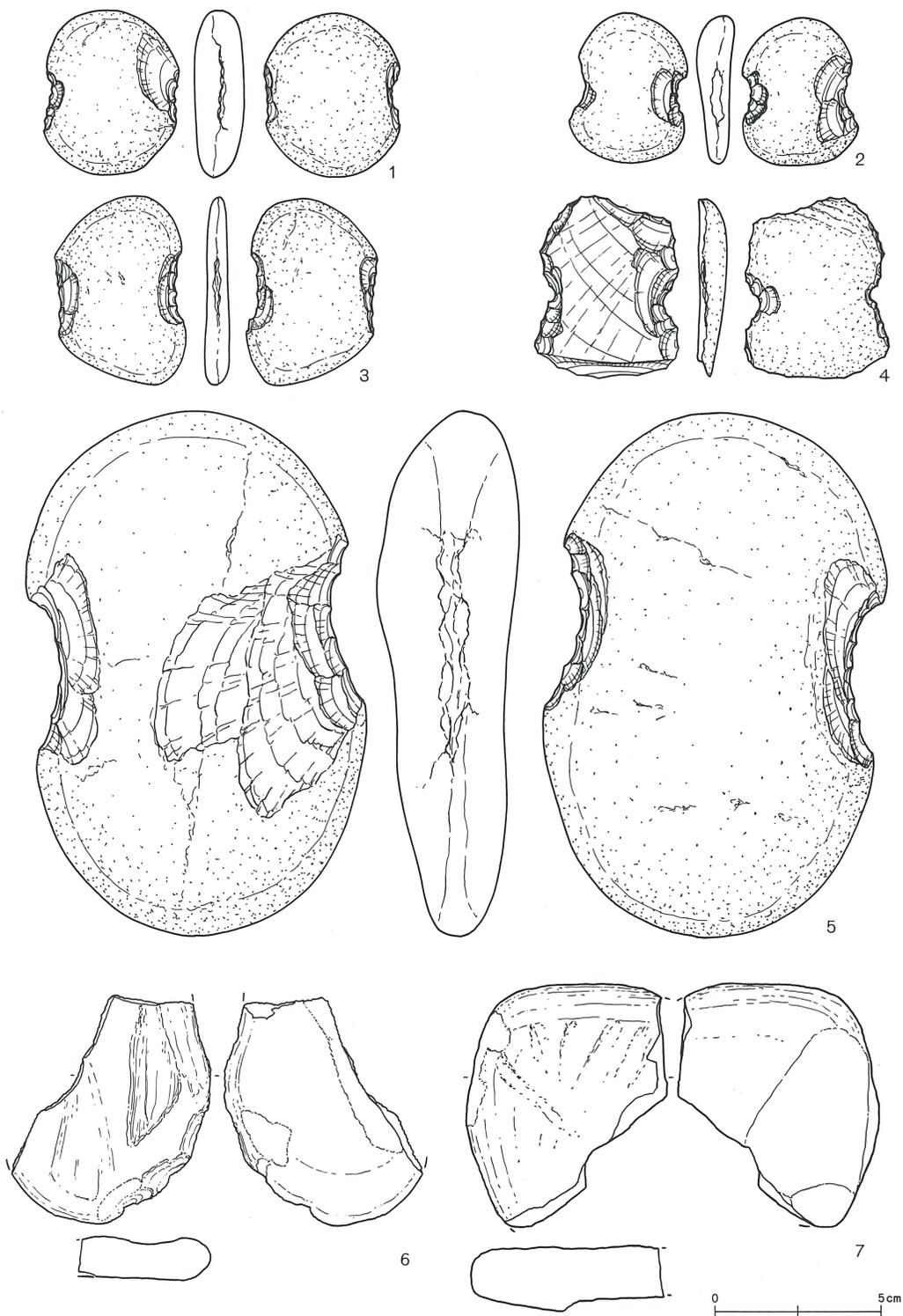
第154図 搔器 (2)



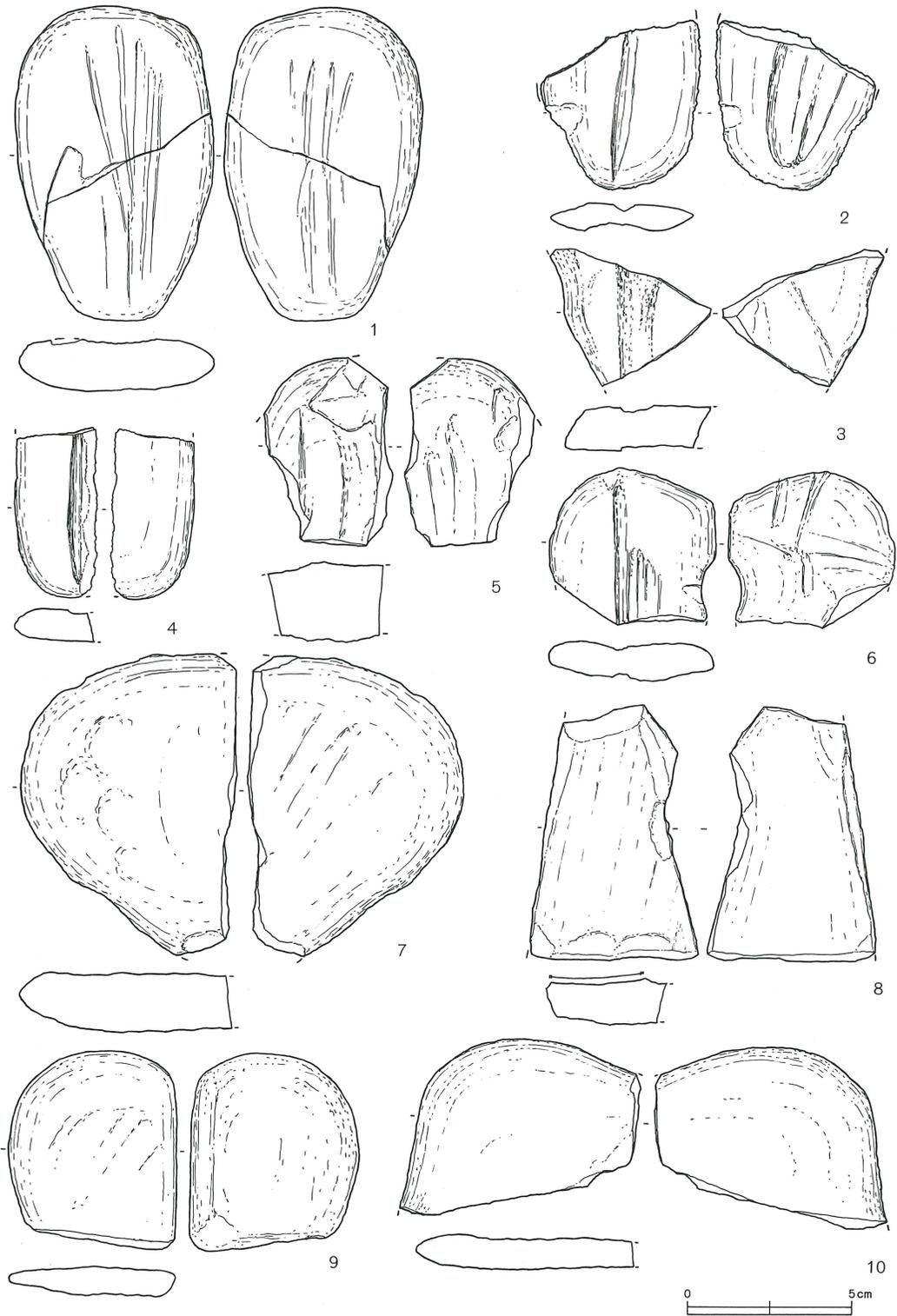
第155図 搔器 (3)



第156図 搔器 (4)



第157図 石錘・有溝砥石 (1)



第158図 有溝砥石 (2)

#### 四反歩遺跡南地区

- c. (第135図11～13、第154図1、2) ラウンドスクレイパーである。円形状を呈し、ほぼ全周に調整剝離を施すものである。刃部はあまり鋭利ではない。
- d. (第153図3～13、第155図、第156図) 横刃形スクレイパーである。横断面形が楔形を呈する剥片の長辺を刃部とするもので、必ず自然面を残している。第156図4～6は剥片が接合するもので、円礫からの剝取技術が理解される。フォルンフェルス素材とするものが多い。

#### 石錐 (第152図28、29)

石鏃状の小形のもので、先端部の刺突部を細かな剝離で作出している。

#### 石錘 (第157図1～5)

扁平礫の長辺側に抉りを入れるもので、4だけ剥片素材を使用する。大形と小形が存在する。

#### 有溝砥石 (第157図6、7、第158図)

扁平の楕円形を呈するものと思われるが、完形品は第158図1のみである。面的に使用するものもあるが、器形を整えた後に溝状の深い抉れを残すものが多い。また、平坦面のみではなく、側面部を使用するものも多い。

#### 局部磨製石斧 (第160図、第161図1、2)

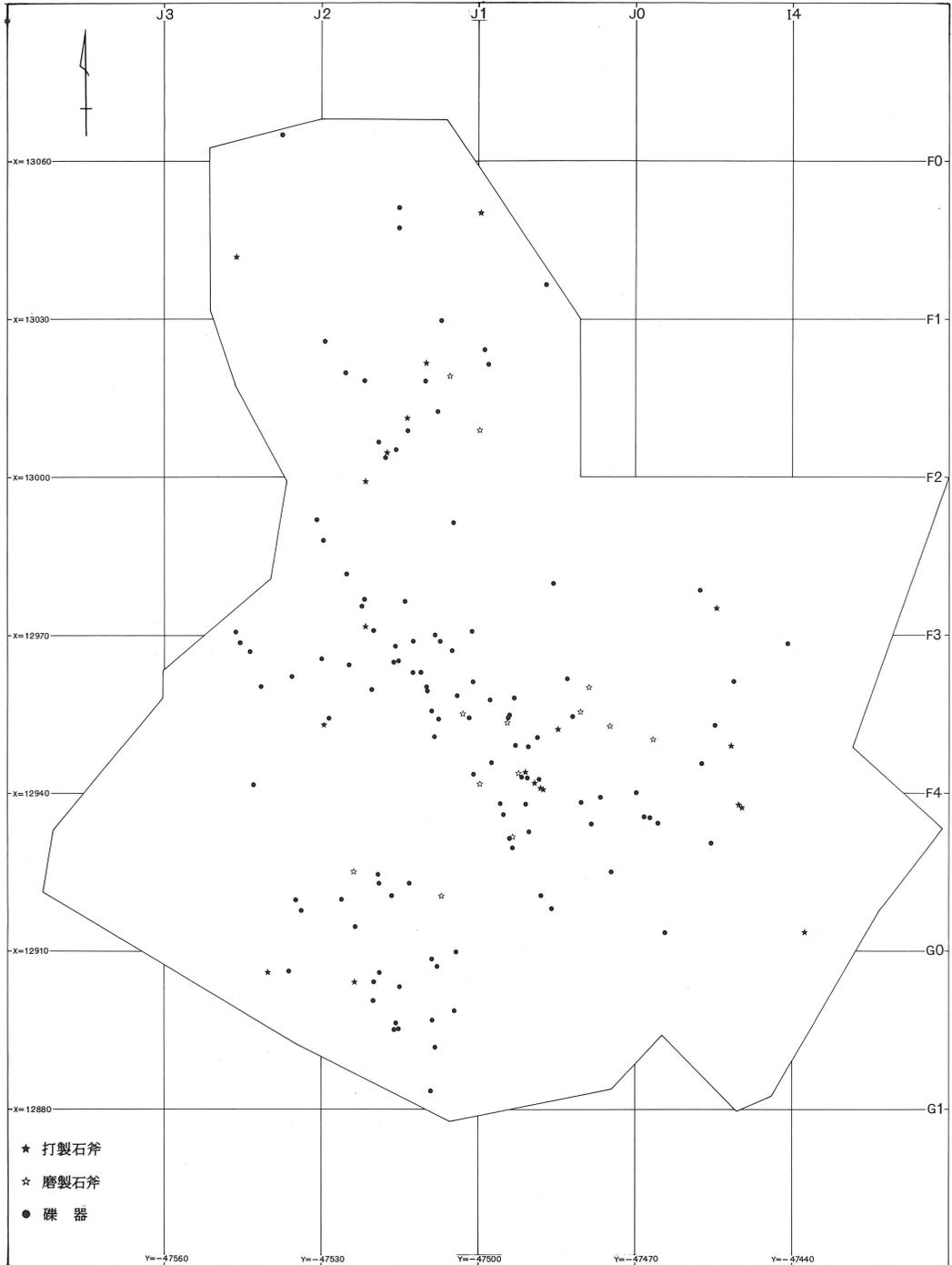
- a. (第160図1～4、8、9、第161図1、2) 扁平礫を使用し両面から刃部を主体に研磨するものである。1～3は刃部及び側辺に研磨を施し、1、3の頭部にも調整剝離が施される。8は刃部を欠損した後、研磨を施して再生している。9は調整剝離で成形した後に、研磨を施す。第161図1は刃部を欠損するが、頭部と側辺部に研磨を施す。2は片面に研磨痕を残し、片面に調整剝離を施している。再生を試みているものと思われる。
- b. (第160図5～7) 細長い棒状礫を使用する鑿状のものである。いずれも片面に傾斜を付けて研磨を施すもので、5、6は側縁から調整剝離を部分的に行う。刃部は鋭利に砥出する。

#### 磨製石斧 (第161図3)

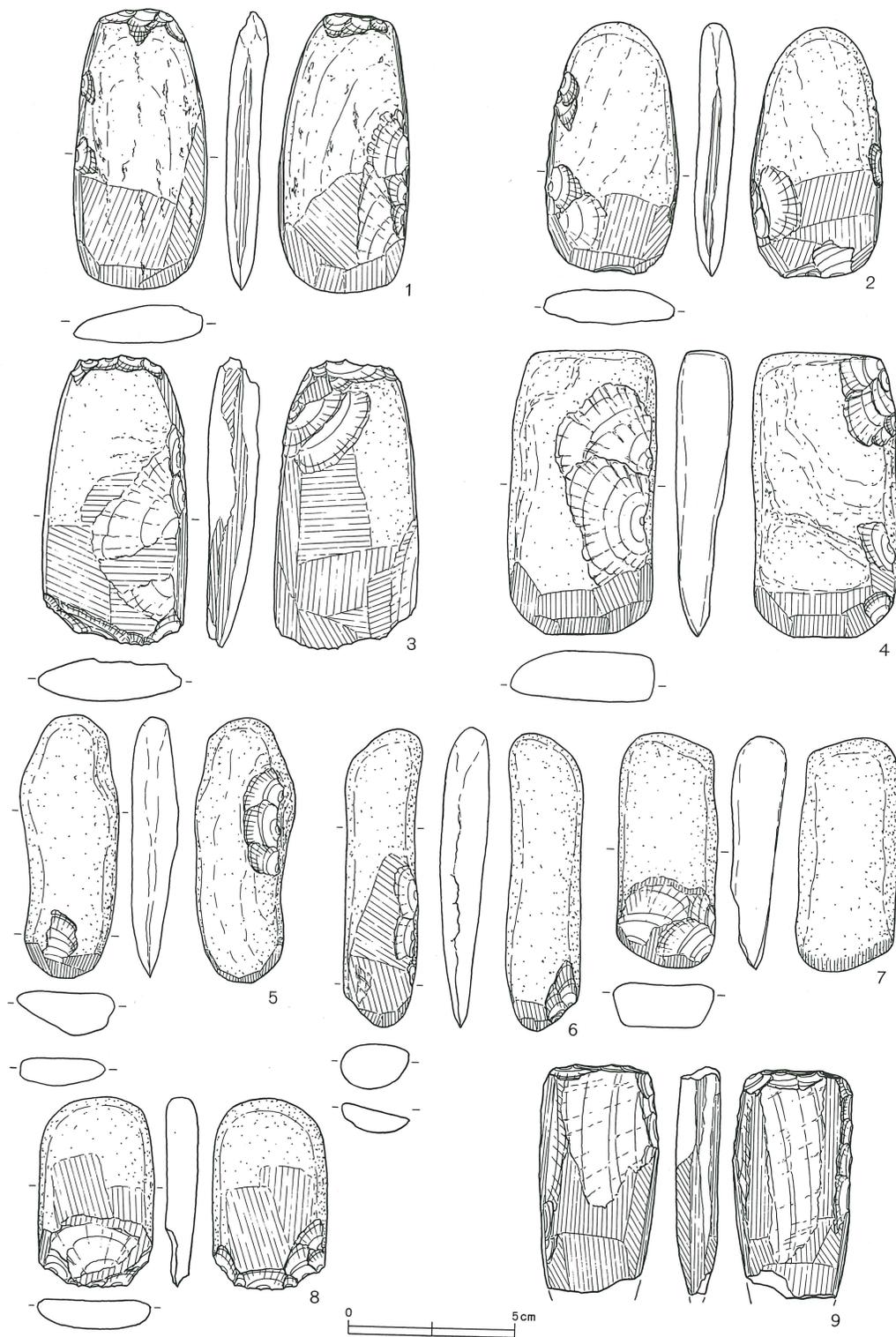
全体に丁寧な研磨を施す乳棒状の磨製石斧であり、欠損品である。前期の所産と思われる。

#### 打製石斧 (第161図4～8、第162図、第163図、第164図)

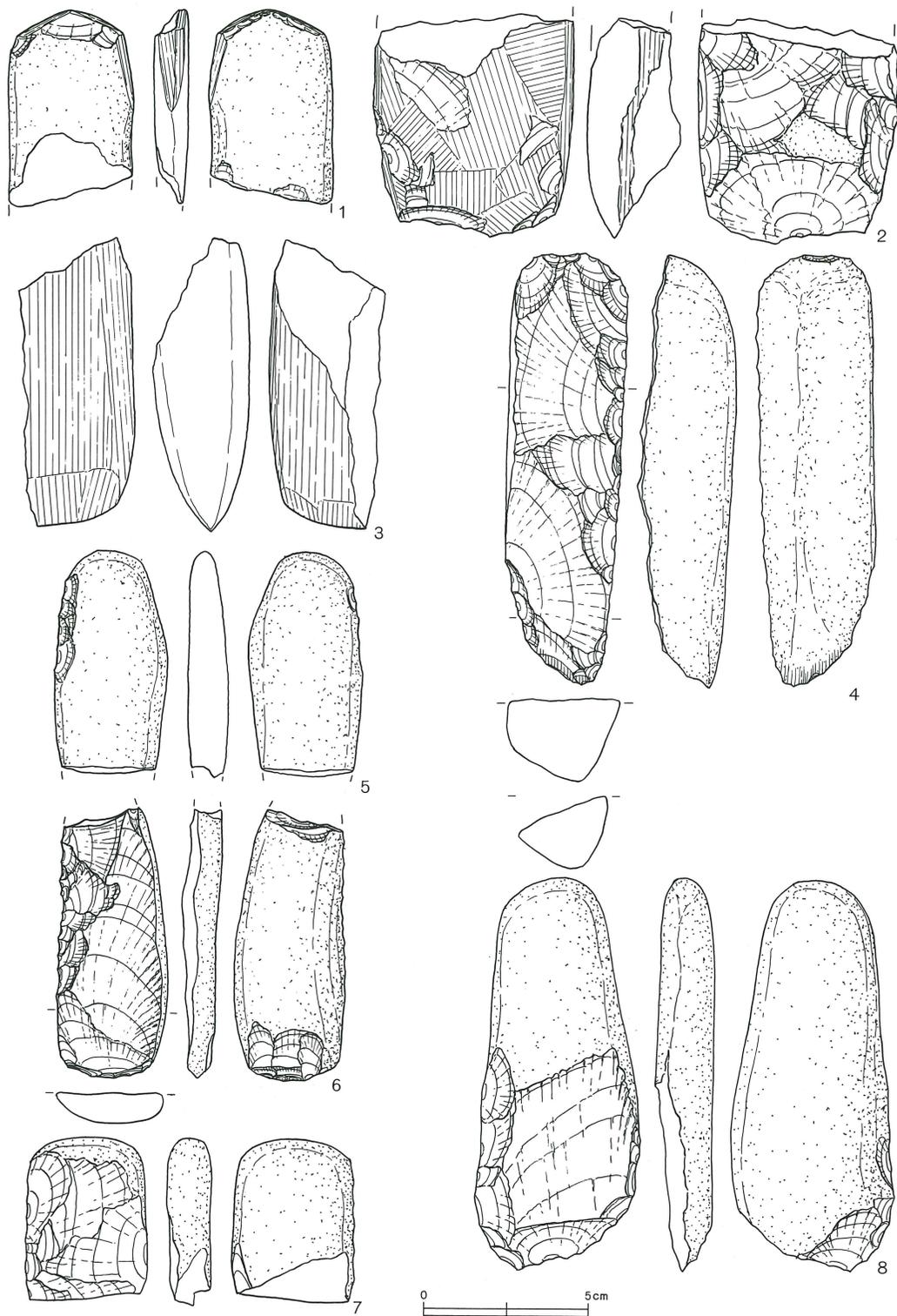
- a. (第161図4) 断面が三角形の鑿状を呈するものである。角柱状の礫の1面に左右側縁からの調整剝離を施して成形し、刃部は剝離面のエッジを使用する。刃部には摩耗痕が見られる。
- b. (第161図5～8、第162図、第163図1) 扁平長楕円礫の端部に調整剝離を施したものである。第161図5～7は局部磨製石斧と同様な作りを呈するが、研磨を施していない。第161図8～第163図1は刃部のみ調査加工を施すものが多い。刃部への加工は細かいものではなく、比較的粗いが、片面からのみ剝離を行うのを基本としている。第162図4は頭部からも礫表を剝取しているが、裏面には礫表をそのまま残している。撚糸文期に特徴的な石斧である。
- c. (第163図2、4、6、第164図4) 裏面に礫表を多く残す礫器状の石斧である。礫表側からの調整剝離を原則とし、刃角の大きい石斧である。
- d. (第163図3、5、7、第164図1～3) 礫表を残すものの、両面からの調整剝離で成形するものである。刃部が広がるバチ状の石斧である。第164図1は礫器に近い形状の石斧であり、3は使用による摩耗痕が明瞭である。



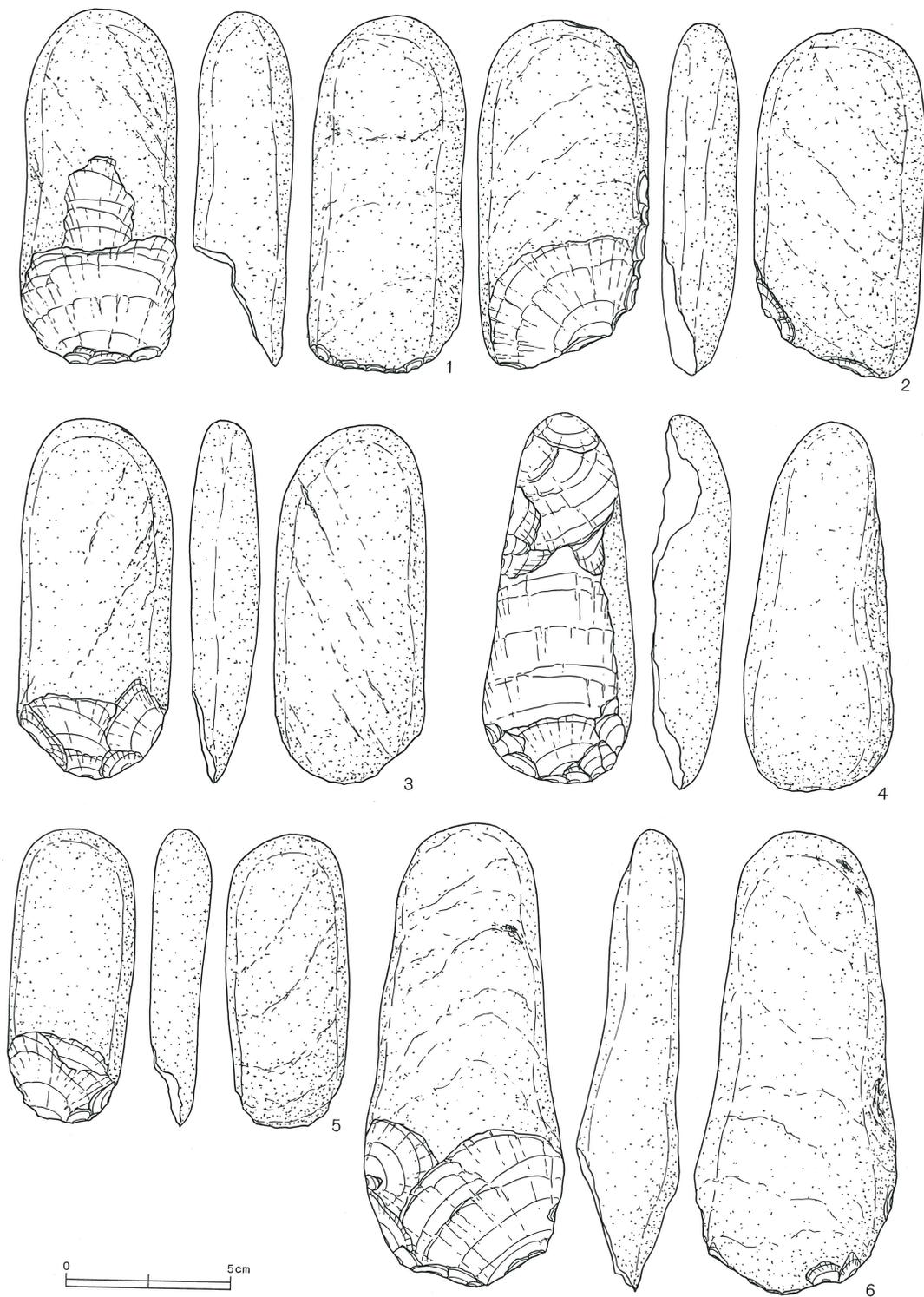
第159図 石斧・礫器分布図



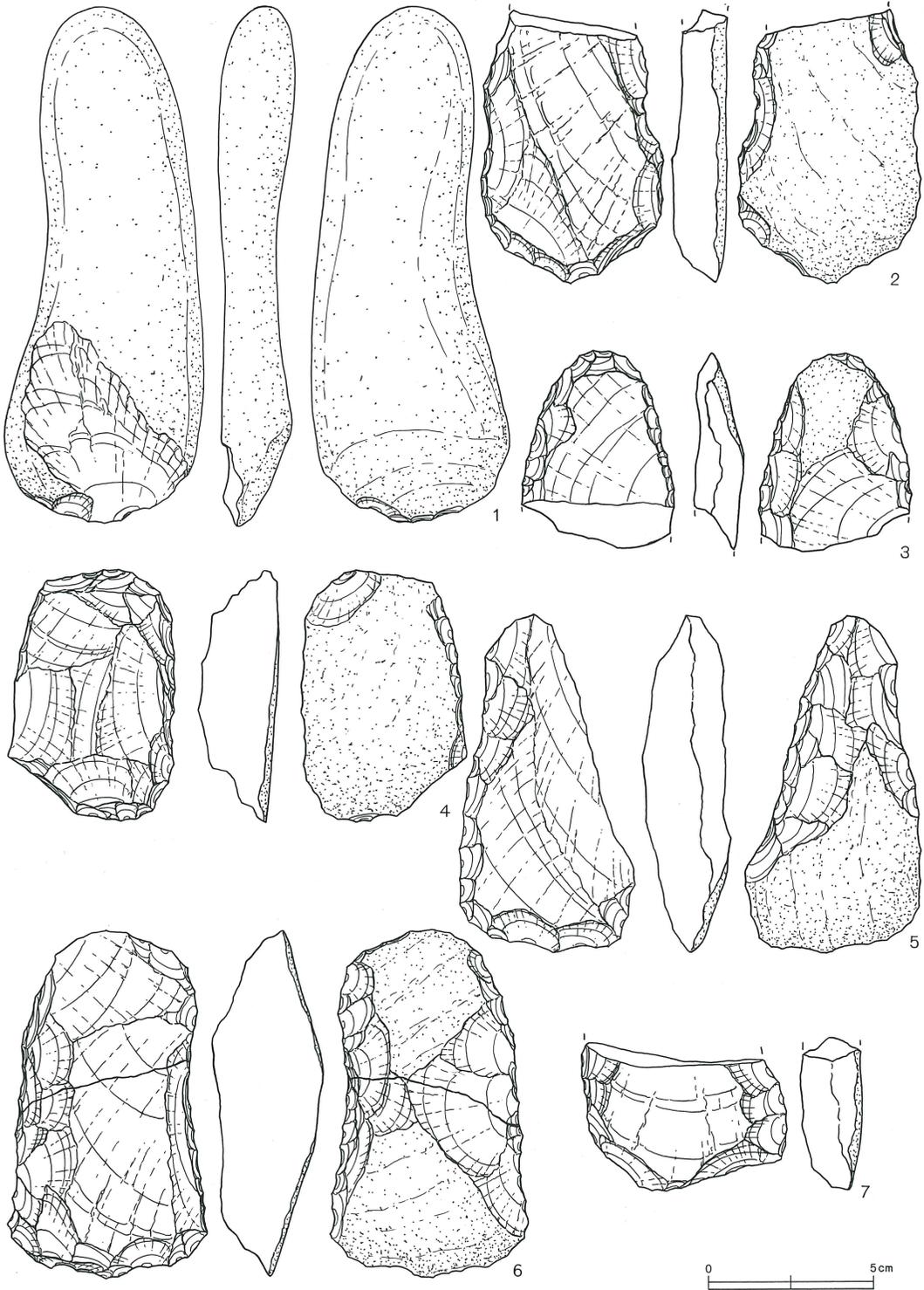
第160図 磨製石斧 (1)



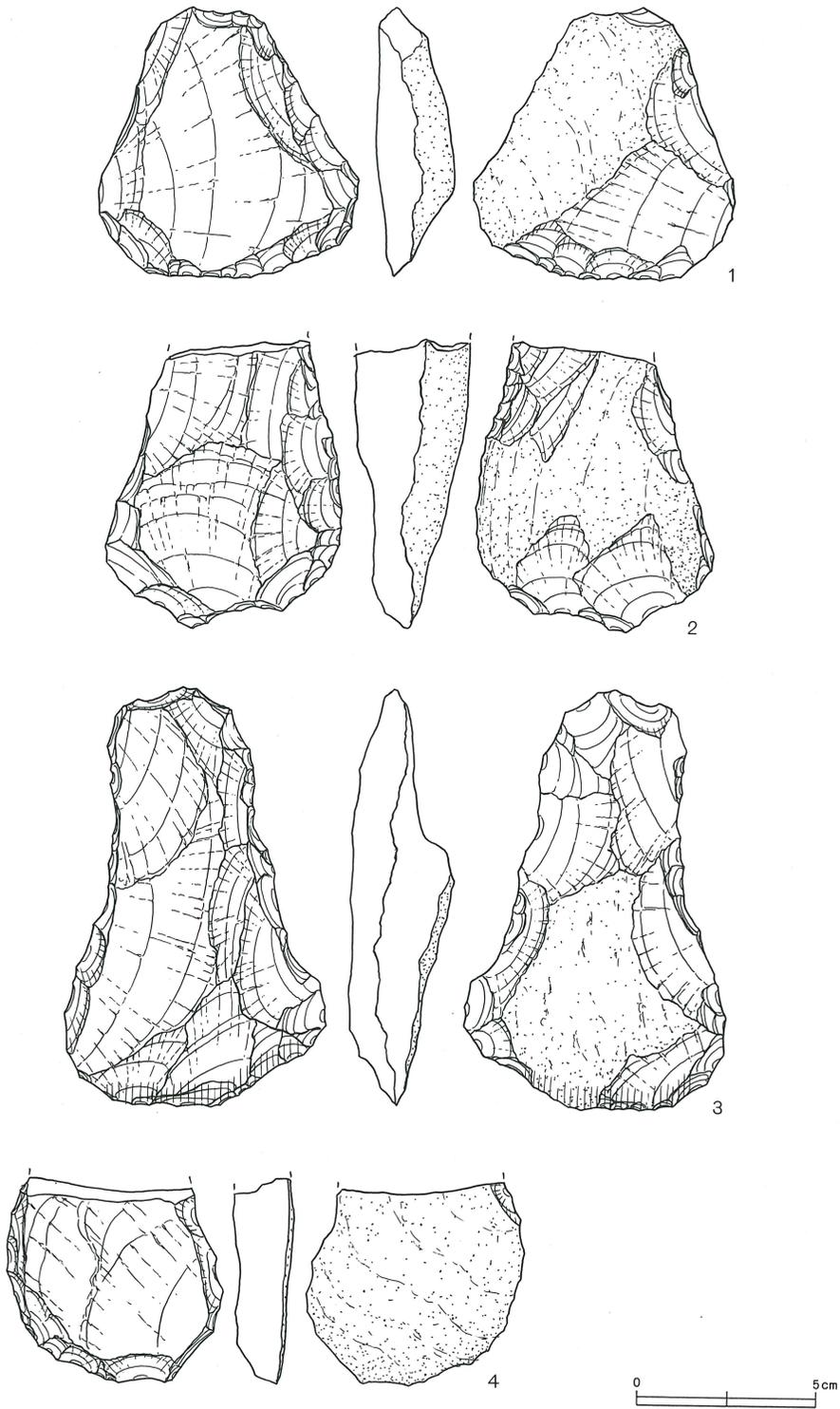
第161図 磨製石斧 (2)・打製石斧 (1)



第162図 打製石斧 (2)



第163図 打製石斧 (3)



第164図 打製石斧 (4)

## 礫器 (第165図～第169図)

- a. (第165図、第166図1～7) 裏面の礫表を殆ど剥ぎ取り、片面のみに礫表を残す打製石斧状の礫器である。調整剥離は片側から行うのを基本とし、比較的鋭利な刃部を作出するものが多い。形状は様々であるが、楕円形と長方形を基本とするが、剥取されたままの形状は残さない。
- b. (第166図9、10、第167図、第178図) 原石の1側縁のみに、片面からの調整剥離を施すものである。刃部は片刃のチョッパー状となる。素材は扁平楕円形の礫が使用され、刃部の角度が大きいものが多い。扁平な礫程エッジが鋭くなる傾向にある。
- c. (第166図8、第169図) 2側縁以上から調整剥離を行い成形するものである。素材は大きな礫や分割された礫であり、握りや使用に適する様に成形されている。2側縁以上から剥離を施すが、片側からの剥離を基本とする。

## 敲石 (第170図)

棒状の長楕円礫を使用しており、端部に敲打痕が観察される。石器自体の握りとしなりを利用して、ハンマーとして条件の良い部分を使用している。

## スタンプ形石器 (第172図～第185図)

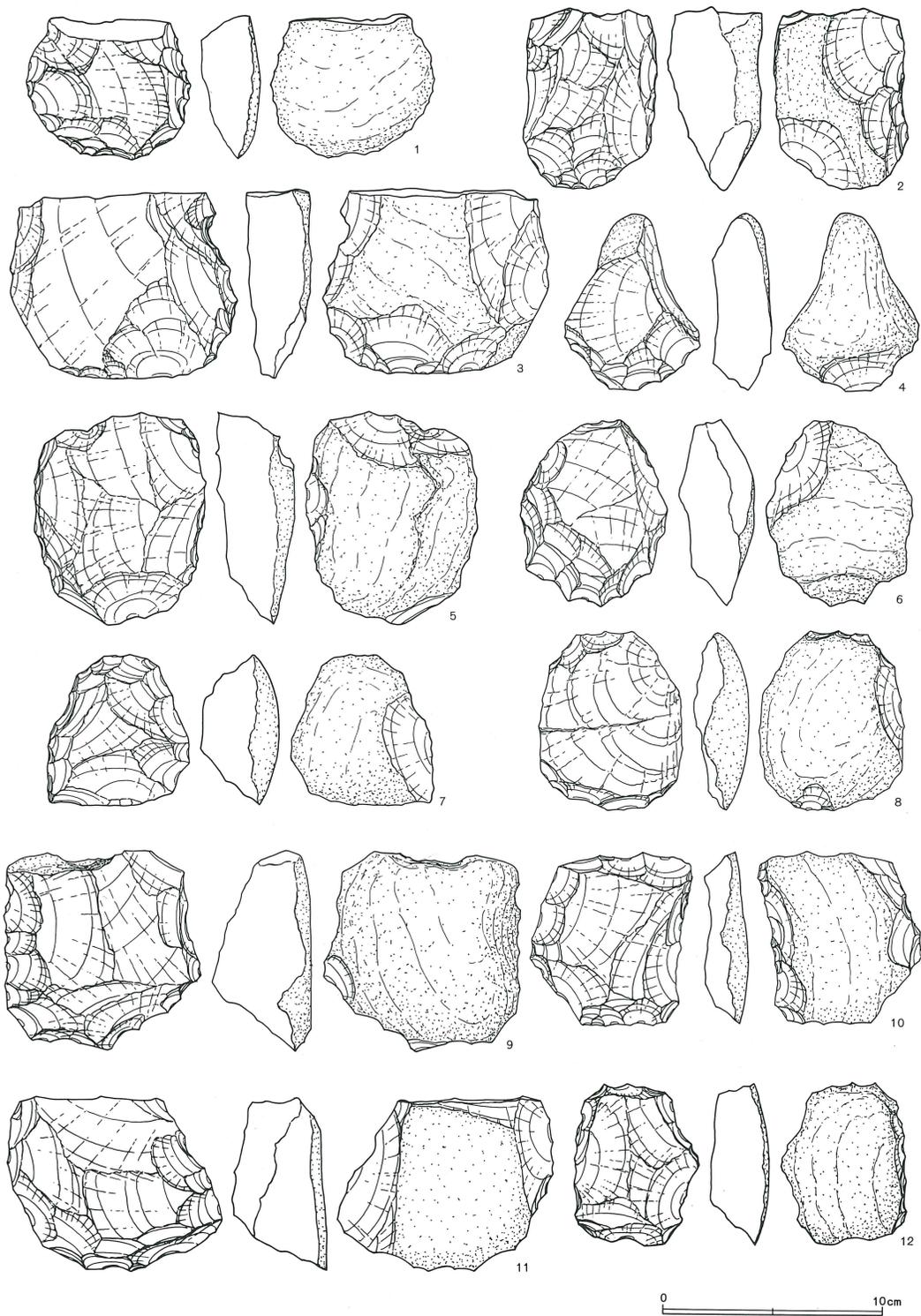
- a. (第172図1、2) 側縁の全周に調整剥離を施すものである。三角錐形状石器に近い特徴を持つが、2点のみ検出されている。
- b. (第172図3、4、第173図～第175図) 2側縁に部分的な調整剥離を施すものである。底面は打割のみのものと、平坦面を整形するために調整剥離を行うものが存在する。第172図3、4は使用による摩耗痕が明瞭である。他は使用痕が不明瞭で、底部からの細かい剥離痕がみられないものが多く、未使用のものも多いものと思われる。
- c. (第176図～第179図1、2) 1側縁にのみ調整剥離を加えるものである。使用の状態はa種とほぼ同様であるが、片側縁のみに調整が加えられ、握りに適している。第179図2は底面が平坦面を呈するため、打割は加えられていない。
- e. (第179図3～7、第180図～第185図) 側縁に加工を施さないものである。底部に使用の摩耗痕がみられるものは比較的細長いものに多く、底面から細かな剥離痕が多くみられる。他は未使用のものも多く、底面に調整加工を施すものもある。

## 磨石 (第186図～第193図)

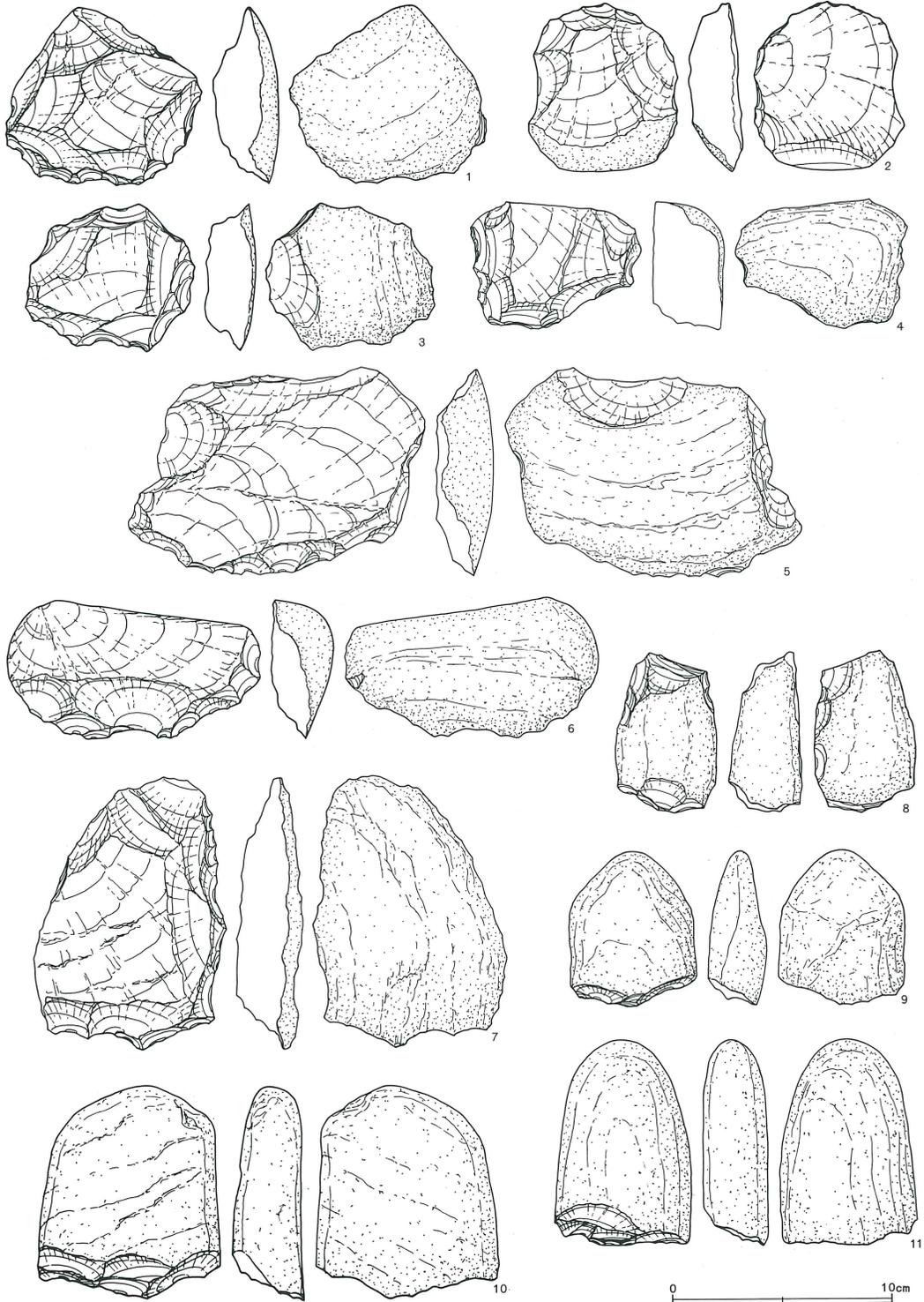
やや扁平な円礫をそのまま使用するものが多く、側縁に成形のための研磨を施すものは少ない。第186図1～8には浅い窪みが存在する。第186図～第189図は両面を使用するもので、第190図～第193図は片面を使用するものである。石質は閃緑岩が主体を占める。

## 石皿 (第194図～198図)

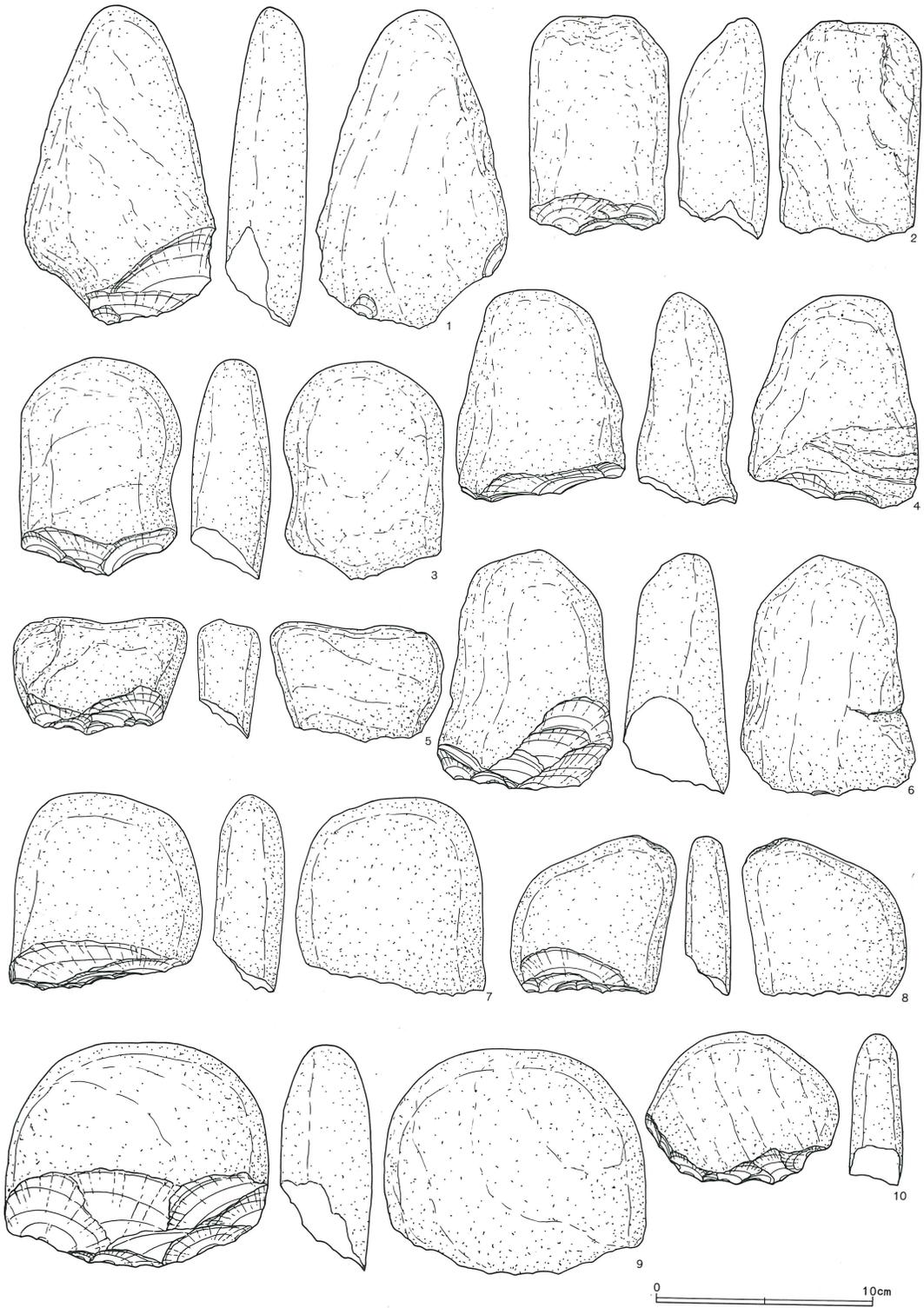
扁平な礫を使用するもので、比較的小形の石皿が多い。窪み面は殆どなく、平坦面に使用痕が窺える。石質は殆どが閃緑岩であり、撚糸文期の石皿と思われる。第197図1、第198図3は結晶片岩を使用するもので、窪み面が深く撚糸文期の石皿ではない可能性が高い。



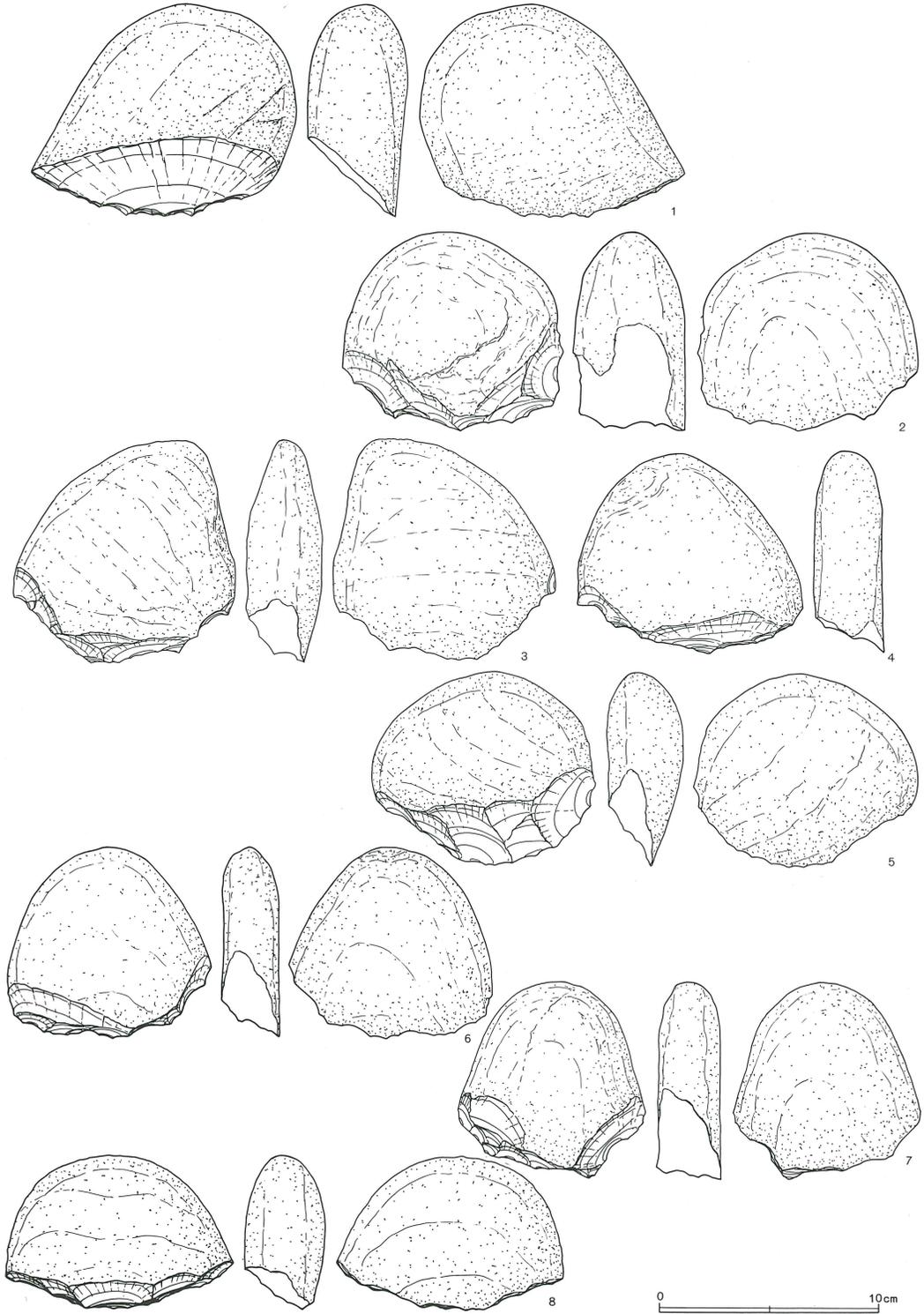
第165図 礫器 (1)



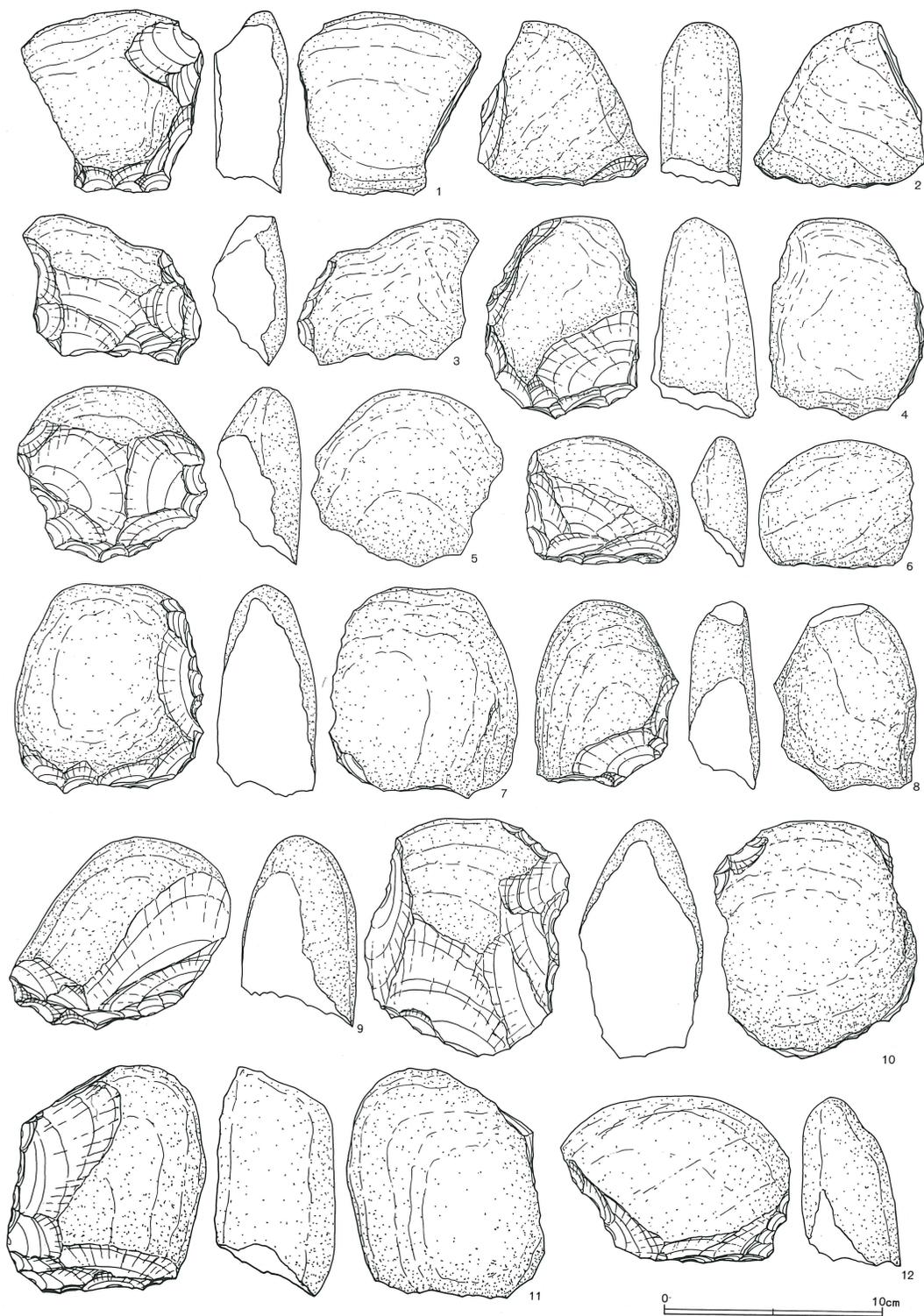
第166図 礫器 (2)



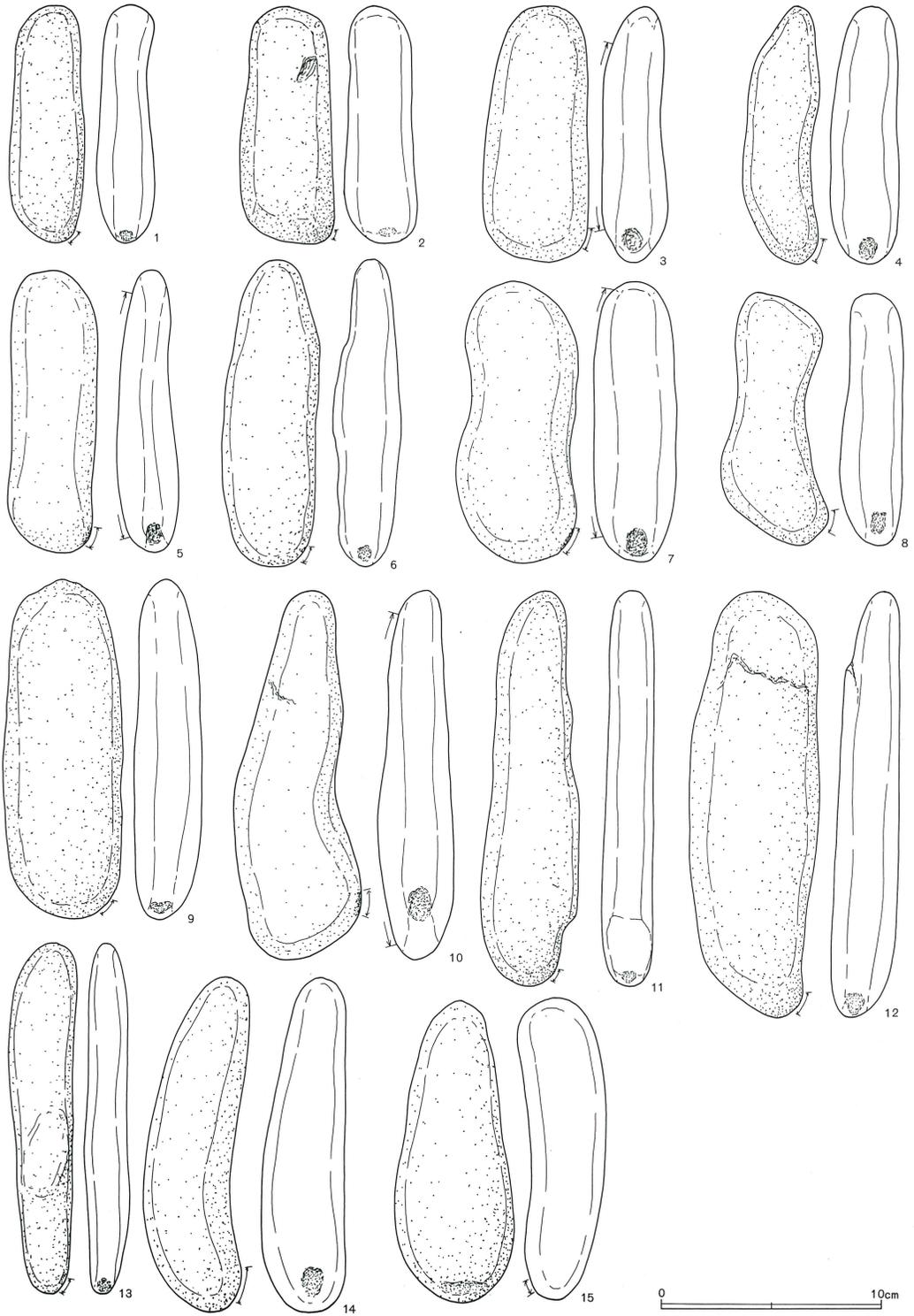
第167図 礫器 (3)



第168図 礫器 (4)

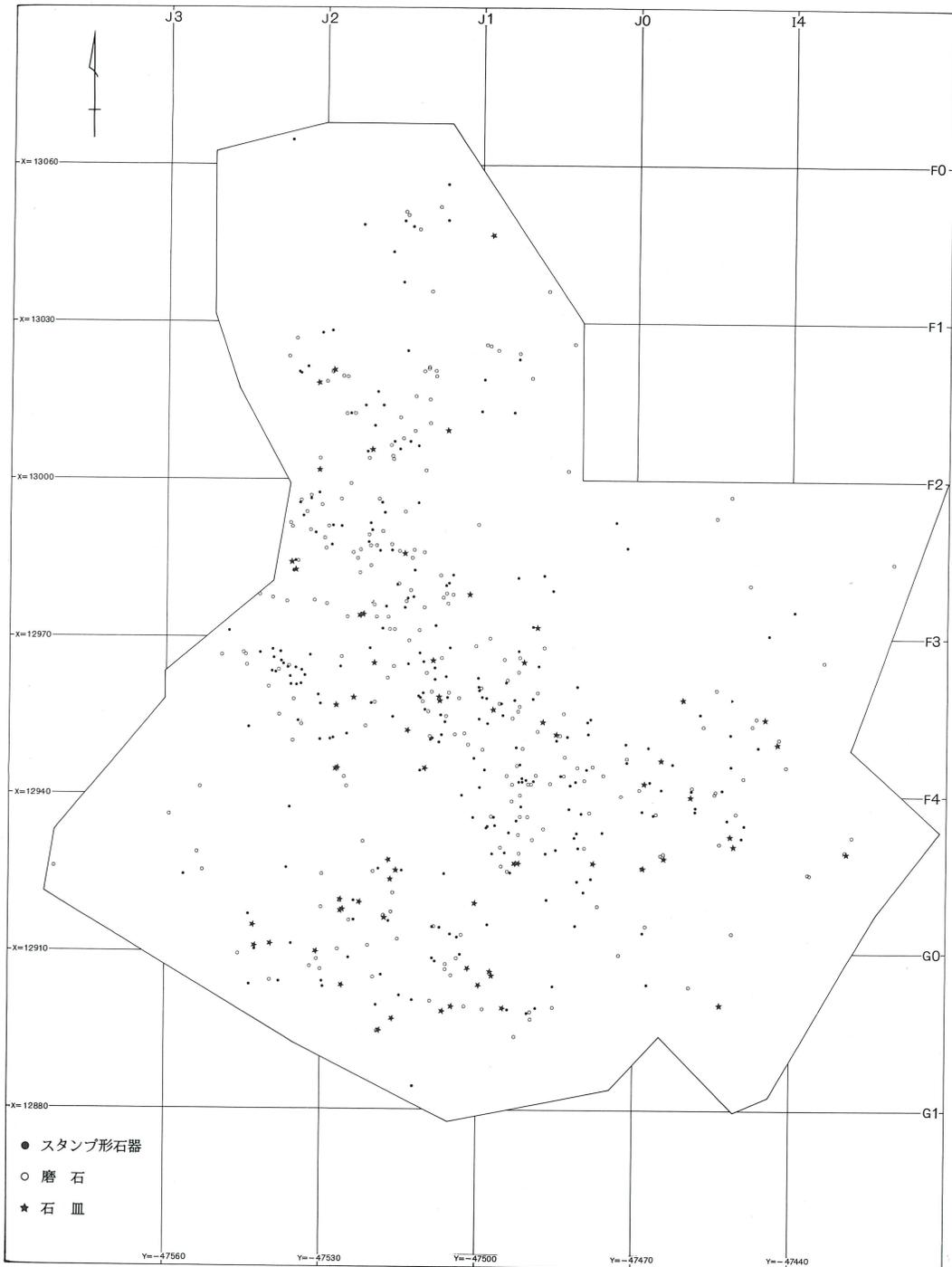


第169図 礫器 (5)

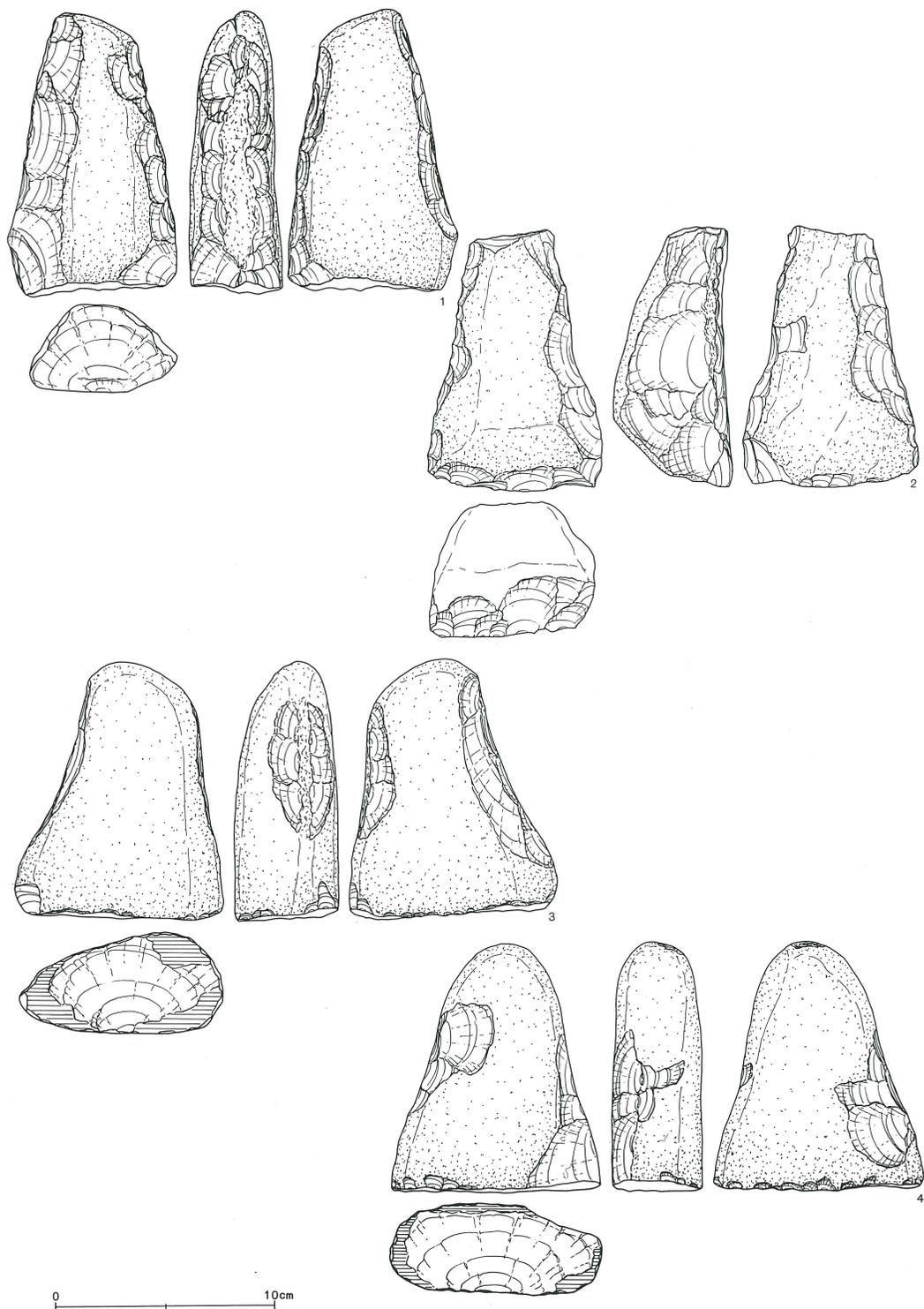


第170図 敲石

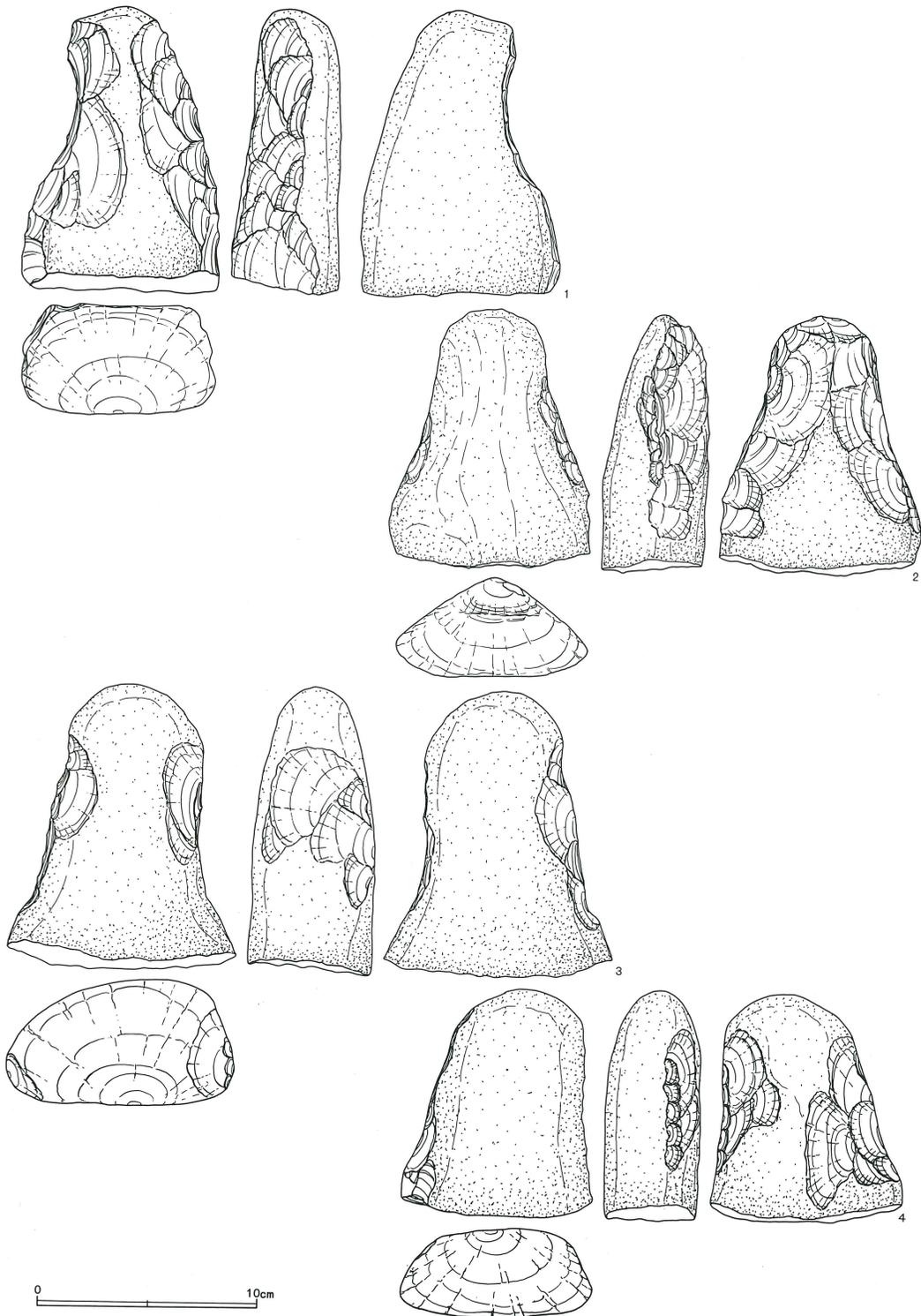
四反歩遺跡南地区



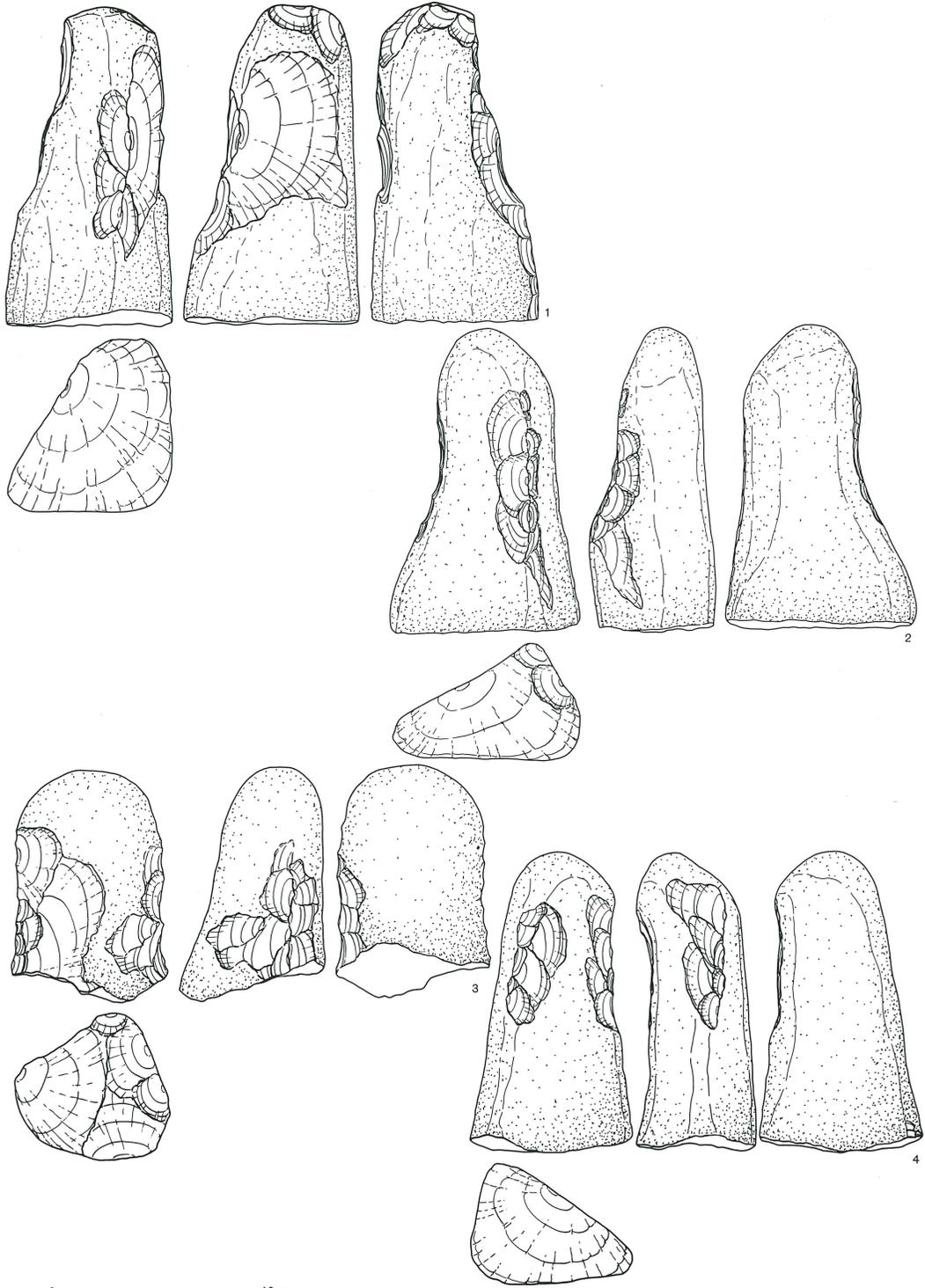
第171図 スタンプ形石器・磨石・石皿分布図



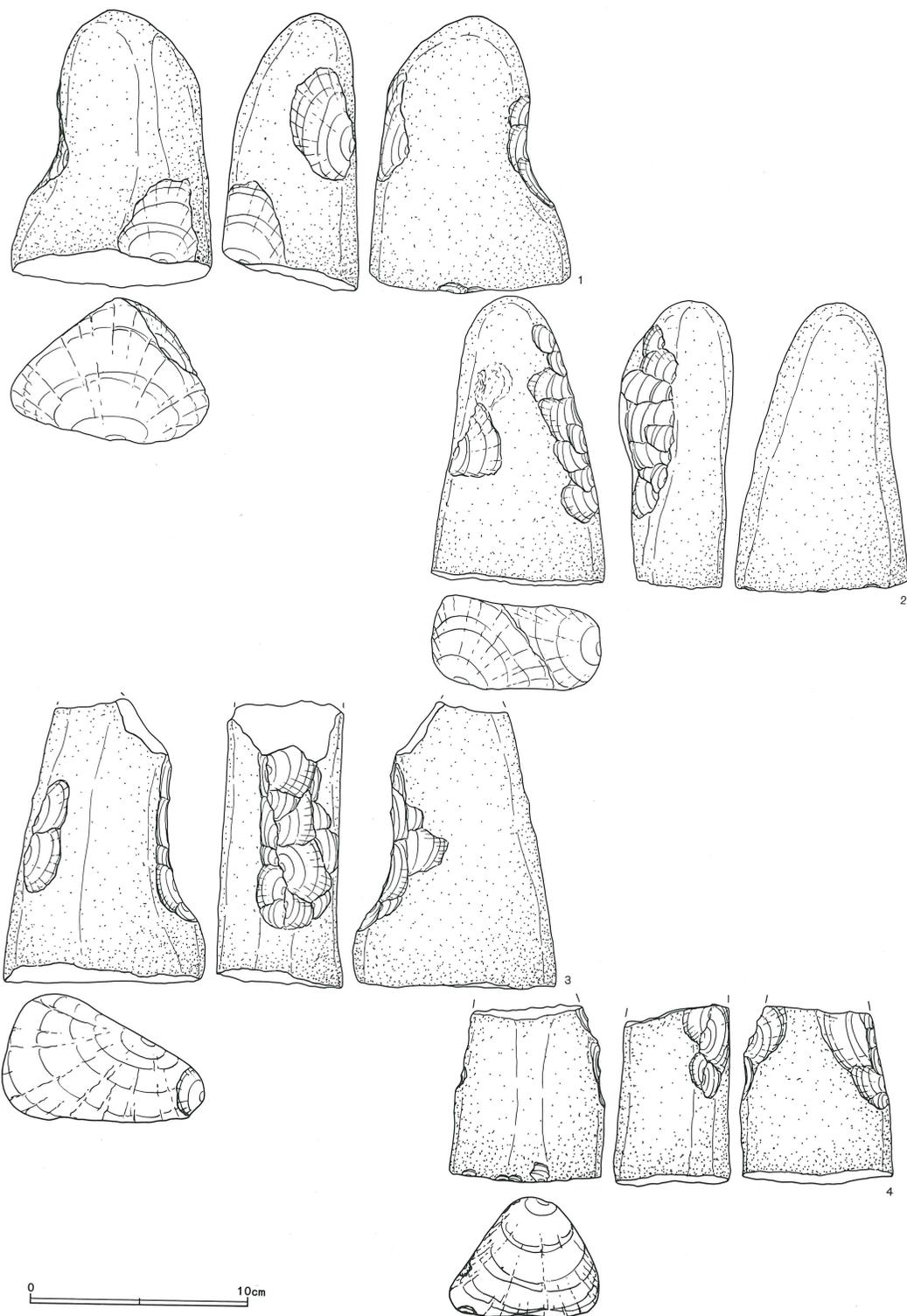
第172図 スタンプ形石器 (1)



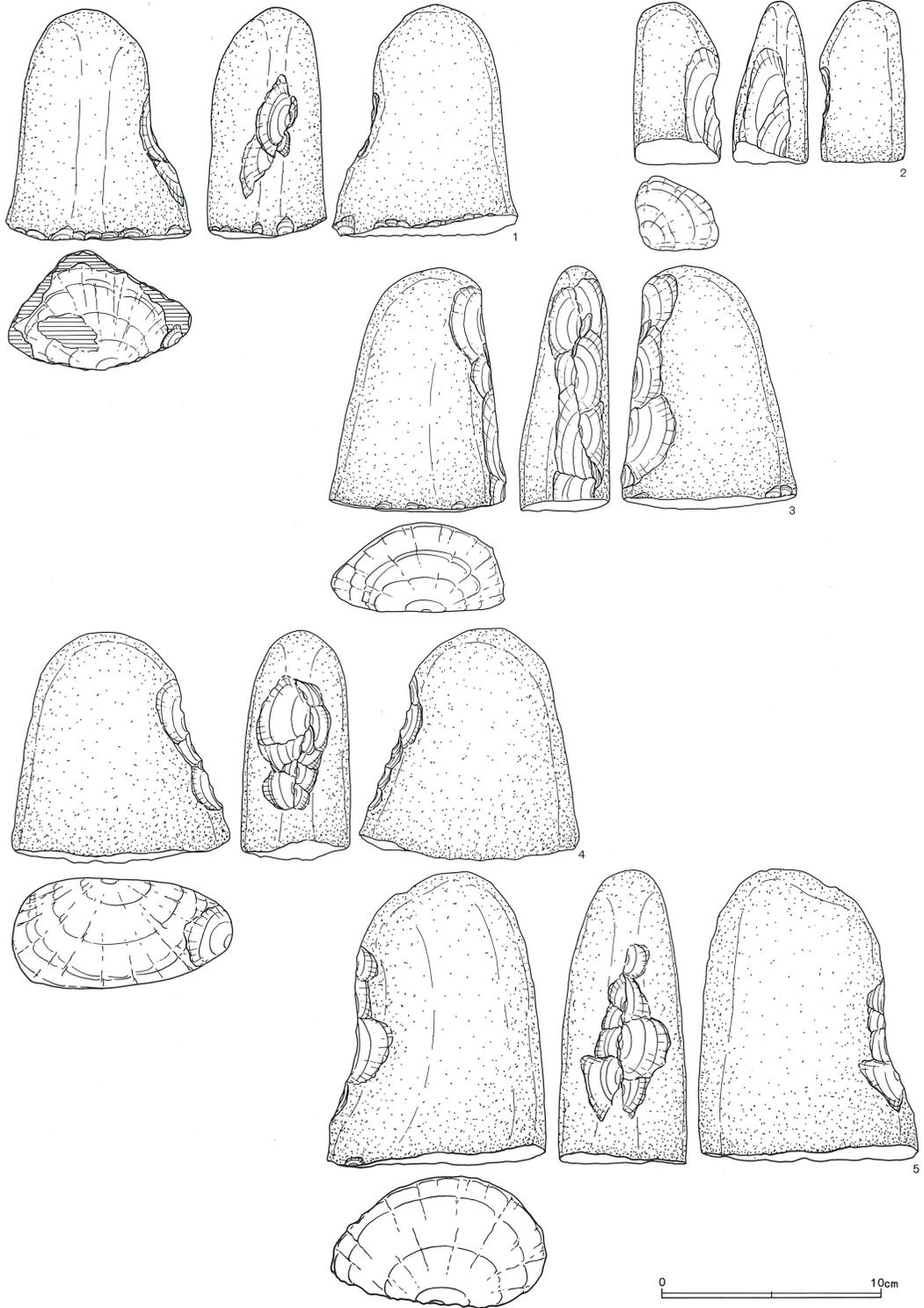
第173図 スタンプ形石器 (2)



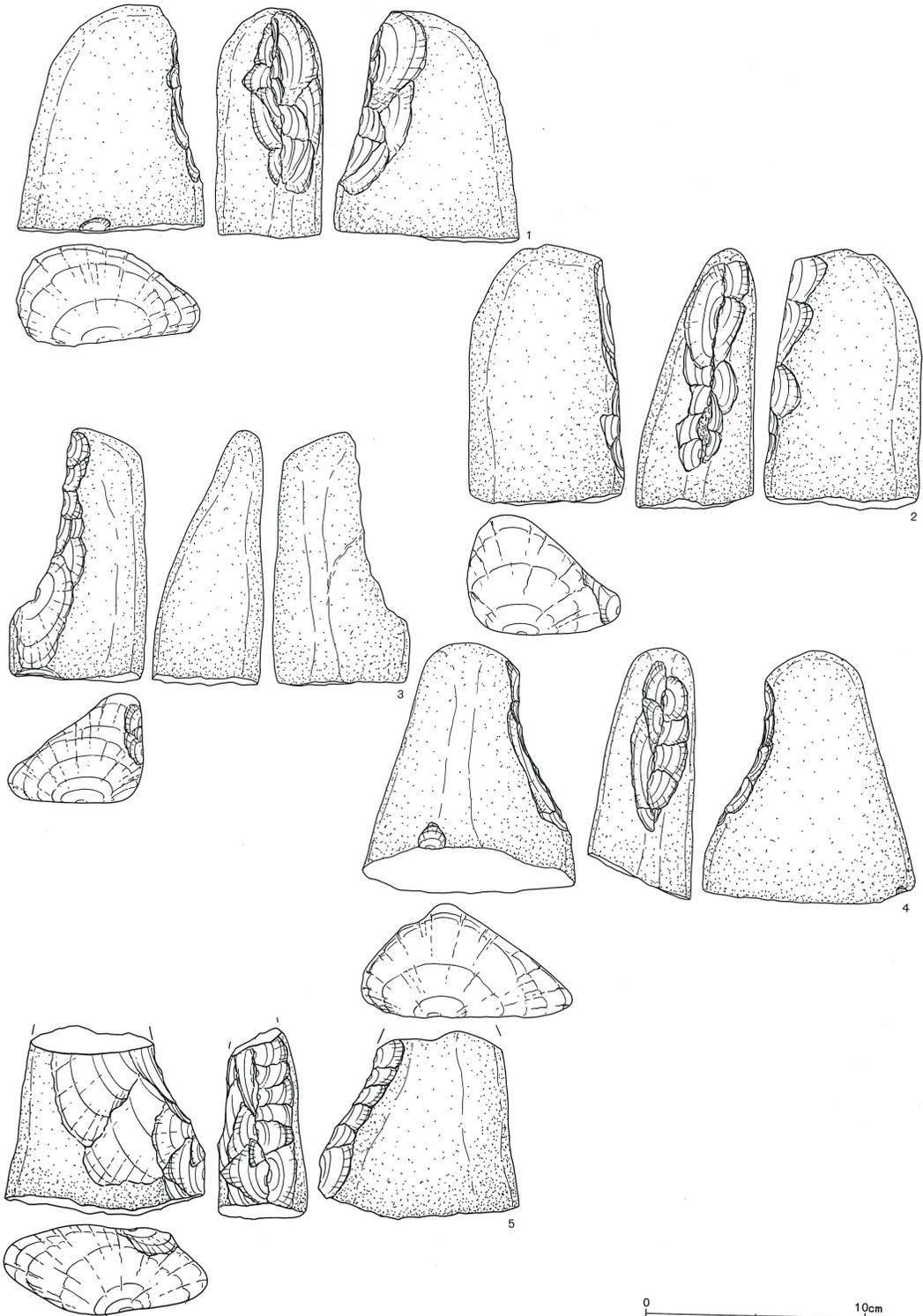
第174図 スタンプ形石器 (3)



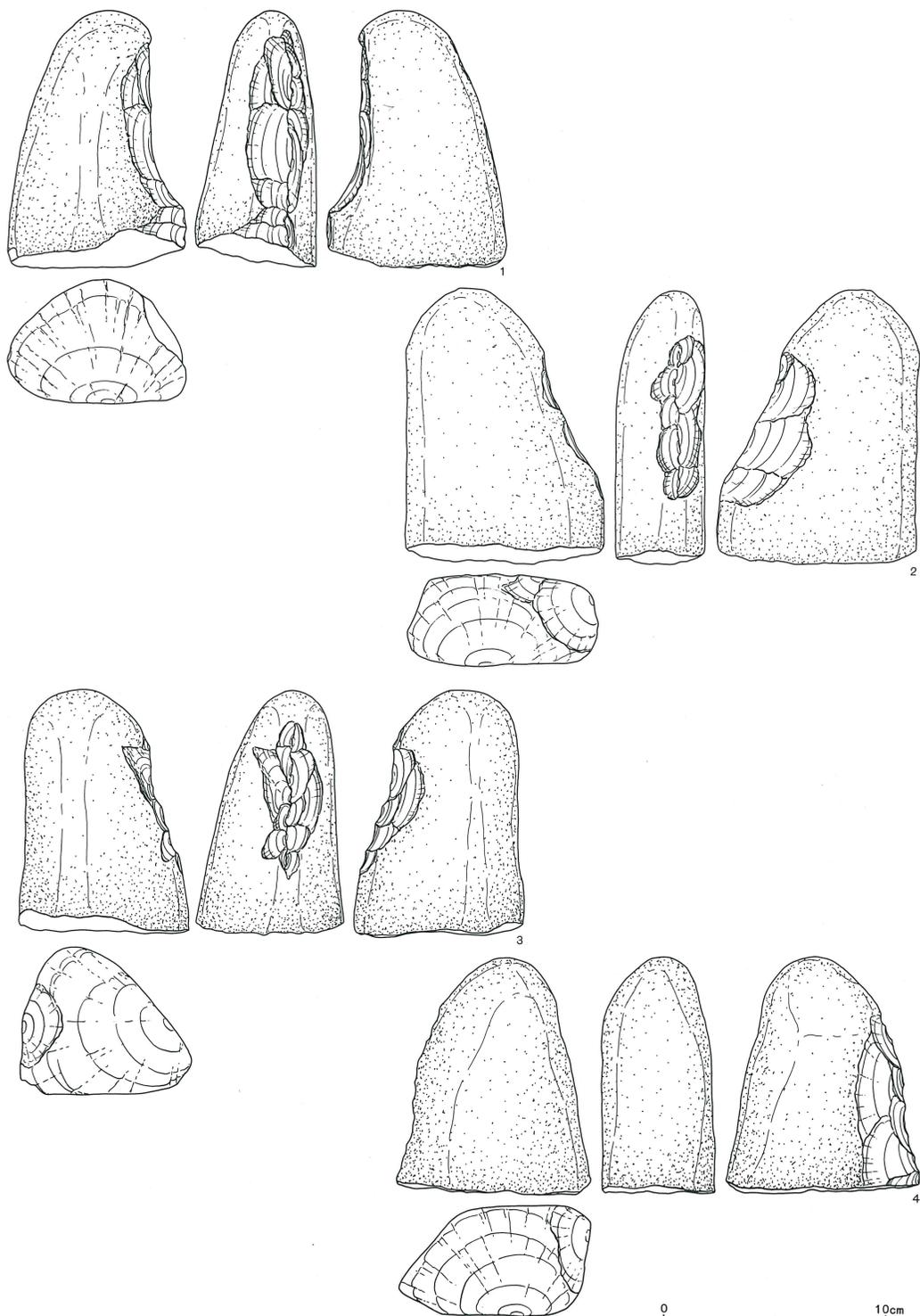
第175図 スタンプ形石器 (4)



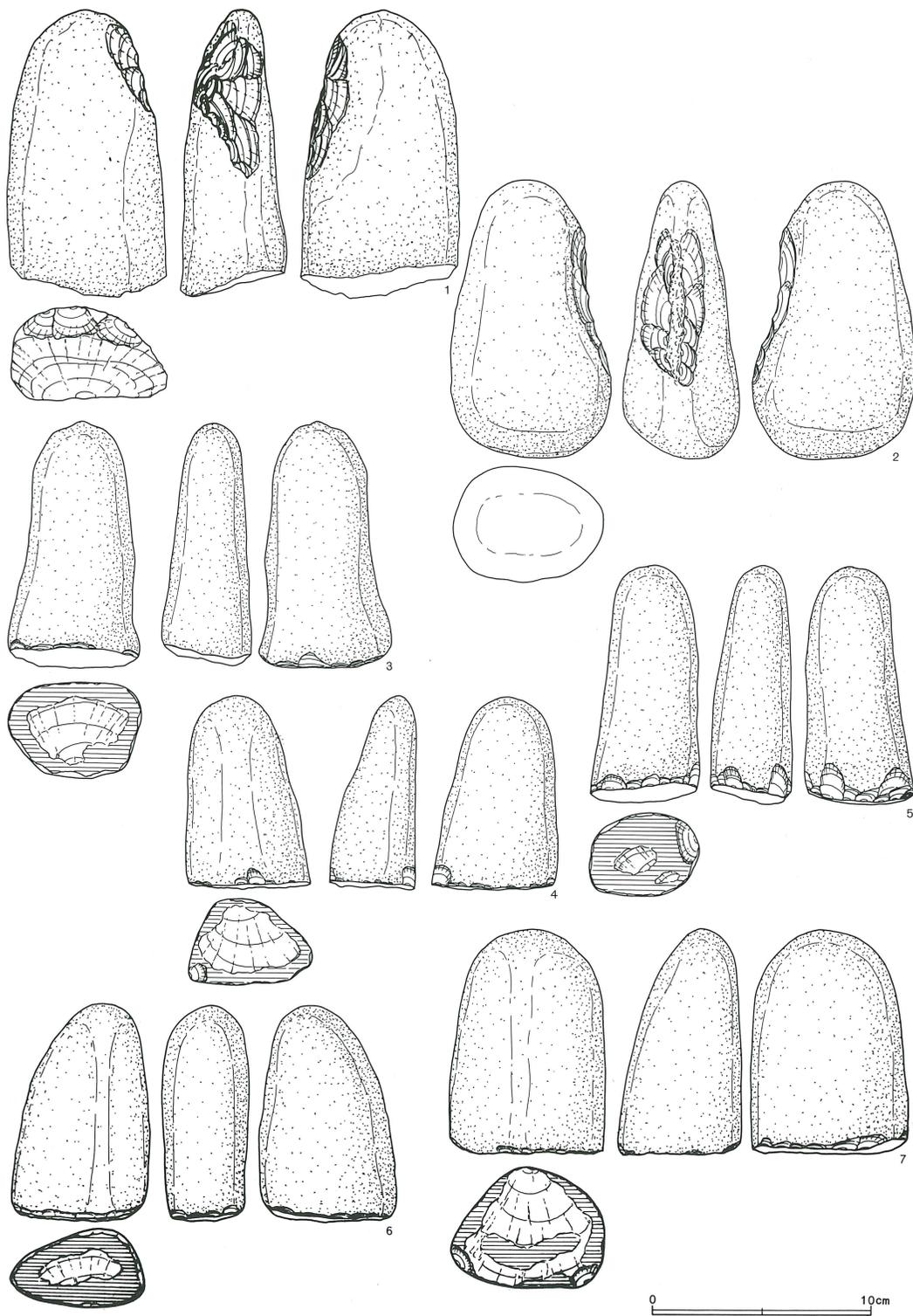
第176図 スタンプ形石器 (5)



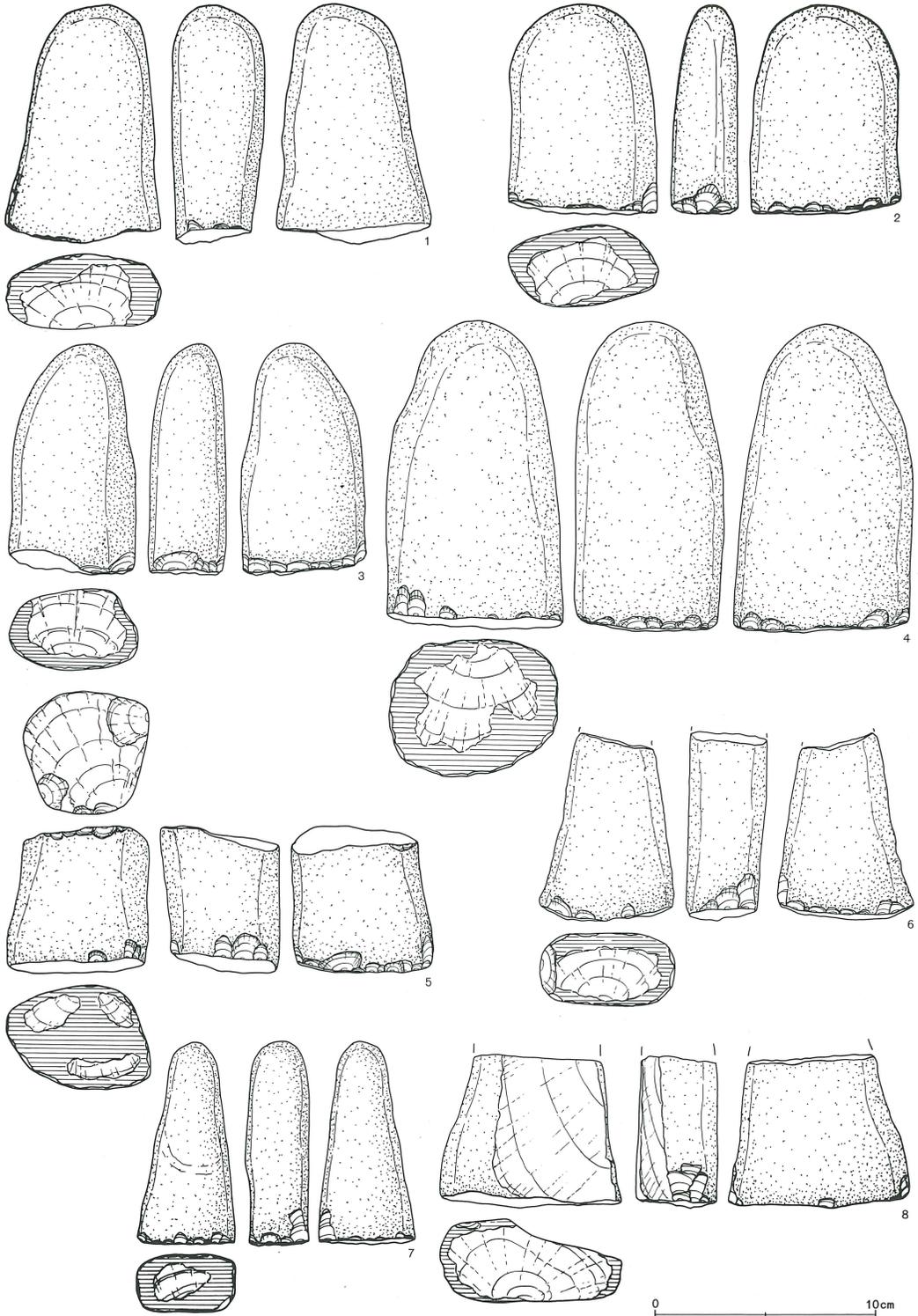
第177図 スタンプ形石器 (6)



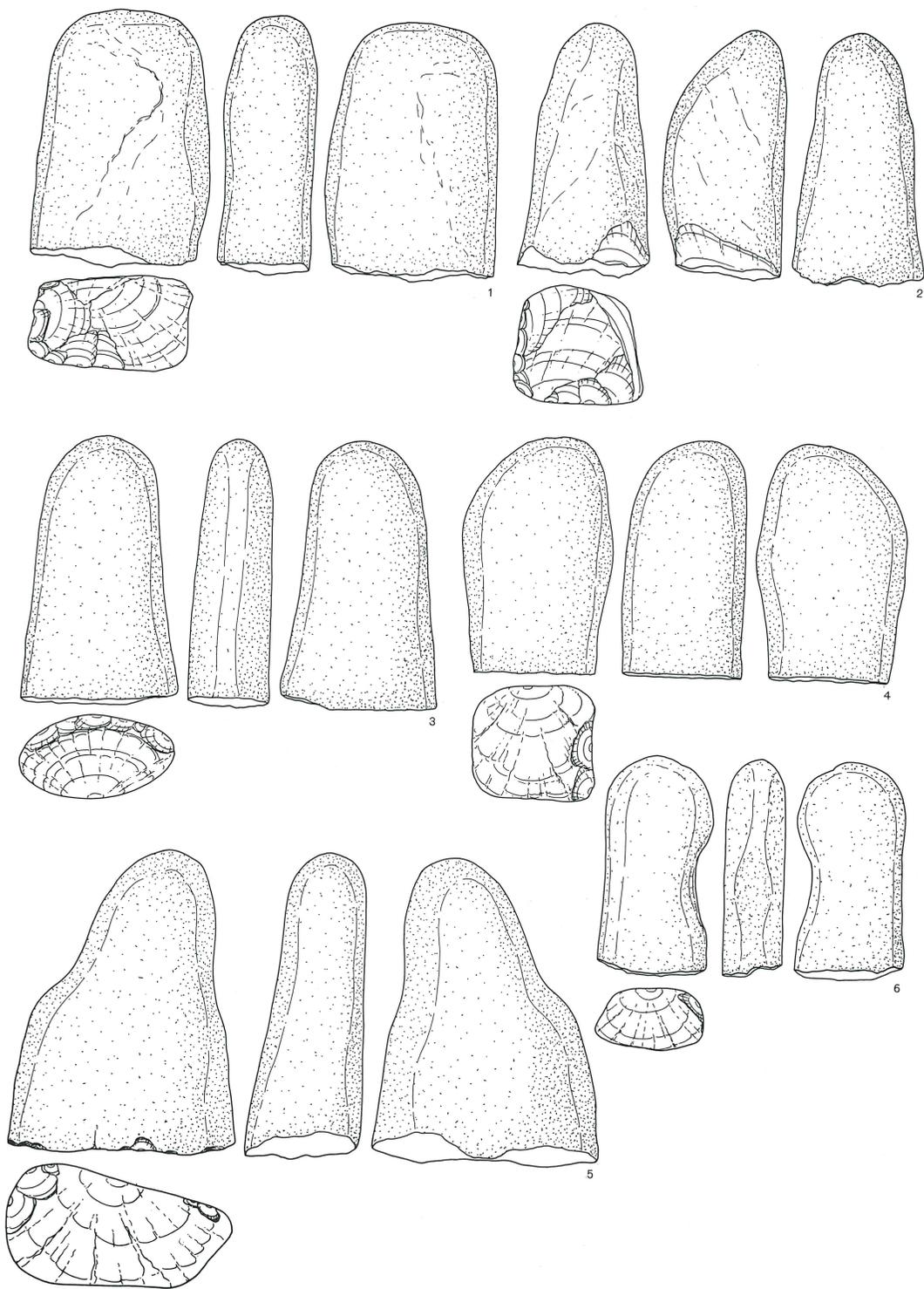
第178図 スタンプ形石器 (7)



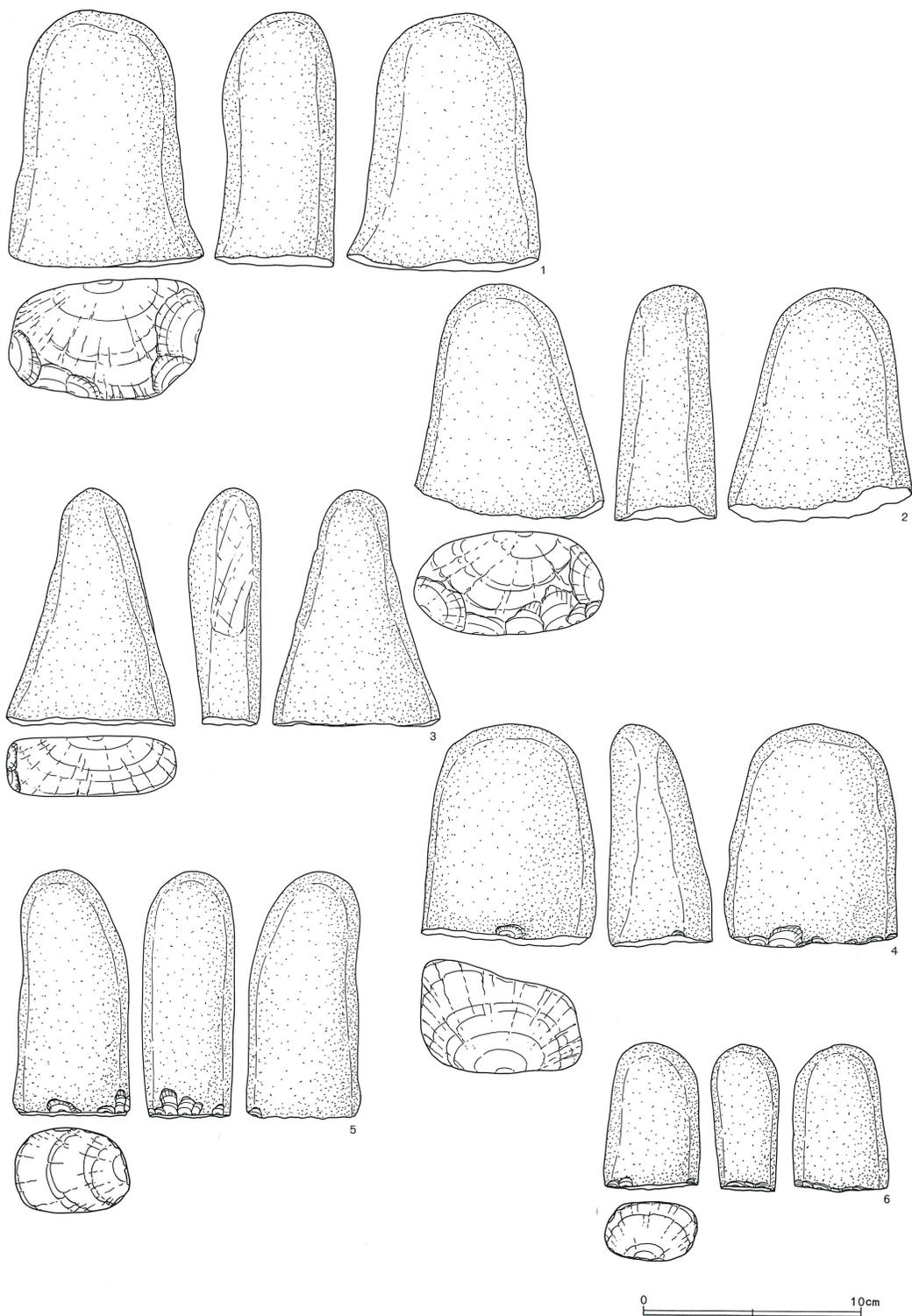
第179図 スタンプ形石器 (8)



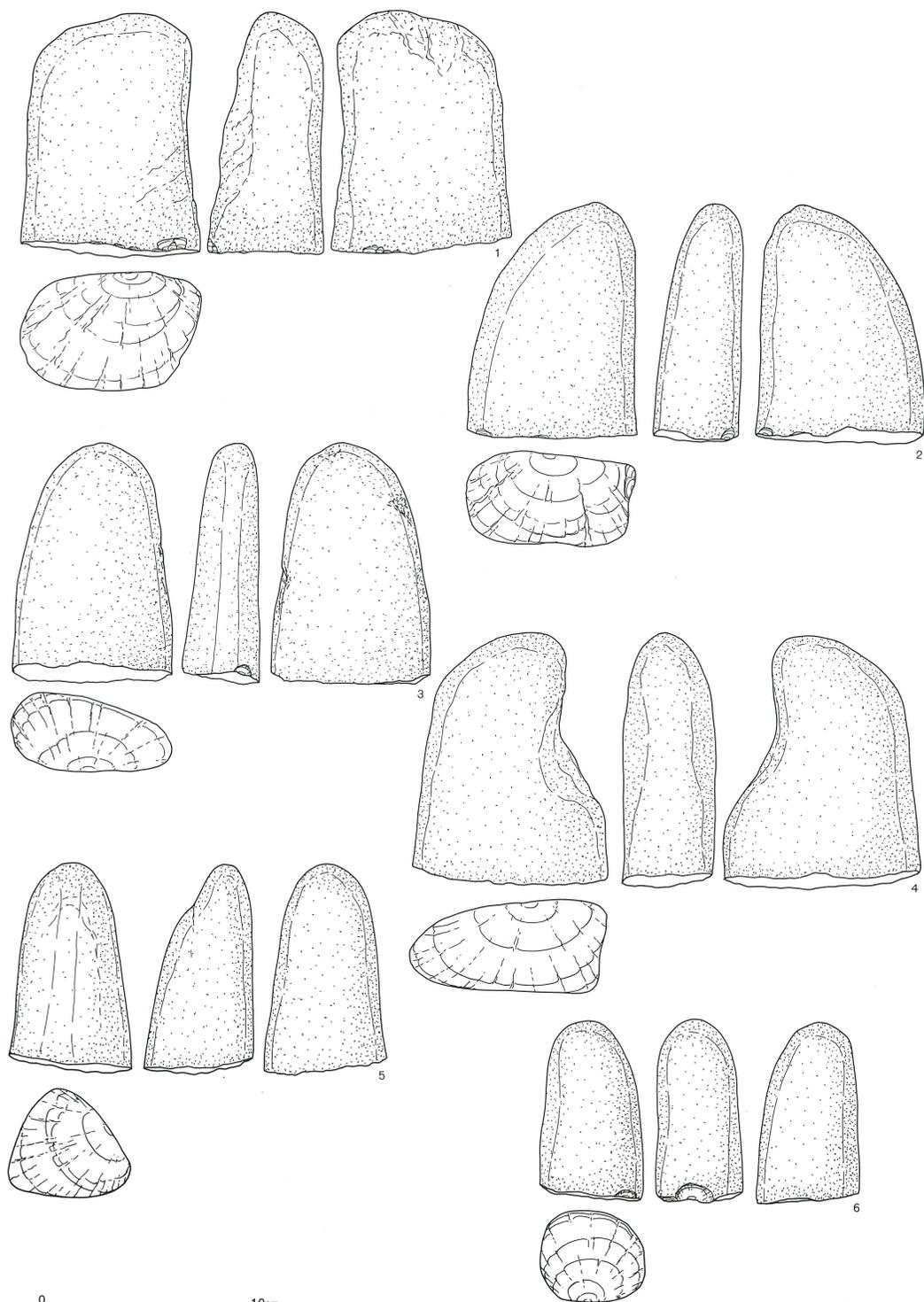
第180図 スタンプ形石器 (9)



第181図 スタンプ形石器 (10)



第182図 スタンプ形石器 (1)



第183図 スタンプ形石器 (12)